

2021(令和3)年度

障害者スポーツを取巻く 社会的環境に関する調査研究

— 障害者スポーツ選手キャリア、テレビ放送、選手認知度、ユニ★スポ体験の効果に着目して —



第1章

障害者スポーツ選手の
キャリア調査

第2章

テレビメディアによる
障害者スポーツ
情報発信環境調査

第3章

パラリンピアンに
対する
社会的認知度調査

第4章

シンポジウム2021
「パラリンピック報道とパラリンピアン
の認知度における社会発信の変化」

第5章

ユニ★スポ体験での
児童の意識変容調査

はじめに

YMFS 調査研究

障害者スポーツ・プロジェクト・リーダー

藤田紀昭

今年も歴史的な一年だった。コロナ感染拡大により 1 年延期された東京 2020 オリンピック・パラリンピックが開催された。選手、スタッフ、ボランティアはバブル方式と呼ばれる感染予防行動規制の中、PCR 検査を繰り返して感染を最小限に食い止めた。そして大会は一部、学校連携観戦をのぞき無観客で実施された。57 年ぶりに東京で開催されたパラリンピックには 161 の国と地域及び難民選手団から約 4400 人が参加した。これは前回の東京パラリンピックの約 8 倍の参加国、10 倍以上の参加選手数である。原則無観客で実施されたが、全世界ではのべ約 42 億 5 千万人がこの大会をテレビで視聴したという。国内でも 7 割近い人が観戦したという(日本財団パラスポーツサポートセンター調べ)。パラリンピック東京開催が決定した 2013 年以降、障害者スポーツの管轄が厚生労働省から文部科学省にかわったり、スポーツ庁が設置されたり、近年では NTC(ナショナルトレーニングセンター)を障害者も利用できるようになり(2014 年)、2019 年にはバリアフリー化されたナショナルトレーニングセンターイーストが建設されるなど様々な変化があった。今回のパラリンピックで日本が得た金メダル 13 個を含む 51 個のメダルはある意味これらの施策の集大成と言えるだろう。

一方で、コロナ禍の中、感染拡大のリスクを冒してまで大会を開催することの意義が厳しく問われた。大会開催の目的が見えにくいオリンピックと違い、パラリンピックでは選手一人ひとりのコメントも各種メディアの報道もその点を重視したものが多く、大会開催を好評価する人が大会後は約 7 割を占めた。

さて、本研究プロジェクトは 2012 年に立ち上がり、その後今年度まで障害者スポーツに関わる環境や人々の意識、そして選手のキャリアの変化をみてきた。これまで発表してきた調査結果は表に示すとおりである。

| | 2012(H24) | 2013(H25) | 2014(H26) | 2015(H27) | 2016(H28) | 2017(H29) | 2018(H30) | 2019(R1) | 2020(R2) | 2021(R3) |
|----------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|
| 大学における障害者SPの現状 | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| パラリンピアンへのスポーツキャリア | | ○ | | | | | | | | |
| 障害者スポーツ選手のスポーツキャリア | | | | | | | | ○ | ○ | ○ |
| コロナ禍におけるアスリート活動状況 | | | | | | | | | ○ | |
| パラリンピック指導者の現状 | | ○ | | | | | | | | |
| 障害者スポーツ競技団体活動 | | ○ | | | | | ○ | | | |
| 障害者SP選手発掘育成システム | | | ○ | | | | | | | |
| パラリンピアンへの社会的認知度 | | | ○ | | ○ | | ○ | | | ○ |
| ジャバラ選手のスポーツキャリア | | | | ○ | | | | | | |
| パラリンピックTV放送 | | | | | ○ | | | | | ○ |
| 地域現場の実態 | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| 障害者SP関連CF状況 | | | | | | ○ | | | | |
| チャレンジ！ユニ★スポーツケーススタディ | | | | | | | | ○ | ○ | ○ |

これらは 2012 年以降急激に変わってきた障害者スポーツの実態を各種データによって記録してきたものであり、東京2020パラリンピック大会のまさにレガシーの一つと言えるのではないかと自負している。今年度は 3 年目となる障害者スポーツ選手のキャリア調査、パラリンピック大会開催予定であった昨年度実施できなかったパラリンピックに関わるテレビ報道量、および選手の認知度調査、そして 3 年目となる、静岡県の子どもたちに対するいわゆるパラリンピック教育の実施と子どもたちの意識変化に関する調査結果を中心に掲載している。

第 1 章は障害者スポーツ選手のキャリア調査である。今年度は 17 人の選手にご協力いただき、インタビュー調査を実施した。調査を始めてから 3 年間で計 39 名のインタビュー調査を終えたことになる。障害のある人がスポーツを実施するようになるために必要な条件、例えばスポーツに対する情報入手、スポーツの場へのファーストアクセスができてきていることなどが徐々に明らかになってきている。女性選手や先天的に障害のある選手、脳性麻痺や視覚障害の選手のサンプルが少ないので、今後そうした選手へのインタビューも実施したいと考えている。

第 2 章はテレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査である。2016 年のリオパラリンピックに続いて 2 回目の調査実施となる。東京パラリンピックでは大会期間中の報道量が大幅に増えたものの、大会後 1 か月間の報道量は著しく減少していることが明らかになった。様々な社会的要件が影響していると思われるが、多くの国民がパラリンピックに触れる環境があったことは事実である。本資料が今後のパラリンピックレガシーに関する各種調査の基礎資料として活用されることを期待したい。

第3章はパラリンピアンに対する社会的認知度調査である。国枝慎吾選手の認知度が最も高く2番目は上地結衣選手という結果であった。また、今回のパラリンピックを約6割の人が視聴していたことが明らかになっている。

第4章は「テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査」および「パラリンピアンに対する社会的認知度調査」の結果を受け2021年12月17日に開催されたシンポジウムの模様を掲載している。パネリストは網本麻里氏(パラリンピアン・車いすバスケットボール)、千葉絵里菜氏(元NHKリポーター)、鉄谷美知氏(共同通信社)、山本篤氏(パラリンピアン・陸上競技)、コーディネーターは本プロジェクトメンバーの小淵和也(笹川スポーツ財団)であった。パラリンピック国内大会のメディアを通しての影響や今後の課題等について有意義なディスカッションがもたれた。

第5章はユニ★スポ体験での児童の意識変容調査である。パラリンピックに関する学習やボッチャの体験により児童の障害者や障害者スポーツに対する意識はポジティブに変化し、その効果は数か月後、1年後でも続いていることが報告されている。

これらの調査結果は東京パラリンピックの調査研究面から見たレガシーの提示の一つと言える。多くの方々の目に触れ、今後の障害者スポーツ研究、パラリンピック研究の基礎資料となれば望外の喜びである。また、調査として至らぬ点多々あると思う、忌憚のないご意見ご指摘をいただければ幸いである。

最後に、大変な社会状況の中、調査にご協力いただいた障害者スポーツ関係者、選手、児童生徒の皆さん、教員他の皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

■目次

| | |
|-----------------------------|-----|
| はじめに | 1 |
| 第1章 | |
| 障害者スポーツ選手のキャリア調査 | |
| 概要 | 8 |
| キャリア調査インタビュー一覧 | 11 |
| 選手別インタビュー | 17 |
| 第2章 | |
| テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査 | |
| 調査概要 | 80 |
| 要約 | 82 |
| 調査報告 | 84 |
| 1 メディア放送時間(単純集計) | 85 |
| 2 メディア放送時間(クロス集計) | 89 |
| 3 東京大会日本代表選手別の放送時間 | 96 |
| 4 まとめと考察 | 98 |
| 第3章 | |
| パラリンピアンに対する社会的認知度調査 | |
| 調査概要 | 101 |
| 要約 | 103 |
| 調査報告 | 104 |
| 1 パラリンピアンの認知度 | 105 |
| 2 東京オリンピック・パラリンピックの観戦 | 107 |
| 3 東京オリンピック・パラリンピックのチケット購入状況 | 111 |
| 4 障害者スポーツとの接点 | 113 |
| 5 クロス集計 | 118 |
| 6 まとめと考察 | 121 |

第4章

シンポジウム抄録集

| | |
|----------------------------------------------|-----|
| シンポジウム 2021「パラリンピック報道とパラリンピアン認知度における社会発信の変化」 | 125 |
|----------------------------------------------|-----|

第5章

ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査

| | |
|-------------------------------|-----|
| 1 チャレンジ！ユニ★スポについて | 146 |
| 2 プログラムの特徴 | 146 |
| 3 目的 | 147 |
| 4 2020年度の児童を対象とした調査(調査1) | 148 |
| 5 2019年度参加児童における1年後の追跡調査(調査2) | 156 |
| 6 まとめ | 163 |

| | |
|-----------------------------|-----|
| 附録1 パラリンピアンに対する社会的認知度調査 調査票 | 168 |
|-----------------------------|-----|

| | |
|-----------------------------|-----|
| 附録2 パラリンピアンに対する社会的認知度調査 集計表 | 177 |
|-----------------------------|-----|

| | |
|----------------|-----|
| 附録3 ユニ★スポ体験調査票 | 184 |
|----------------|-----|

■障害者スポーツ・プロジェクト

| | | | |
|------|-------|---------------------------------------|----------|
| リーダー | 藤田紀昭 | 日本福祉大学スポーツ科学部 | 教授 |
| メンバー | 小淵和也 | (公財)笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所 | 政策ディレクター |
| | 河西正博 | 同志社大学スポーツ健康科学部 | 助教 |
| | 齊藤まゆみ | 筑波大学体育系 | 准教授 |
| | 中森邦男 | (公財)日本パラスポーツ協会 日本パラリンピック委員会 | 参事 |
| 監修 | 浅見俊雄 | 東京大学・日本体育大学名誉教授 (公財)ヤマハ発動機スポーツ振興財団 | 理事 |
| 事務局 | 大庭義隆 | (公財)ヤマハ発動機スポーツ振興財団 | |

第1章

障害者スポーツ選手のキャリア調査

本調査は一昨年度から開始しており、選手一人ひとりの個人史ならびにスポーツキャリアに関わるインタビューを実施し、どのような環境、支援、他者との関わりの中でスポーツを始め、継続しているのかについて検討している。今年度は17名の選手に協力をいただき、オンラインもしくは対面で、それぞれ1時間から1時間半程度のインタビューを実施した。なお、事前に調査目的、個人情報の管理、調査の任意参加、調査協力を中止しても不利益が生じないこと等の同意を得た上で調査を実施した。協力いただいた選手は、男性13名、女性4名で、先天性障害3名、中途障害14名、年齢は21歳～62歳(平均40.0歳)であった。主な質問項目は、個人的属性、競技歴、障害発生からスポーツ開始までの経緯、障害受傷前のスポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響、障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境、障害者スポーツ継続に関する状況、スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境、今後のスポーツ実施意向等である。

なお、本調査は日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認(申請番号18-11)を受けて実施した。また、調査にあたっては、本プロジェクトメンバーのほか、日本福祉大学スポーツ科学部の兒玉友准教授の協力を得た。

まず、それぞれのスポーツ開始の局面に着目すると、前年度と同様に中途障害の選手を中心に、病院やリハビリテーションセンター等の医療職から、障害者スポーツに関する情報提供を受けるケースが多いことがわかる。また、今年度の調査報告において注目されるのが「義肢装具士」の存在である。調査対象者のうち6名が下肢切断の選手であり、そのほとんどがスポーツ開始に影響を与えた人物として義肢装具士を挙げていた。スポーツに関わる補装具として、車椅子や義足を挙げるができるが、義足は車椅子以上に個別性が高く、本人の体格や装着部位に合わせた調整が必要であると同時に、実施競技によって形状や機能が全く異なることから、障害者スポーツに関する経験や知識を持った義肢装具士との出会いが、その後のスポーツキャリアに大きな影響を与えているものと考えられる。

また、調査対象者の多くが挙げていたのが「ロールモデル」の存在である。「同じ切断の選手が会いに来てくれた。何ができるか質問したが『全部できるよ』と答えてくれた。」「義足の友人がいたことが大きい。彼は片足でスキーをし、普通に生活しているのを見ていたので、義足や切断に対する不安がなかった。」という言葉にみられるように、単なる憧れではなく、同様の障害があり、自分がこれから取り組んでいきたいと考えている競技を行っている選手と出会うことで、より具体的なスポーツキャリアをイメージできるようになるのではないだろうか。

先天性障害のある選手に関しては、前年度も指摘したとおり、学齢期の体育やスポーツ経験がその後のスポーツ活動の開始に大きな影響を及ぼすものと考えられる。本調査において、

先天性障害のある選手は少数に留まっているが、Kさんは、特別支援学校から普通学校へと転校後、体育授業はすべて見学であり、就職後もしばらくの間は運動する機会に恵まれなかったという。また、他の事例から、普通学校で体育や部活動に取り組んでいたとしても、「健常者と同じように取り組まなければいけない」という葛藤が生じていることが明らかになった。先天性の弱視であるPさんは幼少期から水泳に取り組み、中学校、高校ともに水泳部で活動し、「高校までは『すべて健常者と同じようにしなければならない』』と考えていたそうである。その後、大学入学後に障害者水泳のクラブに出会い、「自分の障害に合わせて練習すれば良い」と考え方が変わっていったという。

以上のKさん、Pさんの事例のみで普通学校での取り組みを一般化することはできないが、普通学校での体育や部活動の取り組みについて、両者は「(障害があるから)不参加」もしくは「(健常者と同じように)参加」という二者択一を迫られていたのではないだろうか。先天性障害もしくは幼少期から障害のある人々にとって、学校体育や運動部活動等は各々のスポーツキャリアの端緒となるものであり、非常に重要であるが、前年度調査も含め体育や部活動参加の困難性が垣間見られ、今後より詳細な検討が必要であると考えられる。

また、前年度の報告において、スポーツ活動の継続に影響を与えている要因として「アスリート雇用」を取り上げたが、アスリート雇用で競技に専念している選手たちが、現役引退後にどのようなセカンドキャリアを築いていくのかも注目される場所である。調査対象者のうち、国際レベルで活躍している選手数名が、現役引退後に「指導者」を志しており、現在の所属企業に籍を置いたまま指導に取り組みたいという意向を持っている一方で、「現在所属している会社とは～(中略)今後のことは詰め切れていない」という言葉も見られた。2013年の東京パラリンピック招致決定後、アスリート雇用の選手が増加してきたが、東京パラリンピック終了後にどのような変化が生じていくのであろうか。所属先企業が現役引退後もその選手を継続雇用するとしても、スポーツ指導を本務とするのではなく、「一般社員」として社業に専念しなければならない、また、契約時に所属先企業・選手間のコミュニケーションが十分に図られていなければ、現役引退後に契約満了となる可能性もあるのではないだろうか。

前述のように、スポーツの開始や継続局面において「ロールモデル」の存在が非常に重要であり、そのような立場の選手たちが引退後に指導者となることは、障害者スポーツの普及や競技力向上の一助となっていくものと考えられる。このようなセカンドキャリアに関しては、現役時代と同様に企業の何らかの支援が必要になるものと考えられる。

東京パラリンピックに向けて拡大してきた「アスリート雇用」について、企業の採用意欲が今後拡大・縮小していくかという議論のみならず、引退後のアスリートのキャリア支援を含み込

んだ制度として定着していくのかが注目されるところである。

本調査結果より、これまでと同様に医療職からの障害者スポーツに関する情報提供の重要性が指摘され、特に下肢切断者においては「義肢装具士」との出会いがターニングポイントになっていることが明らかになった。また、「ロールモデル」の存在がその後のスポーツキャリアの形成に大きな影響を与えているものと考えられる。先天性障害のある選手に関しては、特に普通学校在学時の体育やスポーツ活動への参加に困難性がみられ、次年度以降更なる検討が必要である。また、アスリート雇用の選手が増加してきている中で、企業からの各種支援が現役中のみに留まるのか、引退後のセカンドキャリアを含むものなのかについて、今後事例検討を進めていきたいと考えている。

(河西正博)

■図表1-1 キャリア調査インタビュー一覧

※パラスポーツ開始時の競技と現在の競技が違う場合は最初の競技開始時について記載
 ※一般雇用には障害者雇用を含む

| 項目 | 21-A | 21-B | 21-C |
|-------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査年度 | 21 | 21 | 21 |
| 識別記号 | 23 | 24 | 25 |
| 生まれた年 | 1990 | 1982 | 1985 |
| 性別 | 男 | 男 | 男 |
| 居住地域 | 東海 | 関西 | 東海 |
| 調査時身分 | 一般雇用 | 選手雇用 | 選手雇用 |
| 障害発生年齢 | 19 | 17 | 19 |
| 障害内容 | 肢体 | 肢体 | 肢体 |
| 障害程度 | 重度 | 中度 | 重度 |
| 学校種別 | 普通 | 普通 | 普通 |
| 現在実施競技 | ボッチャ | 陸上競技 | 車いすラグビー |
| 競技開始年齢※ | 22 | 20 | 20 |
| レベル | 国内上位 | 国際入賞 | 国際入賞 |
| パラスポーツ開始時の重要な他者※ | ・見学に行ったツインバスケットの選手 | ・PT(理学療法士) ・義肢装具士 | ・車いすラグビー日本代表の強化に関わっていたリハビリテーションセンターでスポーツ指導を担当していた先生 ・体験会で出会った車いすラグビー日本代表 ・車いすラグビーのDVD |
| パラスポーツ開始場所※ | ・地元ボッチャクラブ(市内公共センター) | ・スノーボード:山(スキー場) ・陸上競技:N市競技場(クラブメンバーとして) | ・リハビリテーションセンター |
| パラスポーツ情報提供者※ | ・見学に行ったツインバスケットの選手 ・地元ボッチャクラブ | ・スノーボード雑誌 ・専門学校の先生 ・PT(理学療法士) ・義肢装具士 | ・リハビリテーションセンターでスポーツ指導を担当していた先生 |
| パラスポーツ開始場所へのアクセス※ | ・本人 | ・本人 | ・本人 |
| パラスポーツ開始前のスポーツの影響 | ・ポジティブ | ・ポジティブ | ・ポジティブ |
| パラスポーツ継続時の重要な他者 | ・両親 | ・一緒に練習しているレベルが同じくらいの学生達 ・陸上部指導者(大学・大学院の指導教員) ・専門学校の先生 | ・家族 |
| パラスポーツ継続状況 | ・週末の土日に練習1回4時間程度している。(場所は自宅、近隣の福祉法人が持つ体育館。廃校になった学校の体育館)大会にはコロナがなければ年に2~3回出ている。 ・会社にはボッチャをやっていることを了解してもらっており、ボッチャの活動も勤務時間とみなしてもらっている。 ・講演やデモンストレーションで小学校などに行っている。 ・継続していく上で大変なのは練習場所の確保(練習場所がない・少ない) | ・専門学校:中部地区のクラブチームで ・大学:陸上部で他の学生と一緒に練習 ・S社:午前中から午後2時までは勤務、母校の大学施設を利用して練習。その後学生とともに16時20分~練習。土日遠征も勤務扱い。遠征費等はほぼ会社がカバーしてくれていた。 ・現在:母校の大学施設で練習。(コロナ禍で)午前中練習、月・水・金は走って練習+午後・ウェイト、火・土はウェイト練習とプール。木はプールだけ。日曜は完全休養。午後は時に講演など。 | ・2008年から関東の車いすラグビーチームでプレーを始め、2018年頃から西日本のチームに移籍し、2011年から現在まで日本代表選手として活動。 ・現在は週3日から5日程度、日本財団パラアリーナで関東圏のチームのメンバーと練習をすると同時に、月に1回程度所属チームの練習に参加。 |
| 支援 | ・なし | ・勤務先、スポンサー、公的機関 | ・勤務先、公的機関 |
| 将来ビジョン | ・ボッチャはこれからも上を目指して続けていく。 ・パリのパラリンピックに出場したい。 | ・会社に所属しつつ指導者として後進の指導にあたれるといいと考えている。 ・ロサンゼルスパラリンピックでゴルフが入るのでそれを目指したい。 | 「パラリンピックで金メダルを取りたい」という思いが強いので、2024年のパリ大会、2028年のロサンゼルス大会になるかわからないが、そこに対する情熱は常に持っている。 |
| その他特記事項 | ・受傷前スポーツをやっていたことは、スポーツ(ボッチャ)を始める際にはプラスに働いていると思う。 ・講演やデモンストレーションで小学校などに行って「すごい」と、子どもたちに言われるととても嬉しい。ボッチャを通して外(他人)との関わりが持てるのがとても大きい。 ・両親も年齢を重ねてきたのでどこかで介助者をチェンジしなくてはいけない。最近では、ヘルパーをお願いしている。 | ・パラリンピック国内開催により、企業の注目も上がり、プロとしての活動が可能になっている。 ・今後はプロの指導者としての活動の在り方を模索。 ・同様の障害を持っている子どもたちには、体育の授業で競技用義足が使える環境を整備すべきという意見が聞かれた。 ・パラスポーツ普及には、パラリンピック終了後に引退する金メダリストがいれば、テレビ出演等露出が多くなり、普及につながるという意見を述べられた。 | ・競技開始当初、十分な支援を受けられていなかったが、競技実績を積み上げると同時に、東京パラリンピック招致の影響等により、金銭的な支援や練習環境は充実してきている。 ・強化指定選手への支援は充実してきているが、若手への支援が十分ではなく、用具や金銭的な支援が必要である。 ・引退後も車いすラグビーの魅力を発信する活動を続けていきたいと考えている。 |

| 項目 | 21-D | 21-E | 21-F |
|-------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査年度 | 21 | 21 | 21 |
| 識別記号 | 26 | 27 | 28 |
| 生まれた年 | 1980 | 1991 | 1979 |
| 性別 | 男 | 男 | 男 |
| 居住地域 | 甲信越 | 関東 | 関西 |
| 調査時身分 | 選手雇用 | 選手雇用 | 一般雇用 |
| 障害発生年齢 | 18 | 15 | 0 |
| 障害内容 | 肢体 | 肢体 | 肢体 |
| 障害程度 | 中度 | 中度 | 重度 |
| 学校種別 | 普通 | 普通 | 普通 |
| 現在実施競技 | 陸上競技 | 陸上競技 | 車いすバスケットボール・パラクライミング |
| 競技開始年齢※ | 19 | 16 | 13 |
| レベル | 国際入賞 | 国際入賞 | 国際入賞 |
| パラスポーツ開始時の重要な他者※ | ・主治医 ・義肢装具士 ・コーチ ・看護師(のちの妻) | ・入院先の義肢装具士 ・高校の体育の教員 | ・母親 ・子どもたち対象の視覚障害のクライミング体験を実施した時に、講師として招聘した視覚障害クラス日本代表(パラクライミング) |
| パラスポーツ開始場所※ | ・大学の陸上部 | ・高校(陸上部) | ・市民体育館 |
| パラスポーツ情報提供者※ | ・主治医 ・義肢装具士 | ・義肢装具士 ・入院先のリハビリに携わっていた先生方 | ・母親 |
| パラスポーツ開始場所へのアクセス※ | ・本人 | ・本人 | ・母親 |
| パラスポーツ開始前のスポーツの影響 | ・ポジティブ | ・なし | ・なし |
| パラスポーツ継続時の重要な他者 | ・経済的基盤となるスポンサー(所属企業)等の出現 | ・同じ義足の陸上選手 ・現在の所属先 ・障害のない仲間たち ・義足メーカー | ・大学時代の同級生(現:選手兼ヘッドコーチ) ・子ども対象の視覚障害のクライミング体験をした際、講師だった視覚障害クラス日本代表選手 ・応援してくれる人、応援したい沢山のクライマー |
| パラスポーツ継続状況 | ・場所:大学でやっていた時は毎日練習したい時に大学施設が使えた。地元に戻ってきてからはそれが難しい。 ・指導者:競技を行う時期によって義肢装具士が重要な他者であった時期もあるし、その後は競技のコーチの重要性が高まってきた。競技コーチは2004年以降指導してもらっている。 | ・2016年から現在の所属へ転職し、所属先の支援を受けながら競技を継続。 ・現在は、週5日ほど師事しているコーチが主宰しているクラブで、障害のない選手とともに練習、トレーニングを行っている。 | ・車いすバスケットボールは週に2~3日程度、パラクライミングは週3日程度練習をしている。 ・仕事と競技を両立しており、パラクライミングに関しては日本代表の活動で海外遠征の機会があり、有志の寄付等はあるものの勤務先や協会からの支援はなく、国際大会へのエントリーを増やしたいと考えているが苦慮する部分がある。 |
| 支援 | ・勤務先 | ・勤務先 | ・なし |
| 将来ビジョン | ・今後も現役を続けるが指導者としての道も切り拓きたい。指導者としても勉強をしながら、選手とともに高めしていきたい。さらに、一般人と同じ土俵でマスターズでの競技(義足側で踏み切らなければ出場できるという約束を取り付けている)を考えている。 | ・100mを10秒台で走る。 ・「パラ陸上選手」ではなく「陸上選手」として認められたいという思いがあり、純粋に足が速くなりたい。 | ・車いすバスケットボールに関しては「日本選手権で何位になる」といった目標はなく、求められるうちは続け、年を取ってからでもシニアチームから声がかかれれば参加したい。自分自身の「居場所」であり、楽しくバスケットボールを続けていきたい。 ・パラクライミングに関しては、2023年の世界選手権(スイス)で金メダルを取りたい。また、パラリンピックの追加種目になるため、競技人口を増やすべく国内外で普及に関わる活動をしていきたい。 |
| その他特記事項 | ・急性期、リハビリ期を担当する医師がパラスポーツの知識を持っていることは非常に大きい。予後にスポーツを実施することを想定した手術や治療ができる。 ・スポーツ継続に関して、自らスポンサー探し・契約をするなど主体的な活動の成果がここに見られる。 ・パラスポーツ普及には、障害を持ったあとも地元でスポーツができる受け皿が必要。施設や指導者がいても仲間がいなくてなかなか続かないと考えている。 | ・競技用義足は高価であり、これからスポーツを始める人を対象とした支援制度が必要ではないだろうか。 ・高校、大学と陸上部で競技を継続し、仲間たちが自分を特別扱いせず接してくれたことが、楽しく陸上を続けてこられた一因であった。 ・義足に関しては知識を持った医師や義肢装具士等に出会えるかどうかも重要であり、足の切断についてもスポーツに適した・適していない方法があるので、適切な医療職と出会えるかどうかも非常に重要である。 | ・障害のある子どもたちがスポーツを始めるにあたって、特別支援学校や特別支援学級、病院等への情報提供が十分ではなく、上手くマッチングできていない印象を受ける。 ・「いいね、やってみよう」と言ってもらえるような、「否定しない大人」に出会えるかどうかが必要である。 |

| 項目 | 21-G | 21-H | 21-I |
|-------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査年度 | 21 | 21 | 21 |
| 識別記号 | 29 | 30 | 31 |
| 生まれた年 | 1998 | 1990 | 1966 |
| 性別 | 女 | 男 | 男 |
| 居住地域 | 関西 | 関東 | 東海 |
| 調査時身分 | 選手雇用 | 選手雇用 | その他 |
| 障害発生年齢 | 14 | 21 | 30 |
| 障害内容 | 肢体 | 肢体 | 視覚 |
| 障害程度 | 中度 | 中度 | 重度 |
| 学校種別 | 普通 | 普通 | 普通 |
| 現在実施競技 | 陸上競技 | 陸上競技・スノーボード | 柔道・陸上競技・自転車競技・水泳 |
| 競技開始年齢※ | 15(高校1年) | 24 | 31 |
| レベル | 国際入賞 | 国際入賞 | 国際入賞 |
| パラスポーツ開始時の重要な他者※ | ・医師 ・同じ切断の陸上競技選手 ・両親 ・SEKAI NO OWARI | ・リハビリテーションセンターPT ・義肢装具士 ・ランニングクリニックで出会ったパラリンピアン | ・公民館で柔道を教えていた先生 ・自分の子どもたち |
| パラスポーツ開始場所※ | ・地元の義足の人の陸上競技クラブ | ・東京にある切断の陸上競技クラブ(都内陸上競技場) | ・町の柔道場(公民館) |
| パラスポーツ情報提供者※ | ・同じ切断の陸上競技選手 | ・リハビリテーションセンターPT・義肢装具士 ・ランニングクリニックで出会ったパラリンピアン | ・市役所 |
| パラスポーツ開始場所へのアクセス※ | ・本人 | ・本人 | ・本人 |
| パラスポーツ開始前のスポーツの影響 | ・ポジティブ | ・なし | ・ポジティブ |
| パラスポーツ継続時の重要な他者 | ・同じ義足の走り幅跳び競技者 ・ライバルの存在 | ・一緒に練習をしているパラリンピアン ・妻 ・所属会社 | ・妻 ・子ども ・使用するスポーツ施設スタッフ |
| パラスポーツ継続状況 | ・大学1年次に2016年リオパラリンピック出場 ・その後走り幅跳び専門のコーチに師事 ・高校3年生の時から企業と契約し、プロとして活動 ・21年4月からS社所属 ・練習期は午前中に練習、午後ウエイトトレーニングやプール。出社する日は週1回、午後2時半まで仕事、その後練習。 ・コロナ前だと、年間10~20試合くらい、海外遠征は年に3回くらい。多い時で4回。 | ・現在は競技中心の生活。 ・月・水・金・土が午前中走る練習。月・火・水・金・土に午後、ウエイトトレーニング。火曜と木曜はプール。日曜はオフ。 ・コロナ前であれば年間6~7試合、スノーボードは1試合出場。 ・現在所属の会社の理解が大きい。練習環境のサポート、社員の応援など。 | ・視覚障害者となったあと、柔道を再開。シドニーパラリンピックで入賞。その後、自転車や陸上競技(投擲)を実施。 ・練習場所(柔道、自転車、陸上、スポーツクラブ)について、障害を理由に拒否され続けたが、何度も通い人間関係を構築するなど粘り強く交渉し、最終的に使わせてもらえるようになった。 ・妻が働き生活を支えてくれているので、競技に専念している。現在は、投擲専門の指導者に指導してもらっている。 |
| 支援 | ・勤務先、スポンサー | ・勤務先 | ・なし |
| 将来ビジョン | ・陸上は自分の体が「あ、もう無理や」と思うまでやりたい。 ・東京大会が終わって悔しい気持ちがあるのでパリこそはと思っている。それが終わればきつとロスこそはと考えていると思う。 | ・今後とも夏と冬の競技を続けていきたい。もっとレベルを上げたい。ライバル選手を超えたい。 ・引退後は子どもたちの指導・育成ということがあるかもしれないが、それをやるのにもまずは今の競技力をアップさせしっかりと結果を出すことが大切だと考えている。 ・今の会社は非常に理解があるので、スポーツを通じた社会貢献を会社所属でやるのではと今は考えている。 | ・105歳までにマスターズで記録を残すことが目標。その年齢まで面倒を見てくれるスポンサーも探す。 ・60歳になったら一般の大会の投擲5種に出ようと思っている。ハンマー投げはやっていないのであと5年間で練習する。105歳で健康者の大会に、アイマスクをして出る。 |
| その他特記事項 | ・受傷後、非常にスムーズに競技に入ることができている。その要因として、担当医師が障害者スポーツに関する知識を持っていたこと、ロールモデルとなる同じ障害のある選手と出会い、様々なアドバイスしてくれたこと、地元で切断者のための陸上競技クラブがあったこと、一般高校の部活動で受け入れてもらえたことなどが挙げられる。 ・競技の継続に関してはスポンサーの存在、同じ所属会社の選手の存在が非常に大きい。 ・現在23歳と若い。陸上競技はもちろんだが、切断ヴィーナスのファッションショーに出演したり、雑誌を作ったり、絵本を描いたりマルチに活躍しているところが特徴的である。 | ・受傷後のリハビリ施設が国立リハビリテーションセンターだったこともあり、スポーツに関する情報が多く取れ、スポーツ開始に繋がっている。 ・競技用義足を借りることができたことも競技生活の入り口にあっては大きかった。 ・スポーツ競技の継続に関しては所属会社からの経済的な支援や競技に専念できる環境づくりに対する支援があることが大きい。 ・また、目標となる選手の存在や家族の支援があることも重要であることがわかった。 | ・障害を持ってからのスポーツ開始には、自治体の情報提供制度や障害者スポーツ協会の存在が影響している。情報提供に終わらずスポーツの場へのつながりが重要であることが明らかである。 ・何より本人のやりたい気持ち、自ら動く行動力が大きく影響している。受け入れてもらえないスポーツ施設、クラブのメンバーに対しても声を荒げることなくコミュニケーションをとり、最終的に受け入れてもらえるようになっている。 ・「105歳までスポンサーをつけて一般の大会に出る」という今後のスポーツ活動の見通しはこれまでにはなく、一つのモデルになる可能性を秘めている。 |

| 項目 | 21-J | 21-K | 21-L |
|-------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査年度 | 21 | 21 | 21 |
| 識別記号 | 32 | 33 | 34 |
| 生まれた年 | 1959 | 1961 | 1976 |
| 性別 | 男 | 女 | 男 |
| 居住地域 | 東海 | 関西 | 東海 |
| 調査時身分 | 一般雇用 | 一般雇用 | 一般雇用 |
| 障害発生年齢 | 52 | 0 | 17 |
| 障害内容 | 肢体 | 肢体 | 視覚 |
| 障害程度 | 重度 | 重度 | 重度 |
| 学校種別 | 普通 | 特支→普通 | 普通→特支 |
| 現在実施競技 | アーチェリー・フライングディスク | バドミントン | 柔道・柔術・グラップリング |
| 競技開始年齢※ | 55 | 45 | 16 ※同じ高校で発症前から継続 |
| レベル | 全国出場 | 国際入賞 | 国際入賞 |
| パラスポーツ開始時の重要な他者※ | ・医師 ・妻 ・県障害者スポーツ協会職員 ・フライングディスクの指導者 | ・会社の同僚(パラバドミントン日本代表選手) ・地域のバドミントンコーチ | ・高校の柔道部の恩師 |
| パラスポーツ開始場所※ | ・障害者スポーツ協会(体育館等) | ・障害者スポーツセンター | ・高校の柔道場(部活動の継続として) |
| パラスポーツ情報提供者※ | ・県障害者スポーツ協会職員 ・フライングディスクの指導者 | ・会社の同僚(パラバドミントン日本代表選手) ・地域のバドミントンコーチ | ・盲学校 |
| パラスポーツ開始場所へのアクセス※ | ・本人 | ・本人 | ・本人 |
| パラスポーツ開始前のスポーツの影響 | ・ポジティブ | ・なし | ・ポジティブ |
| パラスポーツ継続時の重要な他者 | ・現在の職場の上司 | ・地域のバドミントンコーチ ・パラバドミントン全日本コーチ | ・助言をくれた先生(視覚障害者柔道パラメダリスト) ・妻や子どもたち ・視覚障害を持つ職場の同僚の先生や生徒 |
| パラスポーツ継続状況 | ・52歳で受傷後、2014年頃からフライングディスクとアーチェリーを始める。 ・初級スポーツ指導員とフライングディスク指導員の資格も同時期に取得。 ・全国障害者スポーツ大会(2014年長崎・2015年和歌山)に出場。 ・2017年に2度目の事故にあい、その後アーチェリーを本格的に実施。 ・現在、火、水、土、日は競技に専念できている。 ・東京パラリンピック開催により指導する場を多く持つことができている。 | ・バドミントンを始めた頃から、地元のコーチが熱心に指導してくれたことで、バドミントンが楽しく、上達も早かった。 ・車いすバドミントンを行う選手は少なく、競技を始めてから1年で国際大会に出場した。同じクラスの海外選手の存在、圧倒的な強さに刺激を受け、もっと強くなりたいと練習を重ね、強化合宿などで全日本コーチから指導を受けた。バドミントンがパラリンピック正式競技に決定したあと(5~6年前)、アスリート雇用となった。 ・昨年、アスリート雇用は終了したが、地元の子世代アスリートの育成を行いつつ、バドミントンを継続している。 | ・高校入学後に始めた柔道だが、視力低下後、自分を取り巻く環境が変化していく中でも、視覚障害者柔道は、組めばこれまでと同様に柔道ができた。周囲が視覚障害であることを忘れるくらい普通に接してくれたことで、自己肯定でき柔道が支えとなった。 ・視覚障害者柔道は、パラ4大会(アテネ〜リオ)出場、リオ大会でメダルを獲得して引退。 ・現在は、後進の指導に役立つと思い、柔術とグラップリングの道場に通っている。 |
| 支援 | ・勤務先 | ・勤務先 | ・勤務先、公的機関 |
| 将来ビジョン | ・自分でアーチェリーやフライングディスクを続け、パラリンピックを目指すと同時に、競技を広く普及していきたい。 ・アーチェリーやボッチャ、フライングディスクも障害があってもなくてもすることができる。教室等を通じて障害のある人とない人の壁がなくなっていけばいいと考えている。若い人たちにそうしたことを伝えていきたい。 | ・地元の次世代アスリートの育成を行いながら、練習を継続していく予定。 ・スポーツを始める際には、まずはやる気が必要。指導者も体験に来た人をやる気にさせることが重要。バドミントンは、体育館の予約が取れば練習が出来る。また、一緒にバドミントンを行う仲間がいると継続に繋がる。 | ・後進の指導に役立つと思い、柔術とグラップリングの道場に通っている。 |
| その他特記事項 | ・野球で培った地肩の強さや以前に経験した射撃の訓練等が現在のスポーツ活動にも好影響を与えている。(幼稚園〜高校まで野球。高校卒業後〜27歳まで自衛隊に。27歳以降も野球はやっていた) ・事故で受傷後、手術等を何度も繰り返している。社会復帰していくために必要な条件としての体力向上のためにスポーツを始めた。 ・現在、会社で障害者スポーツを実施し、普及活動をするを業務として認められている為、競技を存分に行うことが出来る。 | ・中学校でソフトボール部に所属したが、卒業後は44歳までスポーツをする機会に恵まれなかった。 ・バドミントンを始めるにあたって影響を与えたものとして、パラバドミントンの日本代表選手、地域のバドミントンコーチ、障害者スポーツセンターの存在がある。 ・国際大会での海外の同じクラスの選手との出会い、全日本コーチから指導を受けたこと、継続的な地域コーチのサポートが競技レベルの向上や意識に影響した。 | ・発症前から柔道の楽しさを知っていたため、発症後でも楽しく取り組むことができた。 ・視覚障害者柔道は組めば障害の有無にかかわらず取り組める競技のため、発症後、出来ないことが増えていく環境下において、心の拠り所となり、自己肯定に繋がった。 ・自己受容はできていないが、柔道を通して、障害は不便だけど不幸ではないと思えるようになった。 |

| 項目 | 21-M | 21-N | 21-O |
|-------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査年度 | 21 | 21 | 21 |
| 識別記号 | 36 | 35 | 37 |
| 生まれた年 | 1981 | 1981 | 1980 |
| 性別 | 男 | 男 | 男 |
| 居住地域 | 関西 | 東海 | 関東 |
| 調査時身分 | 一般雇用 | 選手雇用 | 一般雇用 |
| 障害発生年齢 | 26 | 32 | 16 |
| 障害内容 | 肢体 | 肢体 | 肢体 |
| 障害程度 | 軽度 | 中度 | 重度 |
| 学校種別 | 普通 | 普通 | 普通 |
| 現在実施競技 | スノーボード | スノーボード | スノーボード |
| 競技開始年齢※ | 23(障害発生前から同一競技を実施) | 20(障害発生前から同一競技を実施) | 21 |
| レベル | 国際入賞 | 国際入賞 | 国際入賞 |
| パラスポーツ開始時の重要な他者※ | ・インターネット | ・大腿義足の友人スキーヤー ・義肢装具士 ・会社の社長 | ・アルバイト勤務先の社長と弟 ・ジャンプ台をきれいに飛んでいた名前を知らない選手 |
| パラスポーツ開始場所※ | ・スキー場 | ・元々のホームゲレンデ | ・スキー場 |
| パラスポーツ情報提供者※ | ・インターネット | ・大腿義足の友人スキーヤー ・義肢装具士 | ・当時のアルバイト先の社長 |
| パラスポーツ開始場所へのアクセス※ | ・本人 | ・本人 | ・本人 |
| パラスポーツ開始前のスポーツの影響 | ・ポジティブ | ・ポジティブ | ・ポジティブ |
| パラスポーツ継続時の重要な他者 | ・職場の理解 ・家族(妻) ・憧れの存在(同じ日本代表チーム) | ・妻 ・会社の社長 ・代表チーム(コーチ、チームメイト) | ・同年代の義足の日本代表チームメイト(憧れの存在) ・海外の有名選手 |
| パラスポーツ継続状況 | ・教師をしているため基本仕事を中心。冬場は仕事終わりに近くのゲレンデに行ってナイターで練習をする。夏場は週末などに芝の練習場や人工雪の練習場に行って練習をする。今年はヘルニアのため夏場はジムで筋力トレーニング中心。 ・公立学校教員ということもあり、他の選手のように海外遠征に多くはできない。基本的には有休を使う。事前に計画を立て、多くの先生方に配慮していただいている。管理職も理解がある。年間10日から2週間くらいの海外遠征が2~3回。コロナの影響で、帰国後隔離が入るが特別休暇等の扱い。 ・国内の合宿も同じくらいの日数を使うが、自分は週末だけの参加。海外遠征で2大会くらいに出場しポイントを取ってくる。 | ・事故後(32歳)、自分は義足になると思い、何ができるかと考え「スノーボード」だと思った。スノーボードは小5から、競技は大学2年からやっていた。 ・退院後も1か月の自宅療養のあと、1日30~40キロのサイクリングに挑戦するなど、アクティブな療養期間を過ごす。 ・週1回室内のハーフパイプ(3時間)、週3~4回人工芝のジャンプ練習場(30~40分)、週2回ジム、これからは雪の上や遠征が増える。 ・指定強化選手で、アスリート助成を受けている。会社の理解もあり、アスリート雇用として競技に専念できる。 | ・現在は、スノーボードクロス日本代表強化指定選手として活動を続ける。 ・日本の雪は柔らかく、コースを作っても溶けてしまうことから、スノーボードクロス常設コースは存在しない。そのため、国内で練習するにあたっては、大会用に臨時で設置されるコースの情報を集めて、大会開催の前後の期間で練習する形式で国内のコースを転々とする。一方で、海外では常設コースがあるため、スキー場で利用料を支払えば練習が可能である。 |
| 支援 | スポンサー・公的機関 | ・勤務先、公的機関 | ・勤務先、公的機関 |
| 将来ビジョン | ・日本代表チームに入っているが、その中でも勝つていかないとパラリンピックには出られない。2021年12月まで争って残り1枠を取りたい。 ・腰のヘルニアのこともあり、北京パラリンピックを区切りにはしたいと思っているが、今悩んでいる。 ・自分の思った通りの結果が出ればいいが多分難しいので、そうだとその次もという考えもある。 ・スノーボードは死ぬまでやる。指導者は求められればやると思う。 | ・当分引退は考えていない。 ・元プロスノーボーダーなので、ライセンスの再取得を目指している。 | ・2022年の北京大会、2026年のイタリアのミラノ/コルティナ・ダンペッツォ大会まではスノーボードで、それ以降は障害者ゴルフをしていくことで所属先企業と話をしている。 ・スノーボードを引退していた時期に、妻と共通の趣味であるゴルフを始めた。 |
| その他特記事項 | ・障害を持つ前からスノーボードをやっており、受傷が競技継続に大きな障害とならなかったことが同一競技を継続できた要因。障害を持つことでこれまでの生活や競技生活が分断されるということがないという、これまではなかったキャリアパターン。 ・公務員をしながら冬季競技をトップクラスで継続するのは相当大変なことだと考えられるが、職場の理解と支援が大きく、可能にしている。 ・日本代表チームの人間関係が非常によく、お互いを刺激しあって伸びていっている雰囲気があり、これが競技継続の大きな要因。 ・2020パラリンピック東京大会決定後、アスリート助成等の制度ができ、経済的な支援も受けられるようになったことも継続の要因。 | ・事故で切断後すぐに義足で何ができるかを考え、もともとしていたスノーボードならできると思った。当時パラリンピックの正式種目に採用されたことで、パラリンピックに出るという目標ができた。 ・友人に同じ大腿義足のスキー選手がいたことで、義足で生活すること、スポーツをすることに不安を感じなかった。 ・東京パラリンピック開催決定後の各種助成制度がスポーツ継続には好影響である。 | ・スノーボードを始める・継続するきっかけも、自分が目にしたジャンプが格好良くて感動し、それを自分でやってみようという思いで無我夢中で練習して、できるようになっている。 ・国内でスノーボードが競技として認められず一度は競技から引退するが、10年後に競技として認められたことで、現役復帰。 ・2019年より所属先企業がアスリート活動を全面的に支援してくれることで、国内に存在しない常設コースを海外遠征で回ることが可能となった。 |

| 項目 | 21-P | 21-Q |
|-------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査年度 | 21 | 21 |
| 識別記号 | 38 | 39 |
| 生まれた年 | 1985 | 1982 |
| 性別 | 女 | 女 |
| 居住地域 | 関西 | 関西 |
| 調査時身分 | 一般雇用 | 一般雇用 |
| 障害発生年齢 | 0 | 18 |
| 障害内容 | 視覚 | 肢体 |
| 障害程度 | 重度 | 中度 |
| 学校種別 | 普通 | 普通 |
| 現在実施競技 | 水泳 | シッティングバレーボール |
| 競技開始年齢※ | 2(パラ競技としては19) | 19 |
| レベル | 国際出場 | 国際入賞 |
| パラスポーツ開始時の重要な他者※ | ・視覚障害のある子どもの保護者 ・地元の障害者水泳のクラブのチームメイトとコーチ | ・障害者スポーツセンターの指導員 ・母親 ・一緒に練習するクラブの仲間 |
| パラスポーツ開始場所※ | ・地元の障害者水泳のクラブ | ・障害者スポーツセンター |
| パラスポーツ情報提供者※ | ・ボランティア先の同じ障害の子どもの母親 | ・広報誌 ・障害者スポーツセンターの指導員 |
| パラスポーツ開始場所へのアクセス※ | ・本人 | ・本人 |
| パラスポーツ開始前のスポーツの影響 | ・なし | ・ポジティブ |
| パラスポーツ継続時の重要な他者 | ・地元の障害者水泳のクラブの存在(専門のコーチの指導が受けられる) | ・日本代表監督 ・両親や家族 |
| パラスポーツ継続状況 | ・競技を始めた頃は地元Bクラブのみ週3日程度練習していた。北京パラリンピック出場決定後、練習量を増やすために地元クラブと並行し民間のスイミングスクールの選手コースで練習をするようになった。現在も同環境で週4~5日程度練習している。 ・Bクラブの存在がとても大きい。コーチは、個々の障害に合わせる一人ひとりの能力をどのようにすれば引き出せるかということを考えて指導してくれた。 ・大学卒業後、現在の所属先に就職し、当初フルタイムで働いていたが、会社との話し合いで時短勤務が認められるようになり、現在は午前中の半日勤務、午後は水泳に関する活動に充てられるようになった。また、競技に関する経費については、給与とは別にすべて会社の負担。 | ・通い始めたシッティングバレーボールクラブでは、日本代表選手と一緒に練習をしていた。同じ年代の仲間もいたことで楽しく続けることができた。 ・障害者スポーツ指導員から専門的な指導を受けたこと、バレーボールの経験があったことから、シッティングバレーボールを始めて1年余りで日本代表に選出。その後、日本代表監督からの指導を受け、2008北京、2012ロンドンと2大会連続でパラリンピックに出場。 ・アスリート雇用ではなかったため、遠征費や合宿の費用は自費だったが、2008年の北京大会後からは少しずつ自己負担が減っていた。2019年に引退し、アシスタントコーチとして選手を支えている。 |
| 支援 | ・勤務先 | ・公的機関 |
| 将来ビジョン | ・以前は「パラリンピックを目指さなければいけない」と思っていたが、最近は自己ベストを出したいという意識が強くなってきている。中学校・高校時代の純粋に水泳が楽しかった当時は思い出して、タイムにこだわっていきたくて考えている。 ・「パラ水泳」というよりも「水泳」そのものが好きなので、一度原点に立ち返って楽しんでいきたい。 ・また、指導者に以前から興味を持っており、競技と並行してまずはお手伝いのような形で関わっていただけたいと考えている。 | ・2019年からアシスタントコーチとして関わっている。シッティングバレーボールがメダルを獲得し、結果を残すようになれば認知度も上がり、スポンサーなどからの支援も受けられる。 ・現在、コーチなどサポート体制は整ってきているため、練習する機会を増やしていけば、もっと強くなると思う。 |
| その他特記事項 | ・親が障害と向き合って、自分の子どもの障害はどのようなものなのかについて、もう少し調べてほしかったと感じている。 ・定期的に検査で病院に通っていたが、自分が障害者手帳を取得できる事を教えてもらえなかった。障害者手帳を取得できることを知ったのは、大学受験の相談時、通っていた病院の医師や視能訓練士がもう少し早く対応をしてくれたいたら良かったと感じている。 ・自分と同じような障害のある人々がスポーツを始めるにあたっては、弱視のような見えづらい障害に対する、学校関係者、医療関係者や周囲の人々の理解が重要であると思う。 | ・スポーツを始める際には、スポーツ指導員やリハビリ現場の関係者などが様々な障害者スポーツを知っていること、声をかけることが重要。 ・一般のスポーツセンターなどに障害者スポーツの一覧が記載されている冊子などがあれば知るきっかけになると思う。もっと広く、シッティングバレーボールを知ってもらえる機会を作っていく必要がある。 |

仮名 21-A さん

インタビュー実施日時 2021年8月26日 13:00-15:00 場所 オンライン

| | |
|-------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住：東海地区 生年月日：1990年 性別：男性</p> <p>障害発生年齢：19歳 障害内容：頸髄損傷 リハビリ期間：2年4か月</p> |
| 略歴 | <p>地元工業高校卒業後、オートバイメーカーに就職、就職1年目にバイクでツーリング中に事故にあう。頸髄損傷による上下肢機能全廃。リハビリ終了後、地元、福祉系大学へ入学。大学を卒業後、リモートワークのできる会社に就職、約1年で現在の会社に転職。現在リモートワークでフレキシブル勤務をしている。障害は1種1級。現在、H市に両親と在住。ボッチャのほかにスキューバダイビングやパラグライダーもやることがある。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技：ボッチャ クラス分け：BC3</p> <p>主な戦績：日本選手権ベスト4 競技開始年齢：22歳</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>経緯：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・19歳の時に障害を負う。急性期は地元の病院に3か月入院、その後N市内のリハビリ病院に転院し、約2年間を過ごす(交通事故のため保険があり、半年以上病院でリハビリを行えた)。そのあと静岡県のリハビリ施設に入所し、1年ほどを過ごす。 ・市の病院のOT(作業療法)では自分がやりたいことを主体的に選択(例えばプラモデルを作る)でき、「自分で挑戦していいんだ」ということが学べて良かった。 ・県のリハビリ施設では、電動車いすの操作方法などを覚えた。 ・最初、県のリハビリ施設に行くのが嫌でスタッフとぶつかったりもしたが、他の入所者が努力している姿を見て、考えが前向きに変わってきた。 ・施設ではカリキュラムの中に体育があって、初めは車いす操作などを練習した。そのことが日常生活やボッチャの中で活かされている。 ・他の入所者は、ツインバスケをやっていたが、自分は障害が重いためスポーツに参加できずモヤモヤしていた。リハビリ施設を退所してから自分でできるスポーツを探したりした。 ・自宅に帰った後、スポーツをしたいと思い、S県の施設で知っていた地元ツインバスケチームに見学に行った時、チームの選手からボッチャなら |

| | |
|------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>できることを教えてもらった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市の障害者スポーツ大会の昼休みにボッチャの体験会(地元ボッチャクラブに連絡し紹介された)があり、参加。その後このボッチャクラブに入会した。 ・地元ボッチャクラブで月に2回、1回3時間程度、10人程度が集まってやるようになった。 <p>始めた場所:地元ボッチャクラブ(場所は市内公共センター)</p> <p>重要な他者:</p> <ul style="list-style-type: none"> ①リハビリ期 家族(両親) ②ボッチャ開始期 見学に行ったツインバスケットの選手、地元ボッチャクラブ |
| <p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・リハビリテーション施設で知っていたツインバスケットを見学に行った際、ボッチャを紹介してもらったことでボッチャへと導かれた。 ・居住地近くにボッチャクラブがあったことが大きく影響している。 |
| <p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・小学校の時は、学校のスポーツクラブ、中学の時は男子バレーボール部、高校ではアーチェリー部に入っていた。アーチェリー部では県3位で、全国高校選抜の選手に選ばれた。 ・受傷前スポーツをやっていたことは、スポーツ(ボッチャ)を始める際にはプラスに働いていると思う。まだ、ボッチャで結果を出せていないので、胸を張っていい影響があったかどうかは分からない状況。 |
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボッチャの結果で、支援してくれている親(とりわけ父親)に恩返しをしたいという気持ちがある。他には、自分を成長させたい(修行)という面もある。 ・ボッチャは、運動をしてきたこともあり、すぐに感覚をつかむことができた。しかし、うまくいかない場面も多々あり、やめたいと思ったことは何度もある。でもやめると他のことでも逃げることになると思い、成長への修行だと思っている。 |

| | |
|---------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・現在、週末の土日に練習1回4時間程度している。大会にはコロナがなければ年に2~3回出ている。 ・会社にはボッチャをやることを了解してもらっており、ボッチャの活動も勤務時間とみなしてもらっている。 ・講演やデモンストレーションで小学校などに行って「すごーい」と、子どもたちに言われるととても嬉しい。ボッチャを通して外(他人)との関わりが持てることがとても大きい。 ・継続していく上で大変なことは練習場所の確保(練習場所がない・少ない) <p>主な実施場所: 自宅、近隣の福祉法人が持つ体育館。廃校になった学校の体育館</p> <p>重要な他者: 父親(ランプの製作や介助)、母親(ボール拾いなど)</p> |
| <p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・影響を与えた社会的状況は、特にない。 ・近くにボッチャクラブがあること、子どもが減少したことで廃校になった学校(その地域に以前住んでいたことで住民が理解してくれた)や福祉法人が体育館を作った(体育館:障害者団体のみ)ことは好影響を与えている。 |
| <p>今後のスポーツ実施</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ボッチャはこれからも上を目指して続けていく。 ・パリのパラリンピックに出場したい。 ・両親も年齢を重ねてきたので、どこかで介助者をチェンジしなくてはいけない。最近では、ヘルパーをお願いしている。 |
| <p>まとめ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・リハビリ期間に行ったPT(理学療法)やOT(作業療法)内容がその後のスポーツや日常生活に役立っていると思われる。 ・同様にリハビリ期間において主体的に OT(作業療法)内容を決められるような状況の中で、自分で決めたりする主体的な行動が可能になった。 ・ボッチャとの出会いは、在住県のリハビリ施設 OB の紹介→地元ボッチャクラブが中心となっている。 ・ボッチャ継続にあたっては、両親の支援、自分を成長させたいという気持ちに加え、廃校になった学校の体育館、福祉法人の体育館の完成など |

| | |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>がプラスに影響していると考えられる。</p> <p>・今後もより上を目指していきたいと考えている。そのためには父親に代わる介助者を見つけることが課題で、現在ヘルパーと連携しようとしている。</p> |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|

(藤田紀昭)

仮名 21-B さん

インタビュー実施日時 2021年9月27日 13:30-15:30 場所 オンライン

| | |
|-------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住:関西地区 生年月日:1982年 性別:男性</p> <p>障害発生年齢:17歳(高校2年生) 障害内容:左大腿切断 2種4級</p> <p>リハビリ期間:事故後、翌年2月くらいまでの約1年間(退院後も部活に行くような感じでリハビリに通っていた。)</p> |
| 略歴 | <p>高校2年時に事故で左足切断。高校卒業後、義肢装具士の専門学校に行き資格取得。2004年O大学に進学。大学卒業後、2008年にS社に入社。2010年S社に所属しながら大学院に進学。その後、2017年9月に所属会社を変え、現在に至る。</p> <p>2016年に結婚。2児の父。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技:陸上競技 短距離、走り幅跳び クラス分け:T63</p> <p>主な戦績:パラリンピック夏4回、冬1回出場(リオ大会 メダリスト)、世界選手権メダリスト(2回)ほか多数 競技開始年齢:20歳</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入院時に医師にスノーボードをやりたいと言ったら、スキーならできるといふ返事もらった。その後、スノーボード雑誌でアメリカに義足のプロ選手がいることを知り、2000年12月にはスノーボードをやった。日常用義足で兄に連れて行ってもらった。ボードの道具は以前からやっていたのであった。 ・翌年(2001~02年にかけて)の冬には専門学校のI先生がペンションを営んでいたそこでスノーボードをしながら山籠もりした。ここで陸上競技もやってみたいという話をしたところI先生から陸上競技団体の情報をもらい、学校の近くのN市のチームに連絡し、登録した。 ・リハビリの段階から走りたいという気持ちもあり、義足作製時から走れる義足にした。スポーツをやりたいという意思を伝えていたのでリハビリ時の義肢装具士とPT(理学療法士)が陸上(走り方)などスポーツに関する情報をくれた。2001年7月に陸上の小さな大会が近くであり、出場したのが最初。 ・冬はスノーボードがあるが、夏に行うスポーツがなく筋トレだけやっていた。競技に出たいという気持ちもあり、時間的に制約が少ない個人競技 |

| | |
|------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>である陸上を選択した。専門学校 3 年生の頃から陸上が中心となっていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2003 年 4 月、スノーボードをやっていて陸上の練習はあまりしていなかったにもかかわらず、100m でアテネパラリンピックの標準記録に 0.2 秒まで迫る記録(13 秒 9)が出た。本気でやればもっとやれるかと思い、軸足が陸上競技に移った。 ・走り幅跳びは 2003 年から始めた。翌年 10 月の記録会から義足踏切になった(記録が 50 cm くらい伸びた)。 ・2004 年専門学校卒業後、O 大学に進学、パラ陸上に理解のあった教員が陸上部の指導者でもあり、入学。 <p>始めた場所:スノーボード:山(K スキー場) 陸上競技: N 市競技場(クラブメンバーとして) 重要な他者:</p> <ul style="list-style-type: none"> ①リハビリ期 PT(理学療法士)、義肢装具士 ②開始期 PT(理学療法士)、義肢装具士 |
| <p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・アテネパラリンピック ・専門学校時、練習することができる陸上競技クラブが近隣にあった。 ・スポーツの知識を持った医師、PT(理学療法士)、義肢装具士 |
| <p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・小学校で野球、中高ではバレーボール、スノーボード |
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <p>継続状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専門学校:中部地区のクラブチーム ・大学:陸上部で他の学生と一緒に練習 ・S 社:午前中から午後 2 時までは勤務、母校の大学施設を利用して練習。その後、学生とともに 16~20 時まで練習。土日遠征も勤務扱い。遠 |

| | |
|-----------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p> 征費等はほぼ会社がカバーしてくれていた。 ・現在：母校の施設で練習。(コロナ禍で)午前中練習、月・水・金は走って練習+午後・ウェイト、火・土はウェイト練習とプール。木はプールだけ。日曜は完全休養。午後は時に講演など。 主な実施場所：O 大学(母校の大学) 重要な他者：一緒に練習している学生たちとレベルが同じくらいの学生、陸上部指導者(大学・大学院の指導教員)、I 先生 </p> |
| <p> スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件 </p> | <p> ・記録がある程度出続けたということ。大学院で研究していることを試しつつトレーニングできたことがモチベーション維持に影響している。 ・大学卒業後も陸上競技場等、大学施設を継続的に利用でき、一緒に練習している学生の存在も含め、練習環境が充実している。 ・パラリンピック国内開催により、企業の注目も上がり、プロとしての活動が可能になっている。 </p> |
| <p> 今後のスポーツ実施 </p> | <p> ・会社に所属しつつ、指導者として後進の指導にあたれるといいと考えている。 ・ロサンゼルスパラリンピックにゴルフが入るので、それを目指そうと検討中。 </p> |
| <p> まとめ </p> | <p> ・スポーツに対する関心が受傷前から高く、受傷後もその関心の高さは変わりなく自らスポーツをやりたいことを医師やコメディカルに伝え、情報を提供してもらっていた。 ・情報提供してもらった後も自ら動き、スノーボードでの冬の山籠もり、陸上クラブへの入会から競技者登録等自ら行っていた。スポーツへのモチベーションが高いこと、それによりパラスポーツに関する情報を得、スポーツできる場所へ主体的にアクセスしているところが特徴と言える。 ・スポーツの継続に関しては母校の大学を拠点とした練習環境が充実していることが大きな特徴。 ・2017年に所属会社が変わり、現在、プロアスリートとして活動している。今後はプロの指導者としての活動の在り方を模索しており、パラスポーツ界のフロンティアの一人と言える。 ・同様の障害を持っている子どもたちには、体育の授業で競技用義足が使 </p> |

| | |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>える環境を整備すべきという意見が聞かれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パラスポーツ普及には、パラリンピック終了後に引退する金メダリストがいれば、テレビ出演等露出が多くなり、普及に繋がるという意見を述べられた。 |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

(藤田紀昭)

仮名 21-C さん

インタビュー実施日時 2021年9月27日 10:00-12:00 場所 オンライン

| | |
|-------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住:東海地区 生年月日:1985年 性別:男性 障害発生年齢:19歳</p> <p>障害内容:頸髄損傷による上下肢機能障害 リハビリ期間:約3年</p> |
| 略歴 | <p>障害受傷後、リハビリテーションセンターで車いすラグビーを始め、介護施設事務職を経て、2021年から現在の所属へと転職し、競技を継続している。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技:車いすラグビー</p> <p>主な戦績:2012年ロンドンパラリンピック 入賞、2016年リオパラリンピック メダリスト、2021年東京パラリンピック メダリスト</p> <p>競技開始年齢:20歳</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校2年生から地元のスポーツ少年団でサッカーを始め、高校まで部活動で続けた。大学入学後は高校時代の友人が作ったフットサルチームの活動に参加。 ・大学生の時にプールでの事故で頸髄損傷を負い、地元の病院に2か月ほど入院後、リハビリテーションセンターに1年半ほど入所し、その後転院したIリハビリテーションセンター(以下、Iセンター)で、スポーツ訓練の一環としてツインバスケットボールを行うようになった。1カ所目のリハビリテーションセンターを退所する頃には、「(障害を負った)自分の体がどういうもので、これからずっと車いすと付き合っていかなければならない」と自覚していたので、この体でもできる運動はないかと考えていた。その中でIセンターを紹介され、ツインバスケットボールに出会うと同時に、リハビリテーションプログラムの一環としてスポーツが積極的に導入されていた。子どもの頃からスポーツに取り組んできた自分としてはとてもありがたい環境であった。 ・Iセンターを退所後、職業訓練を行うためにKリハビリテーションセンター(以下、Kセンター)に入所し、センター内にツインバスケットボールと車いすラグビーのクラブがあり、週に2日ほどセンター内で練習に取り組むようになった。 |

| | |
|------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <p>・障害受傷後に車いすラグビーを始めるにあたり、I センターでの経験がとても大きかった。K センターはスポーツ訓練に力を入れており、センター内の記録会(3 分間で何m走ることができるか等)で、自分と同じ頸髄損傷者のランキングが掲示されており、競争心を掻き立てられた。1日の日課として理学療法・作業療法・パソコン作業等があったが、以前入所していたリハビリテーションセンターで行っていた内容が多く、代替のプログラムとして様々なスポーツを行うことができ、とてもありがたい環境だった。また、当時「マダーボール(筆者補足:2005 年にアメリカで公開された車いすラグビーのドキュメンタリー映画)」の DVD を見たのが車いすラグビーを知るきっかけであった。</p> <p>・I センターでスポーツ指導を担当していた先生が、当時、車いすラグビー日本代表の強化に関わっており、自分の体の状態を見て、「C さんだったら車いすラグビーができるよ」と言われ、その後、I センターで開催された車いすラグビーの体験会で当時の日本代表選手と出会い、「もし、K センター(C さんがその後入所するリハビリテーションセンター)に来るようであれば、一緒にプレーできるのを楽しみにしているよ」と声をかけてもらい、今後の目標となるような選手たちと出会えたことがとても印象に残っている。K センターでは車いすラグビーとツインバスケットボール両競技に取り組んでいたが、世界を相手にしている日本代表選手が身近にいたということが、車いすラグビーに本気で取り組んでいきたいと思えるようになった要因であると思う。</p> <p>・自分と同じような障害のある人がスポーツを始めるにあたり、まずはどこにコンタクトを取ればよいかわからないと思うので、各競技団体や都道府県の障害者スポーツ協会等が窓口となって、始めたい競技のチームや関係者に繋ぐことのできるネットワーク作りが大事だと思う。また、公式の窓口だけでなく、医療職とチーム関係者とのつながりが非常に大事であると思う。自分自身も実際にお世話になった理学療法士、作業療法士、先生等から「同じような状態の子がいるから会いに来てほしい」と言われることがあり、このようなきっかけで競技を始める人もいるので、個と個のつながりも非常に大事であるのではないだろうかと思う。</p> |
|------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

| | |
|----------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <p>・チームスポーツ(サッカー)をやってきたので、車いすラグビーをプレーする上での、スポーツの見方やコートを俯瞰して見られるといった点は障害受傷前のスポーツ経験が活きていると思う。</p> |
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <p>・2008年から関東の車いすラグビーチームでプレーを始め、2018年頃から西日本のチームに移籍し、2011年から現在まで日本代表選手として活動している。現在は週3～5日程度、日本財団パラアリーナで関東圏のチームのメンバーと練習をすると同時に、月に1回程度所属チームの練習に参加している。</p> <p>・Kセンターを退所後、介護施設の事務職として就職し、2021年6月から現在の所属に転職し、嘱託社員として競技を優先する形で勤務。</p> |
| <p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <p>・これまで競技を続けてこられたのは、金銭的な支援体制が整ってきたことが大きいと感じている。</p> <p>・競技を始めた当初、遠征や合宿費用はほぼ全額自己負担となっており、金銭的な負担が大きいことから、数年間強化指定選手としての活動を控えていた時期があった。また、ラグビー用車いすは非常に高額で、競技を始める、続けていくために車いすの確保は非常に重要であると思う。Kセンター入所時はセンター所有の車いすを借りていたが、退所後チームに所属する際に、運よく車いすを買い替える選手がおり譲り受けることができた。競技をこれから始めようと思う人がタイミングよく車いすを手に入れれば良いが、もし手に入らなければ、「やる気はあるのに車いすがない」という状態になってしまい、競技開始・継続の大きな障害になってしまう。</p> <p>・日本代表として本格的に活動を始めた時期が、東京パラリンピック開催に向けての支援拡充の時期と重なっており、金銭的な支援や練習環境(特に日本財団パラアリーナの定期的な使用)は充実してきており、恵まれている方だと感じている。また、数年前から居住する県から強化費の支給を受けている。日本代表の活動に関する自己負担はなく、チーム練習や車いす等の用具に関する支出のみ自己負担となっている。このように支援が充実してきていることに関しては、単に東京パラリンピックの招</p> |

| | |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>致決定だけでなく、車いすラグビー界として世界選手権やパラリンピックでのメダル獲得等の実績を上げてきたことが重要であったと考えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・競技継続にあたって障壁となる点について、我々のような強化指定選手ではなく、これから本格的に取り組んでいく、競技を始めたばかりの選手たちに対する支援が十分ではないと感じている。車いすラグビーは全都道府県にチームがあるわけではないので、遠方への練習参加時の交通費や遠征費等の補助が必要ではないだろうか。また、競技用の車いすが非常に高価なので、連盟や県障害者スポーツ協会等が数台でも車いすをレンタルするシステムができれば競技に取り組みやすくなると考えている。 |
| <p>今後のスポーツ実施</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・「パラリンピックで金メダルを取りたい」という思いが強いので、2024年のパリ大会、2028年のロサンゼルス大会になるかわからないが、そこに対する情熱は常に持っている。 ・現役選手としては体力が続く限り、自分と同じクラスの国内選手や海外選手と渡り合えるうちは続けていきたいと考えている。 ・現役中も引退後も車いすラグビーの魅力を発信する活動は続けていきたい。特に地元の障害者スポーツ協会とは良い関係を築けているので、講演会や体験会等の活動を積極的に行っていきたい。 |
| <p>まとめ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・リハビリテーションセンターの運動指導士、当時の日本代表選手との出会いで車いすラグビーを始めた。 ・競技開始当初、十分な支援を受けられていなかったが、競技実績を積み上げると同時に、東京パラリンピック招致の影響等により、金銭的な支援や練習環境は充実してきている。 ・強化指定選手への支援は充実してきているが、若手への支援が十分ではなく、用具や金銭的な支援が必要である。 ・パラリンピックでの金メダル獲得を目指して、体力の続く限り競技を続けていきたい。 ・引退後も車いすラグビーの魅力を発信する活動を続けていきたい。 |

(河西正博)

仮名 21-D さん

インタビュー実施日時 2021年9月29日 15:00-17:00 場所 オンライン

| | |
|-------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住:甲信越地区 生年月日:1980年 性別:男性 障害発生年齢:18 歳 障害内容:右下肢切断 T44 2種4級 リハビリ期間:約1年</p> |
| 略歴 | <p>大学入学直前に受傷。大学卒業後、母校の科目履修生としてアテネパラリンピックに出場。その後結婚。その後、自らスポンサーを集め、2005年4月からプロアスリートとして活動、芸能プロダクションにも所属(2004年)。スポンサーがない苦しい時期もあったが、アルバイト等をつないだ。2009～2015年はスポーツメーカー契約社員。この間は競技に専念。母校の大学院に戻り修士を取得。2015年から金融証券会社に所属。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技:陸上競技 走り高跳び クラス分け:T64 主な戦績:パラリンピック6回出場 6回入賞 競技開始年齢:19歳</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ推薦で合格した大学に入学する直前、交通事故により右下腿を切断。 ・スポーツ推薦の使命感から義足をつけてハンドボールをするつもりだったので、切断後、すぐに気持ちは切り替えられた。 ・脚の治療専念後、次の3か月はT会で義足を作ってリハビリをした。 ・Y県での主治医であった先生が、義肢装具士Uさんが作った冊子を持っており、その冊子に義足でできるスポーツがたくさん紹介されていた。そこで、両親がUさんに会いに行き、地元で義足を作らず直接Uさんに作ってもらった(大学での生活が迫っていたため)。 ・受傷後半年でT障がい者スポーツセンターにほぼ毎日通いリハビリ。そこでパラリンピックのことなどの情報を得たが、この時はハンドボールに復帰するつもりでいた。障害者スポーツセンターのことはUさんから教えてもらった。Y県にもリハビリ施設はあったが高齢者が多く運動量が少なかった。 ・スポーツ指導員の出身大学に連れられて、そこで初めて板バネを使って走った。そこでハンドボールの選手としては難しいなと思い、高跳びをやったところ、当時の日本記録(1m50)を超え、1m65を跳んだ。そこで陸 |

| | |
|------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>上部に入部しようと考えた。復学前に大学のハンドボール指導者も勧めてくれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学では1年先輩に上肢障害のスキー選手がいたが陸上部にはいなかった。跳躍のコーチがみんなと同じように扱うという条件で入部を認めてくれた。 ・この大学にはトップ選手もいるが一般入試で入ってくる人もいて、そういう人と一緒に練習ができたのがよかった(自分は邪魔しているのではないかという心配をせずに済んだ)。 ・大学の授業ではサッカーだけはどうしても難しいので配慮してもらったが、それ以外は一緒にできた。大学に「特殊体育」の専門の先生もいたので良かった。 ・初めての試合は2000年4月。陸上部に入ってからすぐに九州パラ陸上に出場。 <p>始めた場所:T障がい者スポーツセンター 重要な他者:リハビリ期・開始期</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ情報を持っていたY県の主治医。スポーツをする上では膝があるか無いかが重要。膝上切断とせず膝下切断にしたいという要望を聞き入れてくれた。 ・義肢装具士のUさん、走りのベースを作る上ではUさんが主宰する切断の陸上競技クラブ。 ・競技を始めてからはコーチのFさん ・リハビリ中は看護師(→のちの妻。切断に関する様々な情報をくれたおかげでスポーツをするまでの見通しも持てた。医療的なケアをよく知っていることから付き合うようになってからも安心だった) |
| <p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・シドニーパラリンピック ・大学の受け入れ態勢 |
| <p>受傷前スポーツ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ハンドボールで大学のスポーツ推薦を受けられるほどのレベル。 |

| | |
|---------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>ツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <p>・スポーツ推薦で入学直前に受傷。被推薦者としての責任を果たすためにもすぐにスポーツに復帰することを考えた。</p> |
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <p>・北京パラリンピックで NHK が開会式を放送してくれたことがスポンサー集めなどに好影響。だが、野球やサッカーなどのプロとは全く違う。</p> <p>・パラの選手は共生社会等をテーマにした様々な講演会活動や執筆活動ができることが大きい(2008 年以降、講演は年間 30 回以上)。特に教育の部分で我々パラアスリートが活動させていただくということは大きい。</p> <p>・場所:大学でやっていた時は毎日練習したい時に大学施設が使えた。地元に戻ってきてからはそれが難しい。</p> <p>・指導者:競技を行う時期によって義肢装具士が重要な他者であった時期もあるし、その後は競技のコーチの重要性が高まってきた。競技コーチは 2004 年以降指導してもらっている。</p> |
| <p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <p>・経済的基盤となるスポンサー(所属企業)等の出現</p> <p>・北京パラリンピック、東京パラリンピック</p> |
| <p>今後のスポーツ実施</p> | <p>・今後も現役を続けるが指導者としての道も切り拓きたい。指導者としても勉強をしながら、選手とともに高めていきたい。</p> <p>・さらに、一般の人と同じ土俵でマスターズでの競技(義足側で踏み切らなければ出場できるという約束を取り付けている)を考えている。</p> <p>・現在所属している会社とは一線での現役引退後のことは詰め切れていない。現在仕事でやっている社員の健康管理に関する仕事をするとか、社内パラリンピックチームの指導者をするとか、一般社員と同じ仕事をするという可能性もある。</p> |
| <p>まとめ</p> | <p>・急性期・リハビリ期を担当する医師がパラスポーツの知識を持っていることは非常に大きい。予後にスポーツを実施することを想定した手術や治療ができるからだ。D さんの場合、そうした医師が主治医だったことが</p> |

大きいと考えられる。

- ・そしてその医療関係者が国内でも有数のスポーツを理解した義肢装具士につないでくれ、さらに障害者スポーツセンターでのリハビリに繋がっている。そのリハビリ中に陸上競技と出会っている。
- ・スポーツ継続に関しては、生活する経済的基盤がしっかりしていることが重要である。D さんの場合、自らスポンサー探し・契約をするなど主体的な活動の成果がここに見られる。さらに練習環境が整っていたことでスポーツの継続が可能となっている。
- ・パラスポーツ普及にはUさんが主宰しているクラブのような、障害を持ったあとも地元でスポーツができる受け皿が必要。施設や指導者がいても仲間がいないとなかなか続かないと考えている。

(藤田紀昭)

仮名 21-E さん

インタビュー実施日時 2021年10月1日 14:00-16:00 場所 オンライン

| | |
|-------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住:関東地区 生年月日:1991年 性別:男性 障害発生年齢:15歳</p> <p>障害内容:ユーイング肉腫による右下肢切断</p> |
| 略歴 | <p>障害受傷後、高校の部活動で陸上競技を始め、大学卒業後、事務職を経て、2016年から現在の所属へと転職し競技を継続している。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技:陸上競技</p> <p>主な戦績:ロンドンパラリンピック 4×100m リレー入賞、リオパラリンピック 4×100m リレーメダリスト 競技開始年齢:16歳</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学4年生からサッカーを始めて、障害受傷前まで部活動で続いていた。 ・中学3年生の時にユーイング肉腫(骨肉腫)で右下肢を切断し、6か月ほど入院した。入院先の義肢装具士からモニターのような形で競技用義足を提供してもらった。当時は「サッカーをまたやりたい」という思いがあったが、リハビリの一環として高校入学とともに陸上部に入り、走ることを始め、上手く走れるようになると楽しさを感じ、競技を継続することにした。 ・高校入学後、体育の授業は「できるところを自分のペースでやってね」と、教員はできないところをしっかりとフォローしてくれた。部活動に関してはいわゆる強豪校ではなく、自分たちで楽しみながらやる環境であった。このような状況で自分のペースで楽しみながら陸上競技を始めることができた。また、17歳の時に出場した地元の障害者スポーツ大会で同じ義足の陸上選手と出会い、パラリンピックの世界を知り、その後の目標となっていくた。 ・自分自身の障害に関連して、競技用の義足は形状が特殊で人目につきやすく、学校内で意識することはなかったが、学外の競技場での練習や大会時には人目を気にすることがあり、陸上自体はとても楽しかったが、始めた当初は義足が注目されることに抵抗感があった。 |
| 障害者スポーツ開始に影響 | <p>・自分の場合(義足を使用しての競技)は、障害のない選手と同じ条件で競うことができるので、一般的には「パラスポーツ」というジャンルに分類</p> |

| | |
|----------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <p>されるかもしれないが、自分自身はパラスポーツに取り組んでいるという意識はあまりない。「陸上競技」に取り組んでいて、目指す大会の主だったものとしてパラリンピックがあると考えている。高校の陸上部では他の部員と同じように活動し、大学でも体育会系の陸上部に所属しており、仲間たちは「別に足があろうがなかろうが走ることにしては一緒だよ」と捉えてくれていた。本格的に陸上を始めてから、高校や大学で「パラだから特別に何かしないとね」ということが一切なく、周囲の人々が普通にありのままを受け入れてくれていたことが、楽しく陸上に取り組むことのできた要因であったと感じている。</p> <p>・自分と同じような障害のある人がスポーツを始めるにあたって、競技用義足があるに越したことはないが、とても高価で自分で用意することが難しい人が沢山いると思うので、スポーツを始める人を対象とした支援制度があると良いと思う。また、義足に関しては知識を持った医師や義肢装具士等に出会えるかどうかも重要であり、足の切断についてもスポーツに適した・適していない方法があるので、適切な医療職と出会えるかどうかも非常に重要であると考えている。</p> |
| <p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <p>特になし</p> |
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <p>・2008年頃からパラ陸上の大会に出場し始め、大学卒業後、事務職を経て2016年から現在の所属へ転職。所属先の支援を受けながら競技を継続している。</p> <p>・現在は、週5日ほど師事しているコーチが主宰しているクラブで、障害のない選手とともに練習・トレーニングを行っている。</p> |
| <p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <p>・競技を継続するにあたり、現在の所属先の存在がとても支えになっている。学生時代・前職では、競技に関わる支出は全額自己負担となっており、コーチをつけることができず、海外遠征についても絞り込んで参加するしかない状況であった。現在は競技に関する経費は所属先の負担となっており、コーチ・トレーナーをつけて遠征や大会にも帯同してもらい、練</p> |

| | |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>習環境は充実している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・また、障害のない練習仲間たちの存在が競技へのモチベーションになっている。自分の陸上競技人生の大半は障害のない選手と競うことがほとんどで、その選手たちにはどうしても勝てない状況であるが、足があるからという事とは関係なしに、隣で同時にスタートした選手たちには勝ちたいという思いを常に持っている。2016年のリオパラリンピックでメダルを獲得したが、練習仲間には相変わらず勝つことができず、「別に自分はすごくないな」と痛感し、より勝ちたいという思いが強くなった。 ・現在の所属先に加えて、2014年からお世話になっている義足メーカーの存在も重要なものとなっている。ただ競技用義足を作るということではなく、障害者や障害者スポーツに関わる問題を解決していきたいという思いを持っていて、そのような会社の理念に共感しており、これからも一緒に義足開発や様々な活動に関わっていきたいと思っている。 ・現在の競技環境について、日本陸上競技連盟(健全者)と日本パラ陸上競技連盟(障害者)という2つの競技団体があり、義足の選手たちは日本陸連主催の大会に出場することができるが、その大会がパラ陸連の公認でなければ公式記録として認められず、限られた公認大会で記録を出さなければいけないという難しさがある。 ・以前は完全に両連盟の大会が独立していたが、最近では日本陸連主催の大会にパラのレースが導入されるケースがあり、交流が徐々にではあるが進んできている。象徴的な例として、大学陸上部に入部する義足選手が少しずつ増えてきているが、他の部員たちが、「足がないけれど、やっていることは陸上だよね」「同じようにやっていけるよね」と考えるようになってきており、このような環境が大学だけでなく地域の陸上クラブ等にも広がっていくことで、もっとたくさんの人々が陸上を楽しめるようになると考えている。 |
| <p>今後のスポーツ実施</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・昔から100mを10秒台で走るということを目指している。このタイムはパラリンピックで勝負していくには必要なタイムであると同時に、一人の陸上選手として「足速いよね」と認められるタイムであると思う。また、「パラ陸上選手」ではなく「陸上選手」として認められたいという思いがあり、純粋に足が速くなりたいという気持ちを強く持っている。 |

| | |
|------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>まとめ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・障害受傷後、入院先の義肢装具士に競技用義足を作製してもらい、高校の陸上部に入部して競技を始めた。 ・競技用義足は高価であり、これからスポーツを始める人を対象とした支援制度が必要ではないだろうか。 ・高校、大学と陸上部で競技を継続し、仲間たちが自分を特別扱いせず接してくれたことが、楽しく陸上を続けてこられた一因であった。 ・パラリンピック出場や勝利をもちろん目指しているが、障害のない練習仲間に勝ちたい、純粋に足が速くなりたいという思いで競技を続けている。 |
|------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

(河西正博)

仮名 21-F さん

インタビュー実施日時 2021年10月5日 18:30-20:30 場所 オンライン

| | |
|-------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住:関西地区 生年月日:1979年 性別:男性</p> <p>障害発生年齢:先天性障害 障害内容:脊髄腫瘍による両下肢機能全廃</p> |
| 略歴 | <p>中学1年生から車いすバスケットボールを始め、現在も競技を継続している。また、5年前から本格的にパラクライミングを始めて、現在は日本代表選手として活動している。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技:車いすバスケットボール・パラクライミング</p> <p>主な戦績:天皇杯日本車いすバスケットボール選手権大会 入賞、パラクライミング世界選手権 メダリスト 競技開始年齢:13歳</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校から普通学校に通っており、体育は全般的に見学が多かったが、プールに関しては、「とりあえず泳げ」ということで参加。マット運動に関しても自分なりにできるところは参加していた。当時は体育だけでなく、学校生活全般において特別支援や合理的配慮という発想がなかったため、良くも悪くも何かできないことがあれば自分の責任になり、その一方で何かをチャレンジするとすれば、他の生徒と同じように対応してもらえようような環境であった。 ・子どもの頃から英会話や習字、スイミングなど、様々な習い事をしており、それらの1つとして中学1年生の時に母親の勧めで車いすバスケットボールを始めた。当時は週に1回練習に参加しており、全くシュートが届かない、車いす操作が誰よりも遅い、周りは大人ばかりであったことから嫌々参加しているような状況だった。しかし、中学3年生の時の対外試合で初めてシュートが入った時に、初めて車いすバスケットボールが楽しいと思えた。 ・パラクライミングに関しては、現在の職場である福祉センターで、子どもたちを対象にした障害理解教育の一環として視覚障害のクライミング体験を実施した時に、講師として招聘したK氏(視覚障害クラス日本代表選手)との出会いが始めたきっかけであった。「自分も体験しても良いか」と言ったところ気さくに応じてくれ、1つでも上のポイントに登れたら一緒に喜んでくれて、クライミング選手というだけではなく、一人の人として |

| | |
|-----------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>K 氏のようになりたいと思った。</p> <p>・クライミングを始めた当初は競技として続ける考えはなかったが、日々のトレーニングで、車いすバスケットボールでは使わない筋肉を駆動できおり、クライミングの練習頻度が上がるにつれて車いすバスケットボールのパフォーマンスが向上している感覚があり、「二刀流でやっていこう」と考えるようになっていった。</p> |
| 障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件 | <p>・障害のある子どもたちがスポーツを始めるにあたって、競技団体やチームの情報提供が重要である。最近は SNS やホームページ等で発信されるようになっているが、必要な場所に情報が届いていない印象を持っている。子どもたちであれば特別支援学校、特別支援学級、普通学校や病院等、身近な場所、生活圏に情報が周知されることが必要であると思う。</p> <p>・また、私自身のクライミング日本代表選手との出会いが典型であるが、「否定しない大人」に出会えるかどうか重要であると思う。「目が見えへんからクライミングなんかできひんよ」「足が不自由なら別な競技したらええやん」ではなく、「いいね、やってみよう」と言ってもらえる人との出会いが必要ではないだろうか。</p> |
| 受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響 | <p>・先天性障害のため該当なし</p> |
| 障害者スポーツ継続に関する状況 | <p>・現在、車いすバスケットボールは週に2～3日程度、パラクライミングは週3日程度練習をしている。仕事と競技を両立しており、パラクライミングに関しては日本代表の活動で海外遠征の機会があり、有志の寄付等はあるが勤務先や協会からの支援はなく、国際大会へのエントリーを増やしたいと考えているが苦慮する部分がある。</p> |
| スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件 | <p>・車いすバスケットボールを続けてこられた要因として、大きなものは2つある。1つ目は、高校生の時に10人ほどいたメンバーがほとんど辞めてしまい、自分を含めて3人ほどになってしまった状況でキャプテンを任せられたことである。メンバーが揃わなければチームが解散してしまう状況の中で、高校の友達やバスケットボール部の知り合い、地域の学校の子ど</p> |

| | |
|------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>もたちに声をかけて、チームに残った先輩たちとともにどうにか日々の活動をやりくりした経験が大きかった。当時は大変という思いしかなかったが、キャプテンという責任ある立場を任されていなければ途中で辞めてしまっていたかもしれない。</p> <p>・もう1つは大学時代の同級生(現:選手兼ヘッドコーチ)との出会いである。当時は珍しかった健常者選手としてチームを引っ張っていってくれて、彼が加入をしてから障害のある選手が増加し、日本連盟に登録し公式試合に出場できるようになり、チームの基礎を作ってくれた。現在、自分がパラクライミングを掛け持ちできているのは、彼がチームを一生懸命支えてくれているおかげだと思っている。</p> <p>・パラクライミングの継続に関しては、競技を始めたきっかけを作ってくれたK氏の存在が大きい。2018年・2019年の世界選手権に出場した時に、K氏の3連覇・4連覇を目の当たりにし、感動したと同時に自分もさらに頑張らなければと感じた。クライミングは個人競技であるけれども、自分にはたくさんの応援してくれる人がいて、応援したいたくさんのクライマーがいるということがモチベーションになっている。また、海外の同じクラスのクライマーたちも、大会で知り合うとインスタグラムやダイレクトメッセージでやり取りするようになり、言葉や文化は違っても「友達」と感じられる存在であり、また彼らと世界の舞台で戦いたいという思いも、競技の継続要因になっている。</p> |
| <p>今後のスポーツ実施</p> | <p>・車いすバスケットボールに関しては、「日本選手権で何位になる」といった目標はなく、求められるうちは続けて、年を取ってからもシニアチームから声がかかれば参加したいと思っている。車いすバスケットボールは自分自身の「居場所」であり、たとえシュートが届かなくなったとしても、一緒にやろうよと言われた場所で楽しくバスケットボールを続けていきたい。</p> <p>・パラクライミングに関しては、2023年の世界選手権(スイス)で金メダルを取りたいと考えている。パラリンピックの追加種目になるために、競技人口を増やすべく国内外で普及に関わる活動をしていきたい。</p> |
| <p>まとめ</p> | <p>・中学生の時に車いすバスケットボールを始めて、当時は嫌々参加していたが、高校時代のキャプテンとしての経験や大学の同級生との出会いを</p> |

| | |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>経て、現在は自分自身の「居場所」として楽しんで取り組んでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視覚障害クラスの日本代表選手との出会いでパラクライミングを始め、世界選手権で金メダルを獲得すべくトレーニングに励んでいる。 ・障害のある子どもたちがスポーツを始めるにあたって、特別支援学校や特別支援学級、病院等への情報提供が十分ではなく、上手くマッチングできていない印象を受ける。 ・車いすバスケットボールに関しては、年を取ってからも必要とされる場所で楽しく続けていきたい。 ・パラクライミングは自分自身の競技力向上だけでなく、普及活動にも力を入れていきたい。 |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

(河西正博)

仮名 21-G さん

インタビュー実施日時 2021年10月6日 16:00-18:00 場所 オンライン

| | |
|-------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住:関西地区 生年月日:1998年 性別:女性</p> <p>障害発生年齢:14歳 障害内容:右大腿切断2種3級 リハビリ期間:1年</p> |
| 略歴 | <p>中学3年で受傷、1年後義足を作り地元クラブで走り始めた。高校2年で陸上競技部に入部し、高校卒業後理学療法士になるための専門学校に入るが、実習と競技の両立が困難でやめた。その後、短大に入学し栄養士の資格を取得した。</p> <p>2016年リオパラリンピック、2021年東京パラリンピック出場、その後走り幅跳び専門のコーチに師事。高校3年生の時から企業と契約し、プロとして活動して、21年4月からS社所属。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技:陸上競技100m、走り幅跳び クラス分け:T63</p> <p>主な戦績:リオパラリンピック走り幅跳び 入賞、東京パラリンピック 走り幅跳び入賞 競技開始年齢:15歳(高校1年生)</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・犬の散歩中に事故でけが、壊死が始まり大腿から切断。当時、バスケットボールをやっていたのでそれが出来なくなる事が辛かった。周りの皆が色々全て手伝ってくれたが、自分が出来る事を奪われていくような気がして、少しずつ自分で出来る事は自分でやらせてもらうように言った。そこから自分にもできることがあるということに気づけたのが大きかった。皆が支えてくれていたのでメンタル面ではあまり落ち込みはなく、すぐに前を向いていた。 ・切断後半年くらいで同じ切断の陸上競技選手(Oさん)が会いに来てくれた。何が出来るか色々質問したが「全部出来るよ」と答えてくれた。Oさんを見てこんなにきれいに歩いたり走ったり出来るんだって思った。主治医の知人が義足専門の医師で私の事が載った新聞を渡してくれ、その先生がOさんに私の存在を伝えた事がきっかけ。周りの人も非常にポジティブだった。 ・義足を作ったのは事故の1年後。その間、体育の授業はケンケンで参加していた。私に合ったルールを体育の先生が作ってくれたりした。 ・「車いすバスケやろうと思っていて」と伝えたら、Oさんが「もうそんなバ |

| | |
|------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>スケなんてやらなくていい、陸上やって！」って言って。ユニフォームをプレゼントしてくれて。「もうこれあげるからやるしかない」みたいな感じで、色々言ってくれて、試合に出てみたらすごく楽しかったので、陸上やろうと思った。その後も連絡を取り、走り方のアドバイスを受けていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初は 100m だけで、2016 リオの年から走り幅跳びを始めた。 <p>始めた場所：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初は地元の義足の人の陸上競技クラブ(Y 走行会)。高校 2 年から高校の陸上競技部に入った。 <p>重要な他者：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リハビリ期・開始期 医師、O さん、両親、SEKAI NO OWARI(歌手) |
| <p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・担当医師がスポーツのことを知っていたこと。 ・ロールモデルの導き。 ・地元で義足者の陸上クラブがあったこと、高校部活動での受け入れ。 ・リオパラリンピック |
| <p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・事故前に最初にやったのは空手、そしてバスケットボール。スポーツをやっていたことが受傷後マイナスに働いたことはない。 |
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <p>継続状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学 1 年次に 2016 年リオパラリンピック出場。 ・その後走り幅跳び専門のコーチに師事。 ・高校 3 年生の時から企業と契約し、プロとして活動。 ・21 年 4 月から S 社所属。 ・練習期は午前中に練習、午後ウエイトトレーニングやプール。入社する日は週 1 回、午後 2 時半まで仕事、その後練習。 ・コロナ前だと、年間 10~20 試合くらい、海外遠征は年に 3 回くらい。多い時で 4 回。 <p>スポンサーが付いていなければこんなに遠征できていない。</p> |

| | |
|--------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>主な実施場所:同じ所属の Y 氏の母校の大学</p> <p>重要な他者:同じ義足の走り幅跳び競技者 Y 氏、ライバル T 氏の存在</p> |
| スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件 | <ul style="list-style-type: none"> ・スポンサーの存在 ・一緒に練習、コーチ役でもある Y 氏 ・利用できる陸上競技場 |
| 今後のスポーツ実施 | <ul style="list-style-type: none"> ・陸上は自分の体が「あ、もう無理」と思うまでやりたい。 ・東京大会が終わって悔しい気持ちがあるのでパリこそはと思っている。それが終われば、きっとロスこそはと考えていると思う。 ・陸上をもし引退したとしても、普通に働けるよにという事を面接の時に伺っているが、実際にどうするかは決めていない。今は絵本を描いたり、自分で作った雑貨をネットショップで販売している。 |
| まとめ | <ul style="list-style-type: none"> ・受傷後、非常にスムーズに競技に入る事が出来ている。その要因として、担当医師が障害者スポーツに関する知識を持っていた事、ロールモデルとなる同じ障害のある選手がタイミングよく会いに来てくれ、その後も様々なアドバイスをしてくれた事、地元で切断者のための陸上競技クラブがあった事、一般高校の部活動で受け入れてもらえたこと等があげられる。また、リハビリ中も周囲の人々の反応や接し方がポジティブだったことも影響しているのではないかとと思われる。 ・他の切断のアスリートと同じで障害の受け入れも非常にスムーズであったように推察される。 ・競技の継続に関してはスポンサーの存在、同じ所属会社の Y 選手の存在が非常に大きい。 ・現在 23 歳と若い。陸上競技はもちろんだが、切断ヴィーナスのファッションショーに出演したり、雑貨を作ったり、絵本を描いたりとマルチに活躍しているところが特徴的である。 ・東京パラリンピック招致決定後に競技を始めており、その意味で本人の努力に加えて、スポンサー獲得などに関してはタイミングの良さも影響していると思われる。 |

(藤田紀昭)

仮名 21-Hさん

インタビュー実施日時 2021年10月11日 10:00-12:00 場所 オンライン

| | |
|-------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | 居住:関東地区 生年月日:1990年 性別:男性 障害発生年齢:21歳 障害内容:右大腿切断 リハビリ期間:約1年 |
| 略歴 | 高校卒業後、契約社員として就職。21歳で受傷、約1か月入院。退院後、実家の近くのT市国立リハビリテーションセンターに3か月程度義足づくりで入院。そこにはサッカーをしていた頃と同級生の父がPT(理学療法士)であったり、後に同級生がPTになったりと知り合いがいた。 2017年、現在の会社(O社)に転職。入社当時は週5日勤務後夜や週末に練習。会社からスポンサー料をいただく。冬の競技(スノーボード)もやっており、2022年北京パラリンピックを目指している。スノーボードを競技として始めたのは2017年。2019年に結婚。 |
| 競技基本情報 | 競技:陸上競技 100m、走り幅跳び クラス分け:T63 主な戦績:2021年 東京パラリンピック 100m(T63) 予選敗退。男子走り幅跳び(T63) 入賞 競技開始年齢:24歳 |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | 経緯: ・事故後入院先のPT(理学療法士)や義肢装具士にスポーツを勧められて、色々提案してくれた。そうしたサポートの力は大きかった。何もプッシュされていなかったら、もしかしたら、やっていなかったかもしれない。アンプティサッカー、車いすバスケなど様々なスポーツを経験したのち陸上競技を始めた。 ・当時、特に本気で取り組んでいるものはなかったので、かえって障害を負ったからといって大きなショックもなかった。 ・走るきっかけになったのは、勧められたランニングクリニック(2015年8月、N大学のグラウンドで実施、3日間のプログラム)に参加したこと。自分から情報を探してまで何かしようという事はなかった。 ・そのランニングクリニックの講師がHさんとYさんだった。2人のパフォーマンスを見てすごいなと思った。ここでYさんの存在を知った事が競技を本格的にやる一番のきっかけだった。 ・Yさんから東京にクラブチームがある事を教えてもらい、そこに連絡を取り、競技を始め、板バネ(義足)を借りて本気でやろうと思うようになり、週 |

| | |
|-----------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>に2～3回練習に通った。翌年(2016年)4月に初めて試合に出場。</p> <p>始めた場所:切断者の陸上競技クラブ、都内陸上競技場で</p> <p>重要な他者:開始期 国立リハビリテーションセンターPT(理学療法士)、義肢装具士、Yさん</p> |
| 障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件 | <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツに関する情報があるリハビリテーションセンター ・義足のランニング講習会 ・ロールモデルとなる選手の存在 ・競技用の義足を貸してもらえたこと |
| 受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響 | <ul style="list-style-type: none"> ・小、中、と高校1年までサッカーをやっていた。 ・サッカーをやめてから事故までの数年はたまに8人制の大会に出る程度 ・パラスポーツへの影響は特にない |
| 障害者スポーツ継続に関する状況 | <p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在は競技中心の生活。月・水・金・土が午前中走る練習。月・火・水・金・土に午後、ウエイトトレーニング。火曜と木曜はプール。日曜はオフ。 ・コロナ前であれば年間6～7試合、スノーボードは1試合出場。 ・所属の会社の理解が大きい。練習環境のサポート、社員の応援など。 ・スポーツを継続するのに一番大変なのは金銭面。海外遠征、義足費用、国内合宿など。また自分に合った義足があるか無いか、買えるかどうかの部分も大きい。 <p>主な実施場所:O大学、地域のプール</p> <p>重要な他者:Yさん、妻、所属会社</p> |
| スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件 | <ul style="list-style-type: none"> ・転職するに際しては東京パラリンピック開催が大きく影響している。各社が選手の雇用を考えていたので。 |

| | |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>今後のスポーツ実施</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・今後とも夏と冬の競技を続けていきたい。もっとレベルを上げたい。Yさんを越えたい。 ・引退後は子どもたちの指導・育成という事があるかもしれないが、それをやるのにもまずは今の競技力をアップさせしっかりと結果を出す事が大切だと考えている。 ・今の会社は非常に理解があるので、スポーツを通した社会貢献を会社所属でやれるのではと今は考えている。 |
| <p>まとめ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・受傷後、リハビリテーション施設が国立リハビリテーションセンターだったこともあり、スポーツに関する情報が豊富にあり、スポーツ開始に繋がっている。 ・そうした環境で、義足のランニングクリニックの情報も得て、陸上競技を始めるきっかけとなった。 ・そのランニングクリニックで Y 氏に出会い、本格的に陸上競技を始めるに至った。 ・その際、競技用義足を借りることができたことも競技生活の入り口にあっては大きかった。 ・スポーツ競技の継続に関しては所属会社からの経済的な支援や競技に専念できる環境づくりに対する支援があることが大きい。 ・また、目標となる選手の存在や家族の支援があることも重要であることがわかった。 |

(藤田紀昭)

仮名 21-Iさん

インタビュー実施日時 2021年10月15日 13:00-18:00 場所 S県障害者スポーツ協会

| | |
|-------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住:東海地区 生年月日:1966年 性別:男性 障害発生年齢:30歳 障害内容:視覚障害(光覚)網膜色素変性症 1種1級</p> |
| 略歴 | <p>小学校の頃から運動好き。マラソン大会はいつも1位か2位。体力測定は常に1級。中学校は柔道部。顧問(担任)教師の強引な勧誘で柔道部に。3年でキャプテン。東海大会まで出場した(ベスト16)。(鉄下駄で登校、朝練、昼練、夜遅くまで本練習)柔道初段。高校ではペン習字クラブへ。スポーツはほとんどせず。</p> <p>高校卒業後、印刷会社に就職。1996年に会社を退職し、その後何度か仕事につく。1992年に結婚。2006年に施術診療所を始めた。</p> <p>2014年に仕事を辞めて競技に専念。2015年から2016年まではスポンサーが付いた。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技:柔道・陸上競技・自転車競技・水泳 クラス分け:F11 主な戦績:柔道 2000年シドニーパラリンピック入賞 2002年世界選手権団体 メダリスト 競技開始年齢:31歳</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1997年、視覚障害になってから障害者に対するアドバイスが欲しいと思い、市役所に行った時に県障害者スポーツ協会があるというのを聞いて、その足で障害者スポーツ協会に行った。柔道がやれる事は分かったが、どこでやれるかなどは分からなかったので自分で探し、柔道をやっている公民館に行った。 ・人は同情はしてくれるが、その先は無い。障害を持って、大変でもまず自分から動かないといけないこと気付かせてもらった。 ・公民館の事務局では障害を理由に何度も断られた。10回目くらいに行った時、その教室の先生に声をかけてもらった。先生が中学時代の私の事を知っていて、責任を持つという事で入会することが出来た。 ・入会先では障害のない人と一緒だったが、普通に柔道が出来ることが分かり受け入れてもらった。壁が近くにあたりする時は教えてくれたり、柔道着を握ってから始めたりという点では配慮してくれた。 |

| | |
|------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>・障害者の大会があることを知らなかったが、その先生に教えてもらい 98 年に大会に出場(メダリスト)。99 年アジア大会に出場(メダリスト)。オーストラリアの選手が開催枠で出場するため繰り上がり、シドニーパラリンピックに出場し入賞した。</p> <p>・あれほど嫌だった柔道だが、柔道が強かったので、視覚障害者でもいけるかなと思って始めた。視覚障害になってからの柔道はやらされる柔道ではないのでとても楽しかった。</p> <p>始めた場所:町の柔道場(公民館)障害のない人と一緒</p> <p>重要な他者:開始期</p> <p>①公民館で柔道を教えていた先生(声をかけてもらわなかったら、柔道をする事が出来なかった)。</p> <p>②自分の子ども達(目が見えなくなってしまったので、普通の父親のように子どもが育てられないなと思った。だから自分の生き方を見て育てて欲しいと思って、子ども達のために頑張った)</p> |
| <p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p> | <p>・障害者福祉に関する情報提供システム</p> <p>・県障害者スポーツ協会</p> <p>・居住地にある柔道教室(公民館)</p> |
| <p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <p>・受傷前に柔道をやっていたからこそ、障害を持ってから柔道をやることが出来た。</p> |
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <p>継続状況:</p> <p>・2002 年イタリア世界選手権で団体メダリスト、2004 年ブラジル世界選手権で個人入賞</p> <p>・2000 年シドニーパラリンピック出場後、ネットで検索するなどして、自転車、陸上競技などを始めた。自転車を始めるに際して競輪場を使わせてもらえなかったが、粘り強く交渉し、競輪選手と仲良くなるなどして使わ</p> |

| | |
|---------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>せてもらえるようになった。しかし、タンDEM自転車¹が 150 万円もすることから諦めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・陸上競技は子どもが陸上をしており、子どもの学校で砲丸を投げさせてもらったら意外と飛んだので始めた。2001 年～2006 年全スボ投擲種目連覇。陸上競技場での練習も最初は使わせてもらえなかったが人との関係を作る中で最終的に利用出来るようになった。 ・スポーツクラブ入会の際同様の事があった。この時は入会后障害のないメンバーが受け入れてくれなかったが、3 か月程度で受け入れてくれるようになった。 ・この期間は職に就くことなく競技数種目に専念していた。妻が働き生活を支えていた。2014 年以降も競技に専念。 ・現在、投擲専門の指導者に指導してもらっている。 <p>主な実施場所：競輪場、陸上競技場、スポーツクラブ、プール他 重要な他者：妻、子ども、使用するスポーツ施設のスタッフ(彼らと仲良くなることで使用できるようになる)</p> |
| <p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・東京パラリンピック ・障害者年金等の社会制度 |
| <p>今後のスポーツ実施</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・105 歳までにマスターズで記録を残すことが目標。仕事はやらない。今の世界で満足している。 ・60 歳になったら一般の大会にも出ようと思っている。投擲 5 種に出る。ハンマー投げはやっていないので、後 5 年間で練習する。 ・105 歳まで面倒を見てくれるスポンサーも探す。健常者の大会に、アイマスクをして出る。そうすると社会的に認知度がアップする。その時に大きい会社の社会貢献でスポンサーマークを入れたら、その会社も社会貢献していると思われるのでそのようなスポンサーを探す。 |
| <p>まとめ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・障害を持ってからのスポーツ開始には、自治体の情報提供制度や障害者スポーツ協会の存在が影響している。 |

- ・しかし、何より本人のやりたい気持ち、自ら動く行動力が大きく影響している。受け入れてもらえないスポーツ施設、クラブのメンバーに対しても声を荒げることなくコミュニケーションをとり、最終的に受け入れてもらえるようになっている。
- ・スポーツを始めるに際しては県の障害者スポーツ協会が窓口になって、「情報提供と同時に、“こういうのがあるよ”ではなくて、もし柔道をやりたいと言ったら、こういう教室で、あそこの教室の先生に言ってあるから 1 回見学に行ってみなというところまで言ってくれるとよいと思う」と言っているように情報提供に終わらずスポーツの場へのつながりが重要であることが明らかである。
- ・「105 歳までスポンサーをつけて一般の大会に出る」という今後のスポーツ活動の見通しはこれまでにないもので、一つのモデルになる可能性を秘めている。
- ・家族や身内の理解と協力が最も重要である。

(藤田紀昭)

仮名 21-Jさん

インタビュー実施日時 2021年10月15日 13:00-16:00

場所 S県障害者スポーツ協会

| | |
|-------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住:東海地区 生年月日:1959年 性別:男性</p> <p>障害発生年齢:52歳 障害内容:下肢切断 1種1級</p> <p>リハビリ期間:(治療を含む)3年、リハビリ後もおなかの血流を促す手術や腱板断裂の縫合手術など手術を繰り返す。2016年末頃まで。</p> |
| 略歴 | <p>幼稚園の頃から野球をしていたが、小学3年生からは、スポーツ少年団で本格的に開始。中学校でも野球部に入り、S県で優勝。高校でも野球をやり県準優勝。高校卒業後、自衛隊一般曹候補生になった。その後部隊に入隊。</p> <p>2000年には結婚し、27歳で除隊。実家の仕事を継ぐが、その後別会社に。その間ずっと野球はやっていた。2016年から現職。障害者枠で入社した。会社は障害者スポーツの練習や普及活動もやりやすい条件(仕事として認められている)で、大会遠征も出張扱いとなっている。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技:アーチェリー・フライングディスク</p> <p>主な戦績:2014年長崎全国大会、2015年和歌山全国大会、2016年岩手全国大会フライングディスクメダリスト、2017年アーチェリー部門で愛媛全国大会メダリスト、2018年福井全国大会アーチェリー部門メダリスト 競技開始年齢:55歳</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>・経緯:</p> <p>・事故後、S県で治療中自ら障害者スポーツをやりたい旨医師に告げたことから切断の部位など配慮してくれた。また、県障害者スポーツ協会職員が、障害者スポーツの情報を持ってきてくれた。</p> <p>・障害者スポーツ協会職員とは勤務していた会社とのつながり(大会時のお弁当の注文など)があり、知っていた。</p> <p>・2012年、入院中に初めてパラリンピック(ロンドン大会)をテレビで見た。それまでは今後のことなど不安で考えることが出来なかったが、パラリンピックを見て、障害のある人の可能性を知った。義足で競技する事を考えたが、医師からそれは難しいと告げられ、車いすの競技に関心を持つようになった。</p> |

・リハビリを行った病院でもスポーツに精通している先生が多かった。入院していた病院にはけがをしたスポーツ選手が多く、その選手たちを見て自分のモチベーションも高まった。

・入院中から週末は地元に戻り、障害者スポーツ協会でアーチェリーなどをした。義足で何もしない人生よりはスポーツに挑戦する人生の方がよいと考えた。

・その頃、子どもは小 6 と小 3。友人に「何でお父さんの足がないんだ」というようなことを聞かれて辛い思いをさせたこともあり、もう一度スポーツをやって格好いいところを見せたかった。

・2014 年頃からフライングディスクとアーチェリーを始めた。アーチェリーはコンパウンドボウを使った。もともと自衛隊で射撃をしていたこともあり、アーチェリーに挑戦した。射撃も一度やったがライフルの値段など初期投資が非常に高いのでお金のかからないものにした。この頃、障害者スポーツ指導員(初級)の資格を取得した。

・全国障害者スポーツ大会(2014 年長崎・2015 年和歌山)に出場。

・その後、カヌーにも挑戦するも 2017 年 12 月に再度、事故にあう。

・その後、アーチェリーを本格的に行うようになる。全スポ(全国障害者スポーツ大会)の全国記録を上回っているが、2019 年、2020 年、2021 年と台風、コロナで大会が行われていない。

・障害者アーチェリー協会には今年登録し、大会参加のための記録を目指している。

・入院当初は体重が増え、体力も精神的にもなえていた。そういう時に県障害者スポーツ協会の職員が来てくれた。スポーツをする事で体が鍛えられ、社会復帰できると考えている。通常の体力があれば普通の会社にも入れると考えるようになった。

・

始めた場所:S 県障がい者スポーツ協会(体育館等)

重要な他者:

① リハビリ期 自分の意見を聞いてくれた医師(紹介状などにもスポーツをやりたい旨を書いてくれた)。S 県でのリハビリには妻が付き合ってくれた(妻もスポーツをしている)。

| | |
|-----------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | ②開始期 県障害者スポーツ協会職員、フライングディスクの指導者 |
| 障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件 | <ul style="list-style-type: none"> ・ロンドンパラリンピック ・県障害者スポーツ協会およびそこに付設の体育館 ・S 県でのスポーツ教室講習会やアーチェリーの練習時は、新幹線に乗車し、車椅子で妻と帰宅 |
| 受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響 | ・野球で培った地肩の強さや射撃の訓練等が現在のスポーツ活動にも好影響を与えている。 |
| 障害者スポーツ継続に関する状況 | <p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在、火、水、土、日は競技に専念できている。 ・初級スポーツ指導員とフライングディスク指導員の資格も同時期に取得 <p>主な実施場所：</p> <ul style="list-style-type: none"> アーチェリー：S 市総合運動場アーチェリー練習場、福祉会館 フライングディスク：S 市福祉エリアグラウンド <p>重要な他者：現在の職場の上司</p> |
| スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件 | ・東京パラリンピック開催により指導する場を多く持つことができている。 |
| 今後のスポーツ実施 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分でアーチェリーやフライングディスクを続け、パラリンピックを目指すと同時に、競技を広く普及していきたい。 ・アーチェリーやボッチャ、フライングディスクも障害があってもなくても出来る。教室等を通じて障害のある人と無い人の壁がなくなっていけばいいと考えている。若い人々には、そうした事を伝えていきたい。 |
| まとめ | <ul style="list-style-type: none"> ・事故で受傷後、手術等を何度も繰り返している。 ・そんな中で社会復帰していくために必要な条件としての体力向上のため |

にスポーツを始めた。しかしそこに至るまで、病院の医師や障害者スポーツ協会職員が障害者スポーツに必要な情報を多く提供していた。また、病院内で見たロンドンパラリンピックの様子も影響を与えていた。

・現在、会社で障害者スポーツを実施し、普及活動をするのを業務として認められている為、競技を存分に行うことが出来ている。

・今後は自己の競技力向上と共に、競技の普及、若い世代が障害の有無による壁を取り除けるような活動に従事したいと考えている。

(藤田紀昭)

仮名 21-K さん

インタビュー実施日時 場所 2021年10月25日 14:00-16:00 場所 オンライン

| | |
|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住:関西地区 生年月日: 1961年 性別:女性</p> <p>障害発生年齢:先天性障害 障害内容:二分脊椎</p> |
| 略歴 | <p>高校卒業後、いくつか転職し、45歳の時にバドミントンを始めた。東京2020パラリンピック競技大会でバドミントンが正式競技になることが決定した後、アスリート雇用となった。アスリート雇用の契約が終了した現在は、仕事をしながら、地元の次世代アスリートの育成を行いつつ、バドミントンを継続している。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技:バドミントン クラス分け:WH2</p> <p>主な戦績:2013年世界選手権シングルス・ダブルス・混合ダブルス 銅メダル 競技開始年齢:45歳</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの頃は、外で友達とキャッチボールをして遊んでいた。中学校に入ると、友達に誘われ、ソフトボール部に入った。部員と同じことは出来ないため、ピッチャーにボールを返球する練習、打つ練習を行うなどして部活に参加していた。小学1年生から3年生までは養護学校に通い、体育の時間は障害のある仲間と一緒に運動をしていた。しかし、小学4年生で普通学校に転校してからは、高校を卒業するまで、体育の時間はずっと見学だった。卒業後は何度か転職をした。運動をする機会はなかった。 ・45歳の時に、同じ会社に勤めるパラバドミントンの日本代表選手から「バドミントンを体験してみませんか」と誘いを受け、生まれて初めて競技用車いすに乗り、体験した。初めてにもかかわらずバドミントンができたことに感動し、続けてみようと思った。 <p>始めた場所:障害者スポーツセンター</p> <p>重要な他者:会社の同僚(パラバドミントン日本代表選手)、地域のバドミントンコーチ</p> |
| 障害者スポーツ開始に影響を受けた社会 | <ul style="list-style-type: none"> ・バドミントンを始めるに際しては、目標となる日本代表選手がいたこと、指導してくれる地域のコーチがいたことが大きい。 ・自宅から通える場所に、障害者専用施設があったことも影響している。 |

| | |
|---------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 的状況・環境・条件 | |
| 受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響 | 先天性障害のため該当なし |
| 障害者スポーツ継続に関する状況 | <p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バドミントンを始めた頃から、地元のコーチが熱心に指導してくれたことで、バドミントンが楽しく、上達も早かった。車いすでバドミントンを行う選手は少なく、競技を始めてから1年で国際大会に出場した。同じクラスの海外選手の存在、圧倒的な強さに刺激を受け、もっと強くなりたいと練習を重ね、強化合宿などで全日本コーチから指導を受けた。バドミントンがパラリンピック正式競技に決定した後(5~6年前)、アスリート雇用となった。昨年、アスリート雇用は終了したが、地元の次世代アスリートの育成を行いつつ、バドミントンを継続している。 <p>主な実施場所:近隣の体育館、障害者スポーツセンター</p> <p>重要な他者:地域のバドミントンコーチ、パラバドミントン全日本コーチ</p> |
| スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域で指導してくれるコーチがいたこと、第一線で活躍していたパラバドミントンの選手と一緒に練習できる環境があった。 ・バドミントンがパラリンピック正式競技に決定した後(5~6年前)、アスリート雇用となり、バドミントン中心の生活となった。 |
| 今後のスポーツ実施 | <ul style="list-style-type: none"> ・地元の次世代アスリートの育成を行いつつ、練習を継続していく予定。 ・スポーツを始める際には、まずはやる気が必要。指導者も体験に来た人をやる気にさせることが重要。バドミントンは、体育館の予約が取れば練習が出来る。また、一緒にバドミントンを行う仲間がいると継続に繋がる。 |
| まとめ | ・中学校でソフトボール部に所属したが、卒業後は44歳までスポーツをする機会に恵まれなかった。 |

- | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none">・バドミントンを始めるにあたって影響を与えたものとして、パラバドミントンの日本代表選手、地域のバドミントンコーチ、障害者スポーツセンターの存在がある。・国際大会での海外の同じクラスの選手との出会い、全日本コーチから指導を受けたこと、継続的な地域コーチのサポートが競技レベルの向上や意識に影響した。・バドミントンがパラリンピック正式競技に決定した後、アスリート雇用となったことで、練習時間が増え、金銭面等でサポートが受けられるようになった。・アスリート雇用の契約が終了した現在は、仕事をしながら、地元の次世代アスリートに対し、国際大会での経験や技術指導を行いつつ、バドミントンを継続している。 |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

(兒玉 友)

仮名 21-Lさん

インタビュー実施日時 2021年10月30日 14:00-16:00 場所 N 駅周辺会議室

| | |
|-------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | 居住:東海地区 生年月日:1976年 性別:男性 障害発生年齢:17歳 障害内容:視覚障害(レーベル病) リハビリ期間: 2か月 |
| 略歴 | 妻と子ども3人の5人暮らし。 高校2年時にレーベル遺伝性視神経症(レーベル病)を発症。高校卒業後、鍼灸師の免許を取得するため、東海地区の特別支援学校(盲学校)専攻科理療科に入学し、専門教育を学ぶ。免許取得後、関東地区の国立大学理療科教員養成施設に入学して、理療(按摩・マッサージ・指圧・はり・きゅう)を教育する教員免許を取得する。取得後は関東地区の治療院に4年間勤務し、その後、東海地区の特別支援学校(盲学校)に教員として採用され、現在に至る。 |
| 競技基本情報 | 競技:視覚障害者柔道 競技開始年齢:16歳(発症前から継続) 主な戦績: 2004年 アテネパラリンピック 60kg以下級 メダリスト 2008年 北京パラリンピック 60kg以下級 入賞 2012年 ロンドンパラリンピック 66kg以下級 入賞 2016年 リオパラリンピック 60kg以下級 メダリスト 競技:柔術(ロンドン大会終了後、柔道に活かす技術習得のために取り組み始める) 競技開始年齢:35歳 競技:グラップリング 競技開始年齢:39歳 視覚障害者柔道を引退したリオ大会後から取り組む。視覚障害者柔道の後進の指導のために役に立つと思い、道場に通い始める。 |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | 経緯: ・高校入学後に始めた柔道が楽しく、強くなりたいという思いが徐々に強くなっていった。その矢先、高校2年時にレーベル病を発症。視力が0.01まで落ち、これまで出来ていた事が出来なくなることが増えた。周囲も視覚障害者の自分をどう扱っていいかわからない状況であった。自分を取巻 |

| | |
|------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>く環境が変化していく中でも、視覚障害者柔道は組めば、これまでと同様に柔道ができた。周囲が視覚障害であることを忘れるくらい普通に接してくれたため、今の自分が認められていると自己肯定できた。発症前と変わらずに取り組める柔道が支えとなり、自分自身の心の拠り所になった。</p> <p>始めた場所：高校の柔道場</p> <p>重要な他者：高校の柔道部の恩師。柔道家としても教員としても尊敬している。柔道が楽しいということを教えてくれた。</p> |
| <p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・発症前から柔道の楽しさを教えてもらっていた。 ・発症後でも一緒に練習に取り組む柔道部の仲間がいた。 |
| <p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・小学校はバスケットボールやソフトボール、中学校はバレーボール。 ・球技や団体競技が自分に向いていないと思い、個人競技で球技以外の部活動をやりたいと、高校で柔道部に入部。 ・柔道を好きになったこと、強くなりたいと思ったことが、発症後にも柔道をやりたいと思わせてくれた。 |
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視覚障害者柔道人口が少ないため、予選会なしで全日本視覚障害者柔道大会に出場できた。学生の部で優勝して周囲の人たちも祝福してくれたが、発症前の自分と実力が変わっていない中での周囲の評価に違和感があった。周囲とのギャップに居心地の悪さを感じていたが、視覚障害者柔道のパラリンピックの金メダリストの助言で、悩みが解消して、パラリンピックの金メダル獲得を目標に練習に注力。 <p>主な実施場所：日常練習する道場、知り合いのいる道場での出稽古</p> <p>重要な他者：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助言をくれたU先生(視覚障害者柔道のパラリンピック金メダリスト) ・妻や子どもたち(日中は特別支援学校の教員の業務があり終業後や週 |

| | |
|--------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>末を練習や大会に充てるため、妻や家族のサポートで継続できた)</p> <p>・視覚障害を持つ職場の同僚の先生や生徒(国際大会などで授業ができないことを後ろめたく思っていたこともあったが、国際大会やパラリンピックで活躍している姿を見ることが励みになるからと後押しされた)</p> |
| スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件 | <p>・平日は遠方の道場への出稽古が難しかったため、これまで視覚障害者を受け入れたことのなかった職場近くの道場に依頼し、平日終業後の練習環境を提供してもらった。</p> |
| 今後のスポーツ実施 | <p>・視覚障害者柔道はリオ大会で銀メダルを獲得して引退。</p> <p>・現在は、後進の指導に役立つと思い、柔術とグラップリングの道場に通っている。</p> |
| まとめ | <p>・発症前から柔道の楽しさを知っていたため、発症後でも楽しく取り組むことができた。</p> <p>・視覚障害者柔道は組めば障害の有無にかかわらず取り組める競技のため、発症後、出来ないことが増えていく環境下において、心の拠り所となり、自己肯定に繋がった。</p> <p>・視覚障害者柔道を始めた当初は、自分の実力が変わっていないのに、周囲の評価が一変したことに戸惑いを覚えたが、同じ視覚障害者柔道のパラリンピアン助言で、パラリンピックの金メダルを目指すことを決意した。</p> <p>・柔道を通して、社会人としての自分、障害者である自分、柔道家である自分など、自分自身を多面的に捉えることができ、自己実現に繋がっていった。</p> <p>・障害受容はできていないが、柔道を通して、障害は不便だけど不幸ではないと思えるようになった。</p> |

(小淵和也)

仮名 21-Mさん

インタビュー実施日時 2021年10月26日 18:00-20:00 場所 オンライン

| | |
|-------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住:関西地区 生年月日:1981年 性別:男性</p> <p>障害発生年齢:26歳 障害内容:右足腓骨神経麻痺 2種6級</p> <p>リハビリ期間:4か月</p> |
| 略歴 | <p>一般小中高校・大学を卒業。一般高校数学教諭だったが、2年前からは特別支援学校教諭として勤務。2018年に結婚し、現在は妻と子どもと3人で暮らしている。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技:スノーボード クラス分け:LL2</p> <p>主な戦績:2019年世界選手権 メダリスト、2020年ワールドカップ(NOR)メダリスト 競技開始年齢:23歳 (障害発生前から同一競技を実施。怪我をしてから6か月後に練習を再開)</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏場スノーボードの練習場でジャンプの時にコースアウトし、両大腿骨を骨折。ゴールデンウィーク中の為、手術等がすぐに対応出来なかった事が影響し右足に障害が残った。 ・4か月程度リハビリを実施。入院中からブーツが履けるかどうか等チェックをしていた。 ・医師にスノーボードが出来るかどうか聞いた所、問題ないということですぐに始められた。 ・怪我をしても気持ちが落ち込むということはなかった。動くようになるというのなら何かするが、治らないということなので、それを受け入れて普通に過ごしている。 ・技術的には重心の位置など様々な工夫をしている。怪我する前よりも考えて滑るようになった。 ・スノーボード自体を始めたのは最初の赴任地が田舎でやることもなく、車でうろろしているところゲレンデを見つけたのがきっかけ。 ・怪我をした後、スノーボードを再開して、リフトに乗っている時、スマホで検索して障害者の大会があることを知った。 <p>始めた場所:(怪我をした後) :A スキー場(H県)</p> |

| | |
|------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・それまでのスノーボード競技の経験があったこと。 ・障害者のスノーボード大会があったこと、また、その情報をネットで得ることができた(ネット社会が出来上がっていた)こと。 |
| <p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・小・中学校ではサッカー、高校では弓道をしていた。 ・23歳でスノーボードを始めて2年でインストラクターの資格を取得した。大会にはそれほど多く出ていなかった。大会では西日本で中の下くらいだった。 |
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・2010年頃、初めて障害者の大会に出場した。この時は選手をサポートする人たちの部に出た(全国障がい者スノーボード選手権大会&サポーターズカップ)。 ・この大会の次に出た時から障害者の部に出場するようになった。 ・2016年11月に初めて海外の大会に出場した。海外の大会では最初は成績を残せなかったが、コーチやトレーナーに言われたようにトレーニングをするようになって結果が出るようになった。2019年には世界選手権で3位になった。 ・日本代表チームに入っているが、その中でも勝てないとパラリンピックには出られない。2021年12月まで争って残り1枠を取りたい。 ・教師をしている為、基本仕事を中心となる。冬場は仕事終わりに近くのゲレンデに行ってナイターで練習をする。夏場は週末などに芝の練習場や人工雪の練習場に行って練習をする。 ・今年はヘルニアのため夏場はジムで筋力トレーニングが中心だった。 ・仕事が公立学校教員という事もあり、他の選手のように海外遠征にたくさん出て行く事はできない。基本的には有休を使って行く。事前に計画を立て、多くの先生方に配慮していただいている。管理職も理解があり、助かっている。 ・年間普通だと10日から2週間くらいの海外遠征が2回から3回ある。コロナの影響で、帰国後隔離となるが、そこは特別休暇等の扱いとなっている。 |

| | |
|--------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・国内の合宿も同じくらいの日数を使うが、自分は週末だけの参加となる。 ・1回の海外遠征で2大会くらいに出場しポイントを取ってくる。 ・最近ではアスリート助成金もあり、経済的に助かっている。 ・引退した後のことも考えると、現職を辞めることはあまり考えられない。 |
| スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件 | <ul style="list-style-type: none"> ・公務員でこうした活動が出来るのは、職場の理解が一番大きい。 ・外に出ることが多いので家族の理解も必要。妻が理解してくれている事も大きい。 ・冬季スポーツはお金もかかる。スポンサー企業が道具を支給、支援してくれている事も大きいですが、雪質等に合わせて様々な会社のボードを使いたいという事もあり、難しい所である。 ・精神的な部分ではスノーボードをやり始めてからずっと憧れの存在だったO氏の存在は大きい。同じ日本代表チームでやっていることは大きな支えであり、刺激となっている。 |
| 今後のスポーツ実施 | <ul style="list-style-type: none"> ・腰のヘルニアのこともあり、北京パラリンピックを区切りにしたいとは思っているが、今悩んでいる。 ・自分の思った通りの結果が出ればいいが、多分難しいので、そうなるとその次もという考えもある。 ・スノーボードは死ぬまでやると思う。 ・指導者については求められればやると思うが、多分求められない。 |
| まとめ | <ul style="list-style-type: none"> ・障害を持つ前からスノーボードをやっており、受傷がスノーボード継続に大きな障害とならなかった事が同一競技を継続できた要因といえる。 ・障害を持つ事でそれまでの生活や競技生活が分断されるという事が無いこれまでにはなかったキャリアパターンといえる。 ・公務員をしながら冬季競技をトップクラスで継続するのは相当大変な事だと考えられるが、職場の理解と支援が大きく、そのことを可能にしている。ある意味二刀流を成功させている。 ・日本代表チームの人間関係が非常によく、お互いを刺激しあって伸びていっているという雰囲気をお話から、感じ取る事ができた。この事が競技継続の大きな要因となっている。 ・2020 パラリンピック東京大会決定後、アスリート助成等の制度ができ、 |

| |
|--------------------------------|
| 経済的な支援も受けられるようになった事も継続の要因といえる。 |
|--------------------------------|

(藤田紀昭)

仮名 21-N さん

インタビュー実施日時 2021年11月1日 19:00-20:30 場所 オンライン

| | |
|-------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住:東海地区 生年月日:1981年 性別:男性</p> <p>障害発生年齢:32歳 障害内容:右大腿2分の1以上欠損(3級)</p> <p>入院・リハビリ期間:2か月</p> |
| 略歴 | <p>事故前はサラリーマンだった。2015年に結婚し、妻と子ども5人の7人家族。現在も同社に勤務。2019年からアスリート雇用。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技:スノーボード クラス分け:LL1クラス</p> <p>主な戦績:2016年全国障がい者スノーボード&サポーターズカップメダリスト、2017年ワールドカップスノーボードクロス メダリスト、2017年ワールドカップバンクドスラローム メダリスト、2018年平昌パラリンピック男子バンクドスラローム 入賞、2019年スノーボードクロス 入賞。</p> <p>競技開始年齢:20歳(障害発生前から同一競技を実施)</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>経緯:</p> <p>・業務中の事故により右大腿2分の1以上欠損となった。事故で大腿部から切断となり病院搬送後に手術を受けるが、1か月後に患部が壊死し、断端部の傷口が開いてきたため再手術を受けた。術後2~3日経過した時からリハビリを開始、再手術から3週間後に義足での歩行・リハビリを行い、入院から2か月後に退院。退院後1か月間が自宅療養期間で、1人旅に出かけ、1日30~40キロのサイクリングに挑戦するなど、アクティブな療養期間を過ごした。切断をした事実は客観的に捉えており、落ち込んだことはない。入院中も見舞いの友人、義足を履くこと、リハビリも筋トレの延長というイメージでとにかく楽しく取り組んだ。腹筋、片足スクワット、片足自転車漕ぎなど入院中にあまり筋力が落ちないようにと思ってトレーニングしていた。</p> <p>・義足を作った後に再手術をしたので、ソケットが合わず作り直すことになった。事故で足が取れているのを見て、自分は義足になると思い、何ができるかと考え「スノーボード」だと思った。入院中に調べていたら、ソチパラリンピックからスノーボードが種目として採用されることを知り、パラリンピックに出ようと思った。もともとプロスノーボーダーだし、義足の友達Hがいたことも大きい。彼は片足でスキーをし、生活をしているのを見て</p> |

| | |
|------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>いたので、義足や切断に対する不安はなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初に入院した時の義肢装具士が、「義足でカッコよく歩け」「なんでもスポーツはやってみろ」という人だった。まず使用したのが歩行用の義足で、日常生活用で初心者向けのソケットが深く可動域の少ない感じのもので、スポーツには向かなかった。最初にスノーボードをやった時にこのソケットじゃダメ、もう少し曲がりやすい義足じゃないと滑れないと感じた。もともと情報もなく知識もなかったので、日常生活やサイクリングでは不便を感じなかったが、スノーボードをし始めて感じるようになった。 ・義足になった時は、ネットで調べても情報が出て来なかった。「義足」と調べても下腿義足しか出て来ない。大腿義足の情報はすごく少なく、さらにスポーツ、大腿義足でスポーツするという情報が本当に少なかった。それぞれの競技ごとに必要な情報があったら一番いいが、日常用のことでも、情報がすごく大事だと思った。そんな状況で頼ったのは、義肢装具士、そして自分と同じ大腿義足のスキーヤーH。 ・義足を履いて、スノーボードの大会に出場したのは2016年の第2回全国障がい者スノーボード&サポーターズカップで、大腿切断の部でメダリスト。 <p>始めた場所:元々のホームゲレンデはOスキー場 重要な他者:大腿義足の友人スキーヤーH、義肢装具士、勤務先の会社の社長</p> |
| <p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ソチパラリンピックでスノーボードが正式種目に採用されることが決まり、パラリンピックに出場しようと思った。 ・スノーボードを継続することに対する会社の理解、さらに強化指定選手になることで得られる各種補助金の存在。 |
| <p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの頃から家族でよくスキー場に出かけていた。小5からスノーボードを始め、大学2年で本格的に競技をやりたいと思い、ニュージーランドのキャンプに参加した時にHと出会ったこと。 ・受傷前にプロスノーボーダーであったことが、競技に向かう姿勢を形成している。 |

| | |
|---------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <p>継続状況： ・今は週 1 回室内のハーフパイプ(3 時間)、週 3～4 回人工芝のジャンプ練習場(30～40 分)、週 2 回ジム、これからは雪の上や遠征が増える。 良き理解者は、家族(特に妻)と会社の社長である。</p> <p>主な実施場所：室内のハーフパイプ(3 時間)、人工芝のジャンプ練習(30～40 分)</p> <p>重要な他者：妻、社長、代表チーム(コーチ、チームメイト)</p> |
| <p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <p>・連盟の指定強化選手で、アスリート助成ももらっている。会社の理解もあり、アスリート雇用として競技に専念できる体制もある。</p> |
| <p>今後のスポーツ実施</p> | <p>・当分引退は考えていない。 ・元プロスノーボーダーなので、ライセンスの再取得を目指している。</p> |
| <p>まとめ</p> | <p>・事故で切断後すぐに義足で何が出来るかを考え、もともと行っていたスノーボードなら出来ると思った。当時パラリンピックの正式種目に採用されたことで、パラリンピックに出るという目標が出来た。</p> <p>・友人に同じ大腿義足のスキー選手がいたことで、義足で生活すること、スポーツをすることに対する不安を感じなかった。</p> <p>・大腿義足でスポーツをすることへの情報が少ない中、自ら必要な用具や支援を見つけていった。</p> <p>・東京パラリンピック開催決定後の各種助成制度がスポーツ継続には好影響である。</p> <p>・スポーツ開始、継続とも妻、社長の理解と支援が大きい。</p> |

(齊藤まゆみ)

仮名 21-O さん

インタビュー実施日時 場所 2021年10月29日 15:00-17:30 場所 オンライン

| | |
|-------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | 居住:関東地区 生年月日:1980年 性別:男性 障害発生年齢:16歳 障害内容:右上腕欠損 リハビリ期間:4か月 |
| 略歴 | 妻と子どもの3人暮らし 都内企業に契約社員として所属し、主にアスリート活動を行っている。 小学校、中学校、高校とバレーボール部に所属。高校では全国大会にも出場した。17歳でバイク事故を起こし、右上腕の1/2以上を切断。入院・リハビリでの2年間の休学を経て高校を卒業。21歳の頃にスノーボードを始めるが、国内でのパラスノーボードが競技として存在しておらず、28歳で一度引退。その後、国内にパラスノーボード競技があることを知り、38歳で再挑戦。現在は、スノーボードクロスの日本代表強化指定選手として活動を続ける。 |
| 競技基本情報 | 競技:パラスノーボード クラス分け:UL 主な戦績:全国障がい者スノーボード選手権 3連覇(スノーボードクロス)、北米選手権 メダリスト(スノーボードクロス) ワールドカップ オーストリア大会 バンクドスラローム メダリスト 競技開始年齢:21歳(スノーボード)、38歳(スノーボードクロス) |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | 経緯: ・高校2年時にバイク事故により右上腕を失った。入院時に義手をつけるためにリハビリを行ったが、実際にできた義手は長すぎて制御が難しく、現在は義手を付けずに日常生活は送っている。受傷当時はショックで「人生終わったと感じて、何度か自らで命を絶とうと行為に及んだが、死にきれなかった」。徐々に生かされていることに意味があると感じ始めた頃にスノーボードに出会った。高校在学中にアルバイトしていた勤務先の社長と社長の弟に誘われてスキー場を訪れた。当初は片手でブーツの紐も結べない自分を他人に見られることが嫌で躊躇していたが、滑り始めると、周囲の人たちが喜んでくれて、スノーボードをやっている時は、他人の目が気にならなくなった。「一度は投げ捨てた人生。どうせなら本気でやってみよう」と、スノーボードに熱中していった。 |

| | |
|------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>始めた場所:スキー場</p> <p>重要な他者:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勤務先の社長と弟。特に弟は同世代で、お互いに上達しようと励まし合いながらスノーボードを続けた。 ・ジャンプ台をきれいに飛んでいた名前を知らない選手。自分がやりたいのはこのジャンプだと気付かされた瞬間で、そこから本気で練習するようになった。 |
| <p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・2000年以降、これまでスノーレジャーの主流であったスキー、スケートの市場規模とスノーボードの市場規模が同等になってきた。スノーボード利用者は増え、これまでスノーボードの滑走を禁止していたスキー場でも、徐々に滑走可能となり、多くの若者がスノーボードをするために、スキー場を訪れるようになった。 |
| <p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・小学5年生からバレーボールに打ち込む。中学校、高校と続け、高校2年時には全国大会に出場する。 ・父親がK県の白バイ指導員(副業)をやっており、3歳からオートバイに親しむ。高校2年時には東京都のオートバイ大会で入賞し、特別訓練所の訓練生に選出される。 ・受傷後、利き腕変更し、左腕で打つ練習をして、社会人バレーボールチームでも活動を続ける。 ・バレーボールをやっていたため、体格に恵まれ、海外選手に引けを取らず、ストローク量で優位に立てる。 ・バレーボールでは走る時や跳ぶ時に、母趾球を使って体重を乗せてプレーをすることが多く、スノーボードでの腰の動きや体重移動、反応の良さなどに好影響を及ぼしている。 |
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の雪は柔らかく、コースを作っても溶けてしまうことから、スノーボードクロスは常設コースは存在しない。そのため、国内で練習するにあたっては、大会用に臨時で設置されるコースの情報を集めて、大会開催の前後の期間で練習する形式で国内のコースを転々する。一方で、海外では常設コースがあるため、スキー場で利用料を支払えば練習が可能である。 |

| | |
|------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>・主な実施場所:スノーボードクロスのコース(国内は大会用の臨時コース、海外は常設コース)</p> <p>重要な他者:</p> <p>・同年代の義足の日本代表チームメイト、心技体が揃っており、世界ランキング1位に上り詰めるまでの過程も見ている。憧れの存在。</p> <p>・海外の有名選手(ピーター・ライン)。当時は、スピントリックが従来の回し方と異なり衝撃であった。自分の中にあったスノーボードの価値観が変わり、一気に世界が広がった。</p> |
| <p>スポーツ継続に与えた社会的状況・環境・条件</p> | <p>・パラスノーボードが2014年ソチ大会ではデモ種目、2018年平昌大会では正式種目として採用された。日本障害者スキー連盟がスノーボードも含めた障害者のスノースポーツを統括するようになった。</p> |
| <p>今後のスポーツ実施</p> | <p>・2022年の北京大会、2026年のイタリアののミラノ/コルティナ・ダンペッツォまではスノーボードで、それ以降は障害者ゴルフをしていくことで所属先企業と話をしている。</p> <p>・スノーボードを引退していた時期に、妻と共通の趣味であるゴルフを始めた。やってみると非常に難しく、現在も興味を持っている。</p> |
| <p>まとめ</p> | <p>・事故で右腕を失い、人生に絶望していた時にスノーボードに出会った。仲間と一緒に成長していくこと、人との出会いに感謝できるようになり、人生を前向きに捉えられた。右腕がない自分を受け入れられるようになり、他人の目が気にならなくなった。</p> <p>・スノーボードを始めるきっかけも、継続するきっかけも、自分が目にしたジャンプが格好良くて感動し、それを自分でやってみたいという想いで無我夢中で練習して、できるようになった。</p> <p>・国内では、パラスノーボードが競技として認められず一度は競技から引退するが、10年後に競技として認められたことで、現役復帰する。</p> <p>・バイク事故が起きる受傷前が第一の人生、受傷後が第二の人生、スノーボードと出会ったのが第三の人生。自信がゼロになっていた第二の人生だが、第三の人生を継続することで、右腕の無い自分に少しずつ自信が持てるようになった。</p> |

| | |
|--|----------------------------------------------------------------------|
| | ・2019年より所属先企業がアスリート活動を全面的に支援してくれることで、国内に存在しない常設コースを海外遠征で回ることが可能となった。 |
|--|----------------------------------------------------------------------|

(小淵和也)

仮名 21-P さん

インタビュー実施日時 2021年11月4日 14:30-16:00 場所 オンライン

| | |
|-------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | 居住:関西地区 生年月日:1985年 性別:女性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:視覚障害(先天性弱視) |
| 略歴 | 2歳頃から地元のスイミングスクールで水泳を始め、中学校、高校時代は水泳部に所属し、大学入学後に障害者水泳のクラブでパラ水泳に出会い、現在もそのクラブを活動拠点として競技を継続している。 |
| 競技基本情報 | 競技:水泳 クラス分け:S13 主な戦績:2008年北京パラリンピック入賞、2016年リオパラリンピック出場 競技開始年齢:19歳 |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | 経緯: ・体育に関して、小学校時代は周りの子どもたちとの運動能力の差がそれほどなく、球技の時に少し不自由さを感じる程度で同じように取り組むことができたが、中学校、高校と種目が専門的になるにつれて苦勞するようになっていった。特にバレーボールやバドミントンに関しては、ボールやシャトルが床に落ちてから自分がレシーブすべきだったと気づくような状態であったが、当時は障害の自己覚知ができておらず、「運動神経が悪いからできないのかな」と感じていた。 ・水泳に関しては、近所の幼馴染みたちがスイミングスクールに通い始める中、親の勧めで自分も始めた。週に2回程度通っており、始めた当初は近所の友達と一緒に通う事が楽しかったが、級が上がるにつれて練習強度が上がり「習わされている」ような感じで、「泳ぐことは好きだけれどスイミングの練習は嫌い」という思いを持っていた。 ・その後、中学校、高校と部活動で水泳を続けて、大学入学後は競技から離れて、指導に携わりたいと思い、地元のスポーツ施設で知的障害のある子どもたちのスポーツボランティアをしていた。そこで、大学1年生の秋頃に、視覚障害のある子どもの保護者から、「視覚障害の水泳でパラリンピックを目指したら」と言われ、視覚障害の水泳は全盲クラスしかないと思っていたが、調べたところ弱視のクラスがあること、また、地元には障害者水泳のクラブがあることを知り、自ら問い合わせ入会したことがパラ水泳との出会いであった。 |

| | |
|------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・自分の親が障害と向き合っ、自分の子どもの障害はどのようなものなのかについて、もう少し調べてほしかったと感じている。また、半年に1回程度、検査で病院に通っていたが、自分が障害者手帳を取得できる事を教えてもらえなかった。高校3年生の2学期に大学受験に向けて志望校に試験配慮の相談をしたところ、障害者手帳が必要だと言われて、病院に相談し初めて自分が手帳を取得できることを知った。通っていた病院の医師や視能訓練士がもう少し早く対応をしてくれていたら良かったと感じている。 ・また、中学校水泳部の顧問とBクラブで再会した時に、「当時からPさんの障害をちゃんと理解していれば、弱視の知識があればもっと早くパラ水泳に取り組めたのに」と言われたことを覚えている。学校関係者、医療関係者、周囲の人々が(弱視のような)見た目ではわからない障害に対して理解をしてくれることで、スポーツに取り組みやすい環境ができていくと思う。 ・パラ水泳を始めるにあたって、Bクラブのチームメイトとコーチの存在が大きかった。高校までは「すべて健常者と同じようにしなければならない」と考えていたが、いろいろな障害のある選手たちと関わる中で、自分の障害に合わせて練習をすればよいと考えられるようになった。また、コーチからは「フォームが汚い」と指摘されて、なぜ水中姿勢が悪いのか、それを直すための方法や障害があるが故にできないこと等が理解できるようになり、Bクラブに入ったことで自分の可能性が大きく広がったと感じた。 |
| <p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・先天性障害のため該当なし |
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パラ水泳を始めてからしばらくはBクラブのみで週3日程度練習をしていたが、北京パラリンピック出場決定後から、練習量を増やすためにBクラブと並行して民間のスイミングスクールの選手コースで練習をするよう |

| | |
|---------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>になった。現在も同様の環境で週 4 日から 5 日程度練習をしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学卒業後、現在の所属先に就職し、当初はフルタイムで働いていたが、会社との話し合いで時短勤務が認められるようになり、現在は午前中の半日勤務で、午後は水泳に関する活動に充てられるようになっている。また、競技に関する経費については、給与とは別にすべて会社の負担となっている。 |
| <p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・パラ水泳を始めた時と同様に、競技を続けるにあたって B クラブの存在がとても大きなものとなっている。B クラブは全国的に見てもとても大きな障害者チームで、専門のコーチの指導が受けられ、定期的に練習できる環境が整っているため、このクラブがあるから引退せずに水泳を続けられていると思っている。 ・民間のスイミングスクールにも通っているが、そこは大勢に同じメニューを課して、個々への技術的な細かい指導はあまりないと感じている。一方で、B クラブのコーチたちは、個々の障害に合わせて一人一人の能力をどのようにすれば引き出せるかということを考えて指導してくれるので、そこは自分にとって大事な部分である。 ・自分と同じような視覚障害のある人たちが水泳を続けていくためには、B クラブのような環境が必要ではないだろうか。障害の度合いにもよるが全盲のクラスであれば特に、タッパー（ゴールやターンの時に壁が近づいていることを選手に知らせるために、バーで叩いて教える役割）やサポートスタッフならびに、障害に理解のある指導者が必要であると思う。もちろん民間のスイミングスクールで活動できれば良いが、現状としてサポート体制が十分であるとは言えないので、障害者クラブとスイミングスクールのどちらでも活動できることが理想であると考えている。 |
| <p>今後のスポーツ実施</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・以前は「パラリンピックを目指さなければいけない」と思っていたが、最近では自己ベストを出したいという意識が強くなってきている。中学校・高校時代の純粋に水泳が楽しかった当時を思い出して、タイムにこだわっていきたいと考えている。「パラ水泳」というよりも「水泳」そのものが好きなので、一度原点に立ち返って楽しんでいきたい。 ・また、指導者に以前から興味を持っており、競技と並行してまずはお手伝いのような形で関わっていったらよいと考えている。 |

| | |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| まとめ | <ul style="list-style-type: none">・2歳から水泳を始めて、中学校、高校と部活動で水泳を続けた。・大学入学後、Bクラブと出会い、チームメイトやコーチとの関わりの中で、自分の障害に合わせて取り組めばよいと考えるようになった。・自分と同じような障害のある人々がスポーツを始めるにあたっては、弱視のような見えづらい障害に対する、学校関係者、医療関係者や周囲の人々の理解が重要であると思う。・今後は自己ベストを更新することを目標として、「パラ水泳」というよりも「水泳」そのものを楽しんでいきたいと考えている。 |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

(河西正博)

仮名 21-Q さん

インタビュー実施日時 2021年11月19日 13:00-15:00 場所 オンライン

| | |
|-------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 個人基本情報 | <p>居住:関西地区 生年月日:1982年 性別:女性</p> <p>障害発生年齢:18歳 障害内容:左下肢機能障害 2種4級</p> <p>リハビリ期間:約2年</p> |
| 略歴 | <p>高校卒業後、就職してすぐに病気が見つかり、1年ほど入院。退院後は自ら運動できるスポーツ施設を探し、障害者スポーツセンターの教室に通った。障害者スポーツ指導員から声をかけられ、19歳でシッティングバレーボールを始め、1年余りで日本代表となる。2006年に結婚を機に転職。2008年北京、2012年ロンドンと2大会連続でパラリンピックに出場。2014年のアジアパラ競技大会メダリスト。</p> <p>現在は、アシスタントコーチとして日本代表のサポートを行う。</p> |
| 競技基本情報 | <p>競技:シッティングバレーボール</p> <p>主な戦績:2014年アジアパラ競技大会メダリスト 競技開始年齢:19歳</p> |
| 障害発生から障害者スポーツ開始まで | <p>経緯:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの頃から運動が好きで、小学校では兄とサッカーをして遊んでいた。中学校に入ると、先輩に誘われ、バレーボール部に入った。高校生の時は、運動部活動に所属せず、ヘルプ役として陸上やバレーボールの試合に出場していた。 ・高校卒業後、銀行に就職してすぐに病気が判明し入院。2回の手術を経て約1年後に退院し、自ら運動できるスポーツ施設を探したところ、広報誌で障害者スポーツセンターを見つけた。バドミントンならできるかもしれないと思い、バドミントン教室に通い始めた。障害者スポーツセンターの指導員から「シッティングバレーを体験してみませんか」と誘いを受け、シッティングバレーボールクラブに参加した事がきっかけとなり、シッティングバレーボールを始めた。障害があってもスポーツが出来るという事が嬉しく、そんな様子を見て母も喜んでいました。 <p>始めた場所:障害者スポーツセンター</p> <p>重要な他者:障害者スポーツセンター指導員、母親</p> |
| 障害者スポー | <p>・シッティングバレーボールを始めるに際しては、障害者スポーツ指導員か</p> |

| | |
|----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>ツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件</p> | <p>ら誘いを受けたこと、一緒に練習するクラブの仲間がいたことが大きい。仕事が終わった後、通える場所に障害者スポーツセンターがあったことも影響している。</p> |
| <p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p> | <p>・子どもの頃から運動が好きだったこと、中学生の頃にバレーボールを経験していたことが影響している。</p> |
| <p>障害者スポーツ継続に関する状況</p> | <p>継続状況： ・通い始めたシッティングバレーボールクラブでは、日本代表選手と一緒に練習をしていた。同じ年代の仲間もいたことで楽しく続けることができた。障害者スポーツ指導員から専門的な指導を受けたこと、バレーボールの経験があったことから、シッティングバレーボールを始めて1年余りで日本代表に選出された。その後、日本代表監督からの指導を受け、2008年北京、2012年ロンドンと2大会連続でパラリンピックに出場した。アスリート雇用ではなかったため、遠征費や合宿の費用は自費だったが、2008年の北京大会後からは少しずつ自己負担が減っていった。2019年に引退し、アシスタントコーチとして選手を支えている。</p> <p>主な実施場所：障害者スポーツセンター、強化拠点施設 重要な他者：日本代表監督</p> |
| <p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p> | <p>・練習する環境(場所・指導者)があったこと、子育てをサポートする環境(両親や家族の支え)があったことで競技を続けることができた。 ・2008年北京大会後から、国からの補助などにより自己負担が軽減された。</p> |
| <p>今後のスポーツ実施</p> | <p>・2019年からアシスタントコーチとして関わっている。シッティングバレーボールがメダルを獲得し、結果を残すようになれば認知度も上がり、スポンサーなどからの支援も受けられる。現在、コーチなどサポート体制は整ってきているため、練習する機会を増やしていけば、もっと強くなると思</p> |

| | |
|------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツを始める際には、スポーツ指導員やリハビリ現場の関係者などが様々な障害者スポーツを知っていること、声をかけることが重要。一般のスポーツセンターなどに障害者スポーツの一覧が記載されている冊子などがあれば知るきっかけになると思う。もっと広く、シッティングバレーボールを知ってもらう機会を作っていく必要がある。 |
| <p>まとめ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの頃から運動が好きで、中学ではバレーボール部に入っていた。 ・高校卒業後、就職してすぐに病気が判明し、入院。約1年後に退院し、自ら運動できるスポーツ施設を探し、障害者スポーツセンターの教室に通った。 ・シッティングバレーボールを始めるに際しては、障害者スポーツ指導員から誘いを受けたこと、一緒に練習するクラブの仲間がいたことが大きい。通える場所に障害者スポーツセンターがあったことも影響している。 ・シッティングバレーボールを継続するにあたっては、練習する環境(場所・指導者)があったこと、子育てをサポートする環境(両親や家族の支え)があったこと、2008年北京大会後からの自己負担の軽減が影響している。 ・2008年北京、2012年ロンドンと2大会連続でパラリンピックに出場した経験を活かし、現在はアシスタントコーチとして日本代表チームを支えている。 |

(兒玉 友)

第2章

テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信 環境調査

調査概要

(1)調査目的

東京 2020 パラリンピック大会の開催に合わせ、障害者スポーツの各種メディア(テレビ・新聞など)での露出状況(量的、番組傾向、トピックスなど)を把握し、影響度や障害者スポーツ認知度との相関を図ることを目的とする。

(2)データ抽出内容

放送日時、テレビ局、番組名、放送時間帯、開始時刻、終了時刻、番組カテゴリ、番組内コーナーなどの項目でデータを抽出する。

(3)データ抽出条件

東京都内での地上波デジタル(メインのみ)の放送環境を有するテレビ局の東京エリア放送分のデータをもとに、検索対象ワードとして、①“パラリン”、②“障害” AND “スポーツ”、③“障がい” AND “スポーツ”の3条件を設定した。①について、“パラ”と設定した場合、パラリンピック関連以外のワードが大量に対象となってしまいうために、本調査では、「パラリンピック」「パラリンピアン」のいずれのワードが対象となるように、“パラリン”を検索対象ワードに設定した。なお、対象となったデータ件数は以下の通りである。

(図表 2-1)

| | ①“パラリン” | ②“障害”AND“スポーツ” | ③“障がい”AND“スポーツ” |
|--------|---------|----------------|-----------------|
| 北京大会 | 1,024 件 | 59 件 | 1 件 |
| ロンドン大会 | 1,739 件 | 25 件 | 1 件 |
| リオ大会 | 3,336 件 | 51 件 | 17 件 |
| 東京大会 | 5,783 件 | 119 件 | 36 件 |

(4)データ抽出期間

(図表 2-2)

| | 開会前(31 日間) | 開催中(12 日間) | 開催後(31 日間) |
|--------|---------------------|--------------------|----------------------|
| 北京大会 | 2008/8/6~2008/9/5 | 2008/9/6~2008/9/17 | 2008/9/18~2008/10/17 |
| ロンドン大会 | 2012/7/29~2012/8/28 | 2012/8/29~2012/9/9 | 2012/9/10~2012/10/9 |
| リオ大会 | 2016/8/7~2016/9/6 | 2016/9/7~2016/9/18 | 2016/9/19~2016/10/18 |
| 東京大会 | 2021/7/24~2021/8/23 | 2021/8/24~2021/9/5 | 2021/9/6~2021/10/5 |

(5) データ提供者

株式会社エム・データ (M Data CO.,LTD)

住所: 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビルディング 9 階

TEL: 03-6826-7060

URL: <https://mdata.tv/>

(6) 集計・分析

株式会社サーベイリサーチセンター 調査事務局

住所: 東京都荒川区西日暮里 2-40-10

TEL: 03-3802-6775

URL: <http://www.surece.co.jp>

要約

- ◆ 過去 4 大会の放送時間は、北京大会が 56 時間 45 分 18 秒、ロンドン大会が 78 時間 14 分 15 秒、リオデジャネイロ大会が 234 時間 36 分 59 秒、東京大会が 230 時間 47 分 9 秒と、東京大会とリオデジャネイロ大会では大きな違いは見られなかった。
- ◆ 「開催前」「開催中」「開催後」の東京大会の放送時間を見ると、「開催前」は北京大会の約 6 倍増、「開催中」は北京大会の約 4 倍増、「開催後」は北京大会の約 3 倍増であった。一方で、東京大会の「開催後」は、急増したリオデジャネイロ大会から 3 分の 1 に減少した。
- ◆ 過去 4 大会のテレビ局の合計放送時間は、「NHK 総合」(215 時間 59 分 3 秒)が最も多く、ついで、「NHK 教育」(94 時間 41 分 9 秒)、「TBS」(84 時間 57 分 19 秒)であった。大会別に 20 時間以上放送しているテレビ局は、北京大会、ロンドン大会では「NHK 総合」「NHK 教育」の 2 局、リオデジャネイロ大会では「NHK 総合」「日本テレビ」「TBS」「フジテレビ」「テレビ朝日」の 5 局、東京大会では「NHK 総合」「NHK 教育」「日本テレビ」「TBS」「フジテレビ」「テレビ朝日」の 6 局であった。「NHK 総合」のリオデジャネイロ大会の放送時間が、北京・ロンドン大会の約 4 倍に急増したが、東京大会ではさらに増加した。
- ◆ 過去 4 大会の番組カテゴリー別の合計放送時間は、「情報/ワイドショー」(186 時間 30 分 5 秒)が最も多く、ついで、「ニュース/報道」(178 時間 46 分 55 秒)、「スポーツ」(152 時間 11 分 19 秒)であった。「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」「ドキュメンタリー」「バラエティー」での放送時間が北京・ロンドン大会からリオデジャネイロ大会で急増したが、東京大会では「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」が減少、「スポーツ」が約 2 倍増加した。
- ◆ テレビ局の番組カテゴリー別に 10 時間以上放送したのは、北京大会では NHK 教育「スポーツ」、ロンドン大会では NHK 総合と NHK 教育「スポーツ」であったが、リオデジャネイロ大会では、NHK 総合「ニュース/報道」「スポーツ」、日本テレビ「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」、TBS「情報/ワイドショー」、フジテレビ「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」、テレビ朝日「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」、東京大会では、NHK 総合「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」「スポーツ」、NHK 教育「スポーツ」、日本テレビ「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」、TBS「情報/ワイドショー」、フジテレビ「情報/ワイドショー」、テレビ朝日「情報/ワイドショー」であった。東京大会で NHK 総合「ニュース/報道」「スポーツ」が 30 時間を超えた一方、リオデジャネイロ大会で 30 時間を

超えていた TBS「情報／ワイドショー」が東京大会では半減した。

- ◆ 番組内で取り上げられたコーナー別の放送時間は、過去 4 大会ともに「スポーツ」が最も多く、東京大会では、北京大会(42 時間 47 分 3 秒)から 3 倍増となったリオデジャネイロ大会(122 時間 27 分 7 秒)よりさらに増加して 171時間 40 分 51 秒であった。

調査報告

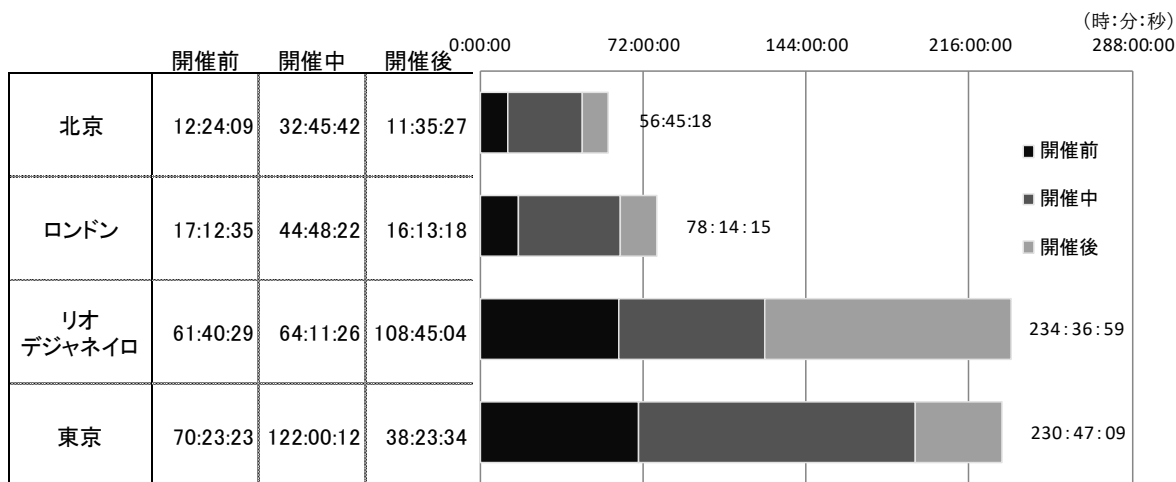
1. メディア放送時間(単純集計)

北京大会、ロンドン大会、リオデジャネイロ大会、東京大会の地上波テレビ放送をパラリンピックの開催前1か月、開催中、開催後1か月でみると、4大会の合計放送時間は、600時間23分41秒であった。

1.1 過去4大会の放送時間の変遷

大会ごとでは、北京大会が56時間45分18秒、ロンドン大会が78時間14分15秒、リオデジャネイロ大会が234時間36分59秒、東京大会が230時間47分9秒であった(図表2-3)。リオデジャネイロ大会では、北京大会の約4倍の合計放送時間となったが、リオデジャネイロ大会と東京大会では合計放送時間に大きな違いはみられなかった。

図表 2-3 過去4大会の放送時間



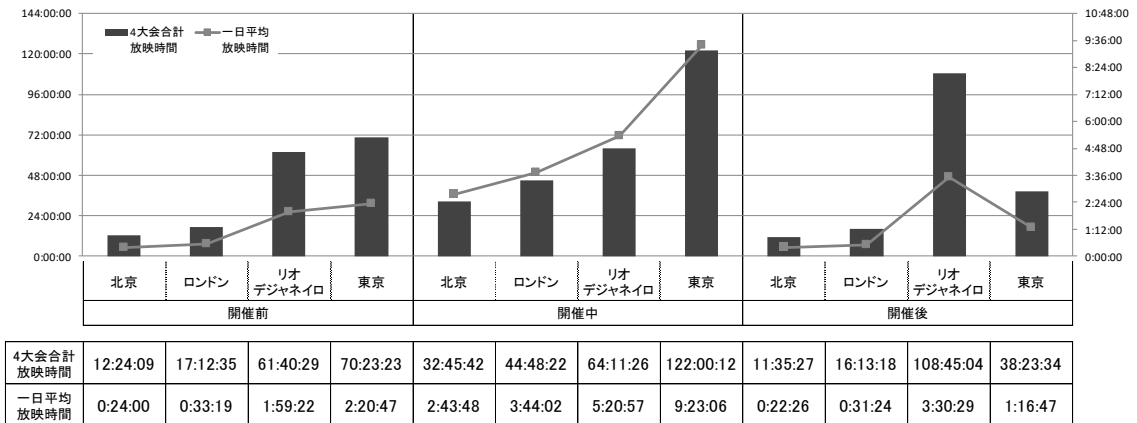
1.2 開催前・開催中・開催後別の放送時間

パラリンピック大会の「開催前」「開催中」「開催後」に分けて、合計放送時間と一日平均放送時間についてみた(図表2-4)。「開催前」「開催後」は31日間、「開催中」は12日間として、一日平均放送時間を算出した。

「開催前」では、北京大会からロンドン大会にかけて一日平均放送時間は微増であったが、リオデジャネイロ大会にかけて、24分から1時間59分22秒と約4倍増となり、東京大会ではさらに増加して2時間20分47秒であった。「開催中」では、北京大会からリオデジャネイロ大会にかけて倍増したが、東京大会ではさらに増加して、北京大会と比べ約3倍増であった。一方で、「開催後」では、北京大会と比較すると、リオデジャネイロ大会は22分26秒(北京大会)から3時間30分29秒(リオデジャネイロ大会)と約9倍増であったが、東京大会では1時間16分47秒と、リオデジャネイロ大会から約3分の1に減少した。

図表 2-4 大会開催前、開催中、開催後の放送時間

(時:分:秒)

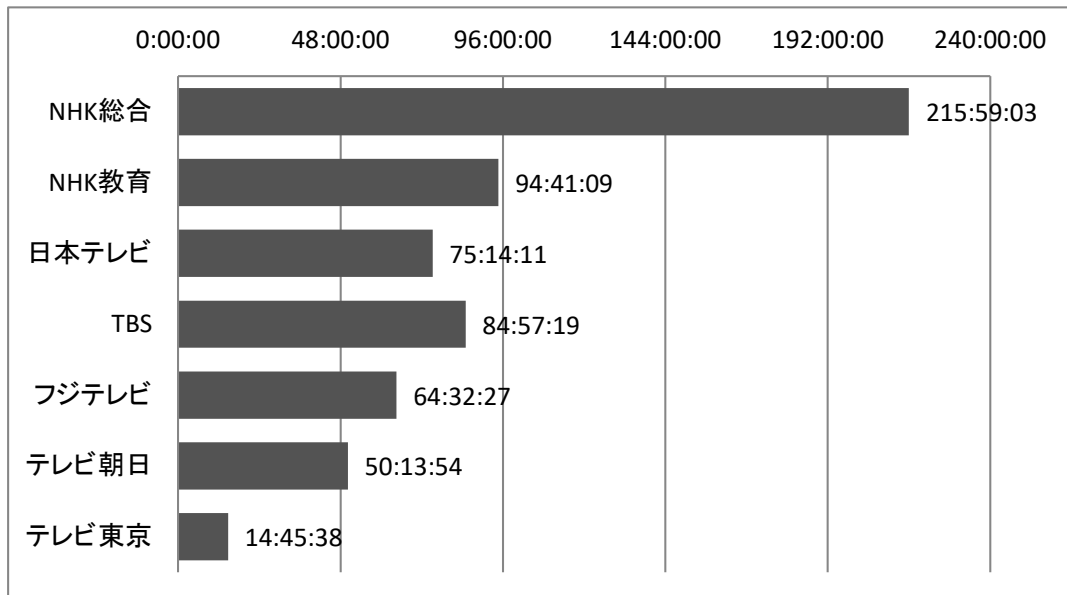


1.3 テレビ局ごとの放送時間

過去4大会のテレビ局の合計放送時間は、「NHK 総合」が 215 時間 59 分 3 秒と最も多く、ついで、「NHK 教育」の 94 時間 41 分 9 秒、「TBS」の 84 時間 57 分 19 秒であった(図表 2-5)。

図表 2-5 テレビ局の放送時間(過去 4 大会合計)

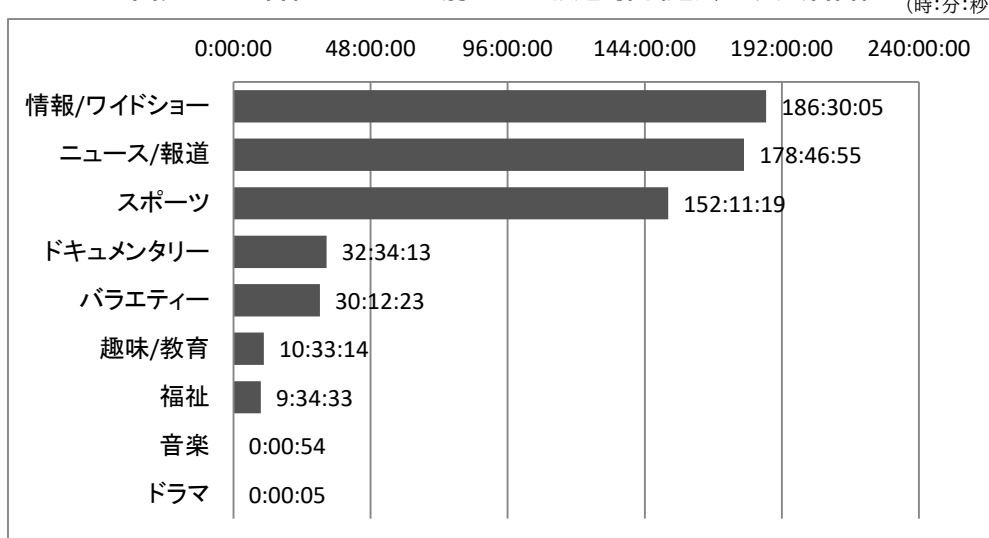
(時:分:秒)



1.4 番組カテゴリー別にみる放送時間

過去4大会の番組カテゴリー別の合計放送時間は、最も放送している番組カテゴリーは「情報/ワイドショー」(186 時間 30 分 5 秒)で、ついで、「ニュース/報道」(178 時間 46 分 55 秒)、「スポーツ」(152 時間 11 分 19 秒)であった(図表 2-6)。

図表 2-6 番組カテゴリー別にみる放送時間(過去 4 大会合計)



注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

参考までに、番組カテゴリー別に主な番組名をまとめると、図表 2-7 の通りである。

図表 2-7 番組カテゴリー別にみる主なテレビ番組

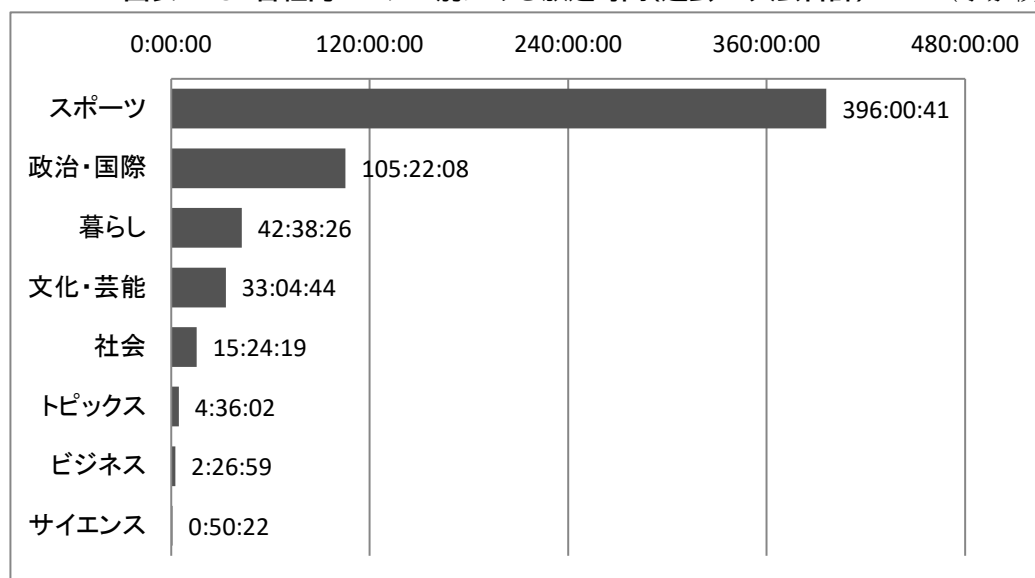
| 番組カテゴリー | 『番組名』(テレビ局名) |
|-----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 情報/ワイドショー | 『東京2020パラリンピックあさナビ(NHK)』 『ZIP! (日本テレビ)』『ヒルナンデス! (日本テレビ)』『スッキリ(日本テレビ)』 『あさちゃん! (TBS)』『ひるおび! (TBS)』 『めざましテレビ(フジテレビ)』『Mr. サンデー(フジテレビ)』 『グッド! モーニング(テレビ朝日)』『羽鳥慎一モーニングショー(テレビ朝日)』など |
| ニュース/報道 | 『NHKニュースおはよう日本(NHK)』『ニュース7(NHK)』『ニュースウオッチ9(NHK)』 『真相報道バンキシャ! (日本テレビ)』『news zero(日本テレビ)』 『news23(TBS)』『JNNニュース(TBS)』 『FNNLiveNews イット! (フジテレビ)』『FNNニュース(フジテレビ)』 『報道ステーション(テレビ朝日)』『スーパーJチャンネル(テレビ朝日)』など |
| スポーツ | 『東京2020オリンピックデイリーハイライト(NHK)』 『Going! Sports & News(日本テレビ)』『東京パラリンピック総集編(日本テレビ)』 『東京オリンピック(TBS)』『東京パラリンピック陸上ハイライト(TBS)』 『S-PARK(フジテレビ)』『東京パラリンピック開幕直前スペシャル(フジテレビ)』 『東京五輪プレミアム(テレビ朝日)』『GetSports(テレビ朝日)』など |

1.5 番組内コーナー別にみる放送時間

番組内で取り上げられたコーナー別に過去 4 大会の合計放送時間をみると、最も取り上げられることが多かったコーナーは「スポーツ」(396 時間 41 秒)で、ついで、「政治・国際」(105 時間 22 分 8 秒)、「暮らし」(42 時間 38 分 26 秒)であった(図表 2-8)。

図表 2-8 番組内コーナー別にみる放送時間(過去 4 大会合計)

(時:分:秒)



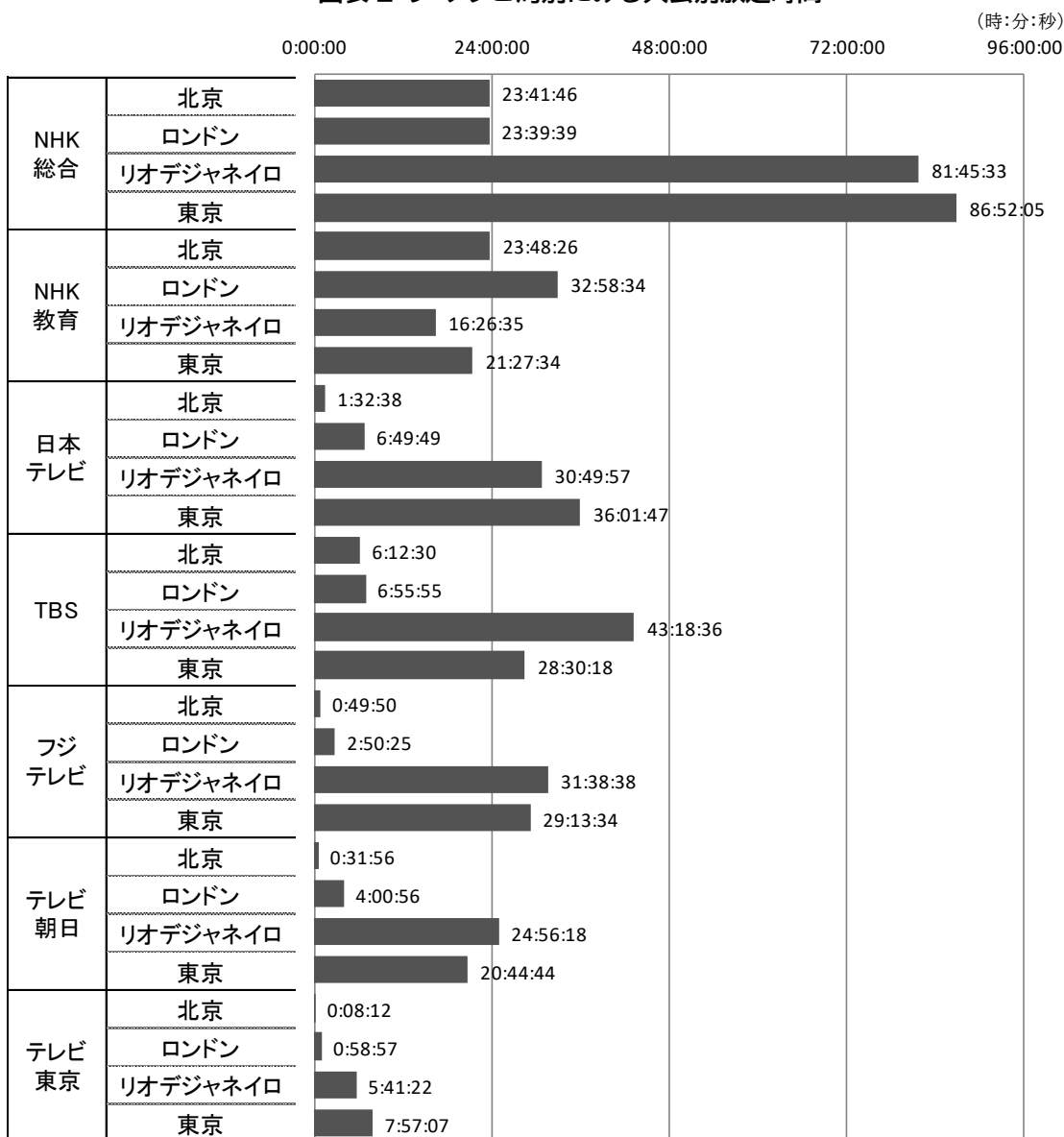
注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース／報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

2. メディア放送時間(クロス集計)

2.1 テレビ局ごとにみた4大会の放送時間

テレビ局ごとに4大会の放送時間をみると、「NHK 総合」「NHK 教育」「日本テレビ」「テレビ東京」では、東京大会が最も多かったが、「TBS」「フジテレビ」「テレビ朝日」ではリオデジャネイロ大会から東京大会にかけて減少した(図表 2-9)。20 時間以上放送したテレビ局を大会別にみると、北京大会、ロンドン大会では「NHK 総合」「NHK 教育」の2 局、リオデジャネイロ大会では「NHK 総合」「日本テレビ」「TBS」「フジテレビ」「テレビ朝日」の5 局、東京大会では「NHK 総合」「NHK 教育」「日本テレビ」「TBS」「フジテレビ」「テレビ朝日」の6 局であった。

図表 2-9 テレビ局別にみる大会別放送時間



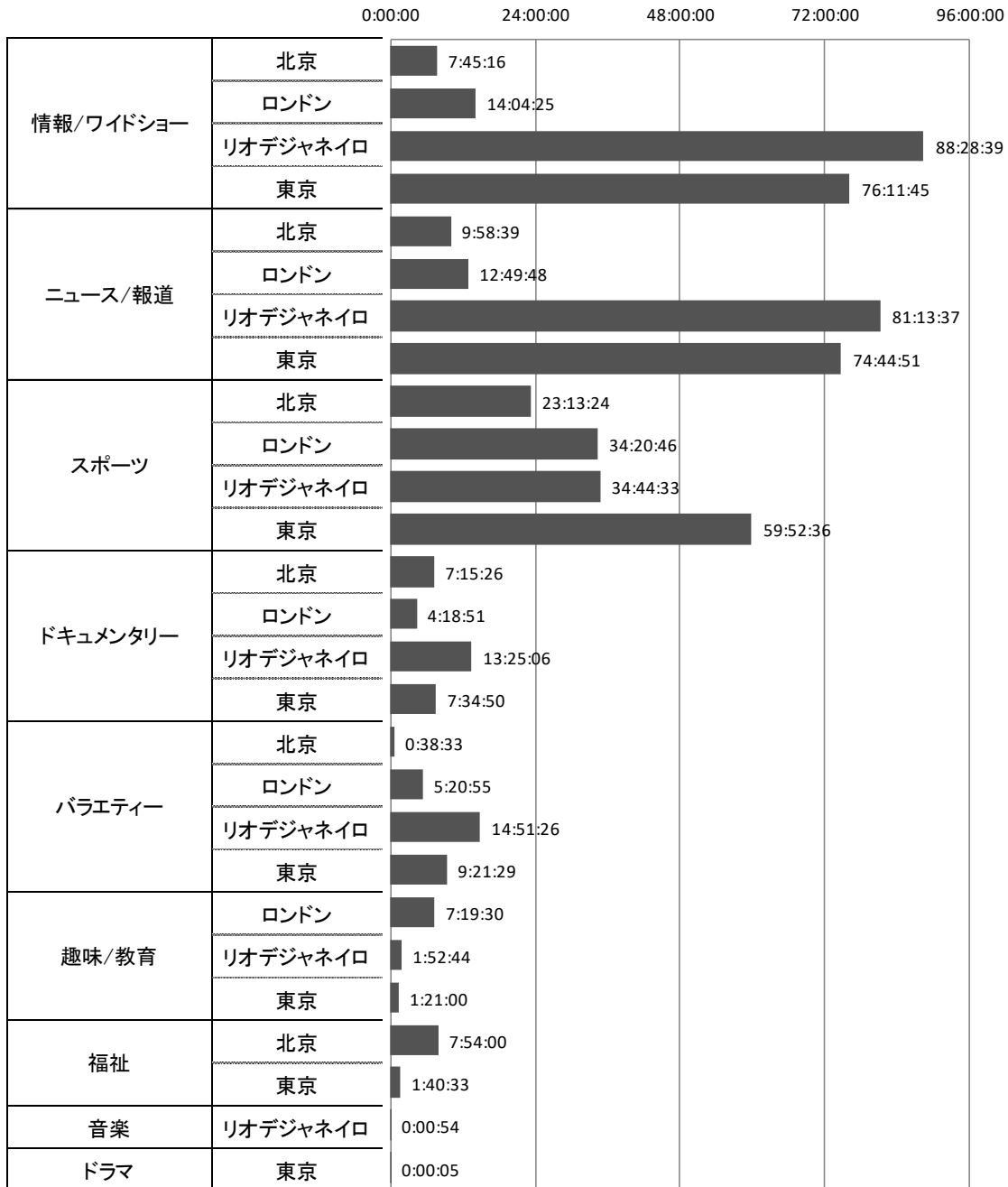
2.2 番組カテゴリー別にみる4大会の放送時間

番組カテゴリー別に4大会の放送時間をみると、「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」では、リオデジャネイロ大会で急増した放送時間が東京大会で微減した(図表2-10)。「スポーツ」の放送時間は、ロンドン大会、リオデジャネイロ大会での変化はほとんどみられなかったが、東京大会で急増した。

テレビ局ごとに4大会の放送時間をみると、各テレビ局で番組カテゴリーは様々であった(図表2-11)。10時間以上の放送時間であったテレビ局の番組カテゴリーは、北京大会ではNHK教育「スポーツ」、ロンドン大会ではNHK総合とNHK教育「スポーツ」であったが、リオデジャネイロ大会では、NHK総合「ニュース/報道」「スポーツ」、日本テレビ「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」、TBS「情報/ワイドショー」、フジテレビ「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」、テレビ朝日「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」、東京大会では、NHK総合「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」「スポーツ」、NHK教育「スポーツ」、日本テレビ「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」、TBS「情報/ワイドショー」、フジテレビ「情報/ワイドショー」、テレビ朝日「情報/ワイドショー」であった。東京大会でNHK総合「ニュース/報道」「スポーツ」が30時間を超えた一方、リオデジャネイロ大会で30時間を超えていたTBS「情報/ワイドショー」が東京大会では半減したのが特徴的であった。

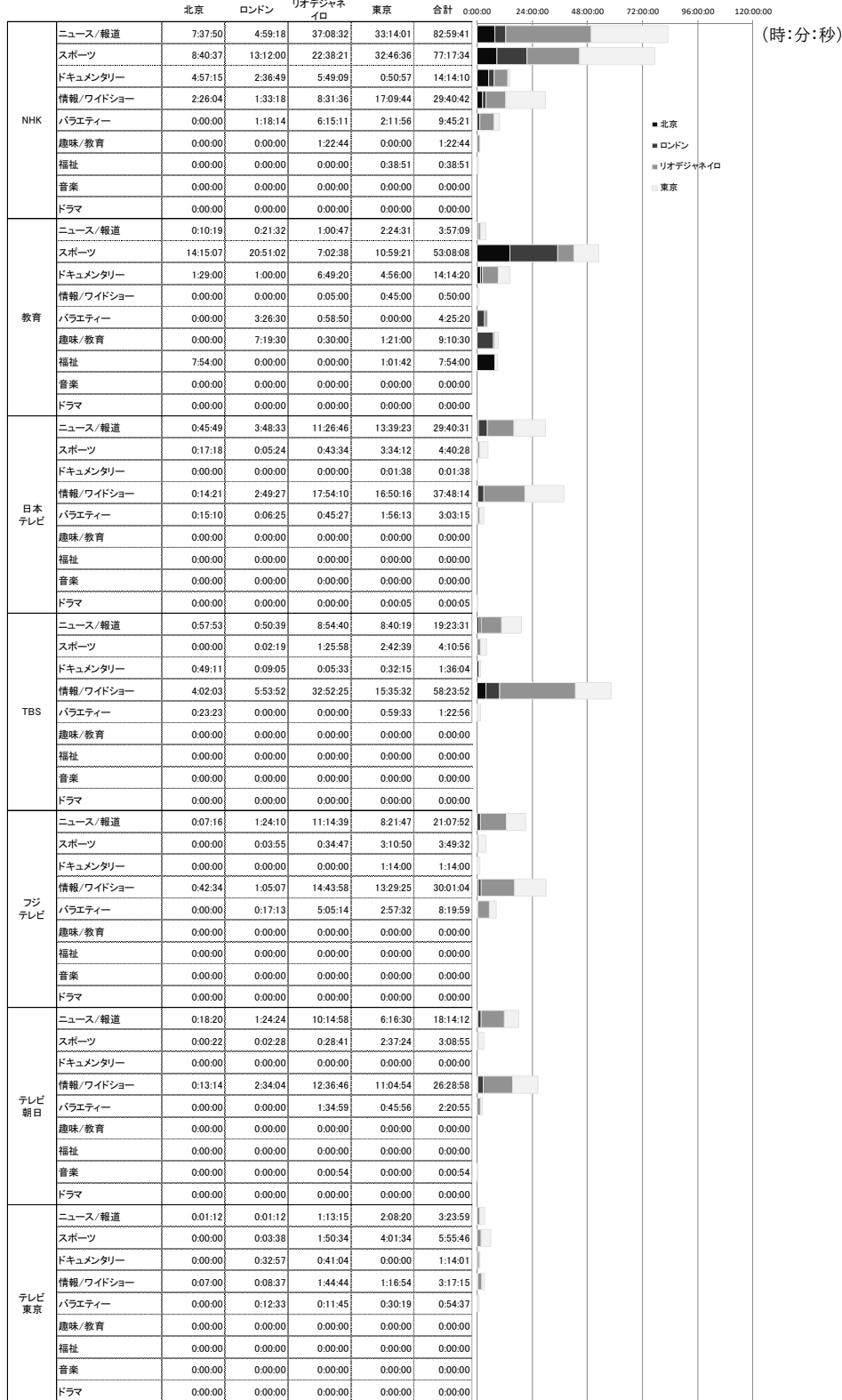
図表 2-10 番組カテゴリー別にみる大会別放送時間

(時:分:秒)



注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

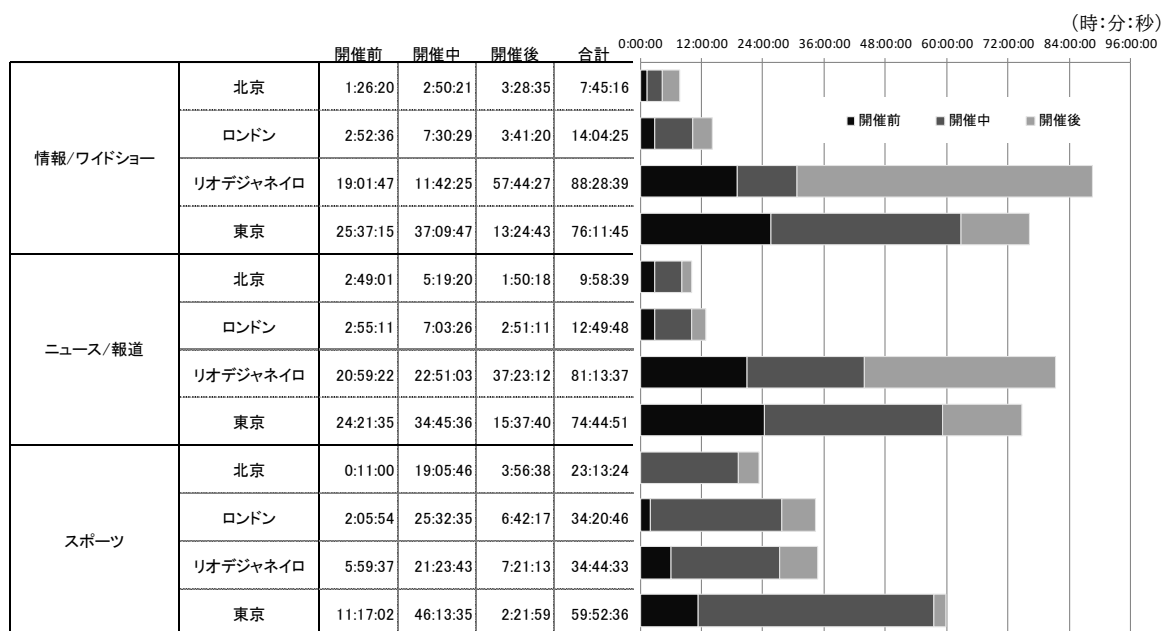
図表 2-11 テレビ局の番組カテゴリー別にみる大会別の放送時間



注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

番組カテゴリー別の4大会の放送時間を「開催前」「開催中」「開催後」に分けてみると、「スポーツ」は、4大会ともに、「開催中」が最も放送時間が多く、東京大会では倍増した(図表 2-12、2-13)。一方で、「情報/ワイドショー」「ニュース/報道」の「開催後」の放送時間が、急増したリオデジャネイロ大会から、東京大会では一転して、「情報/ワイドショー」で約3分の1、「ニュース/報道」で約2分の1に激減したのが特徴的であった。

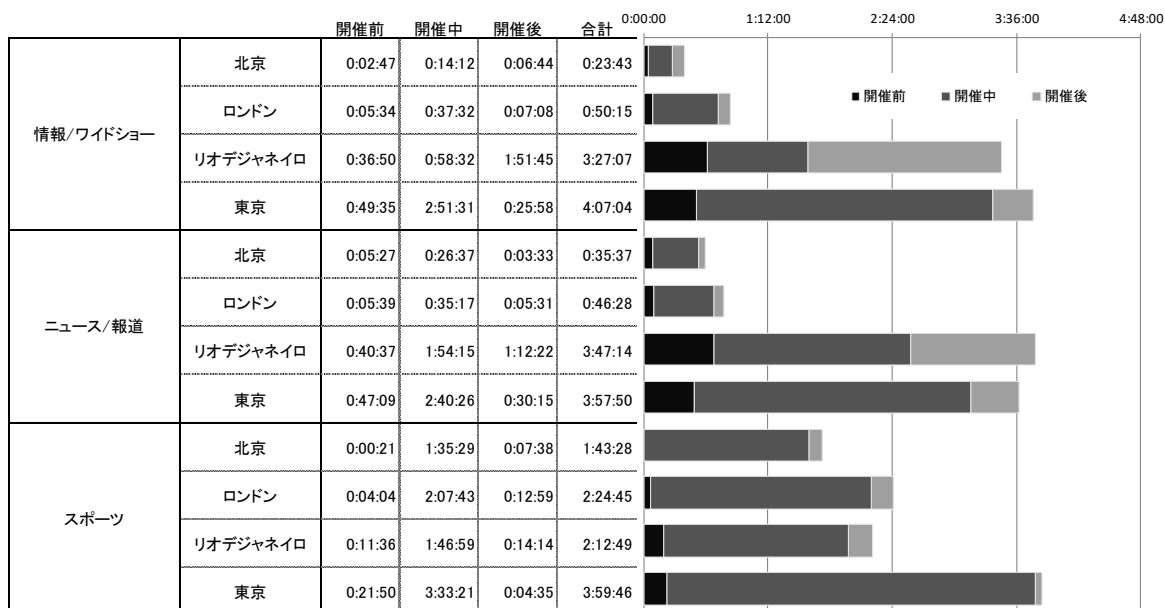
図表 2-12 テレビ局の番組カテゴリー別(上位3カテゴリー)にみる大会別放送時間



注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

図表 2-13 テレビ局の番組カテゴリー別(上位 3 カテゴリー)にみる大会別一日平均放送時間

(時:分:秒)



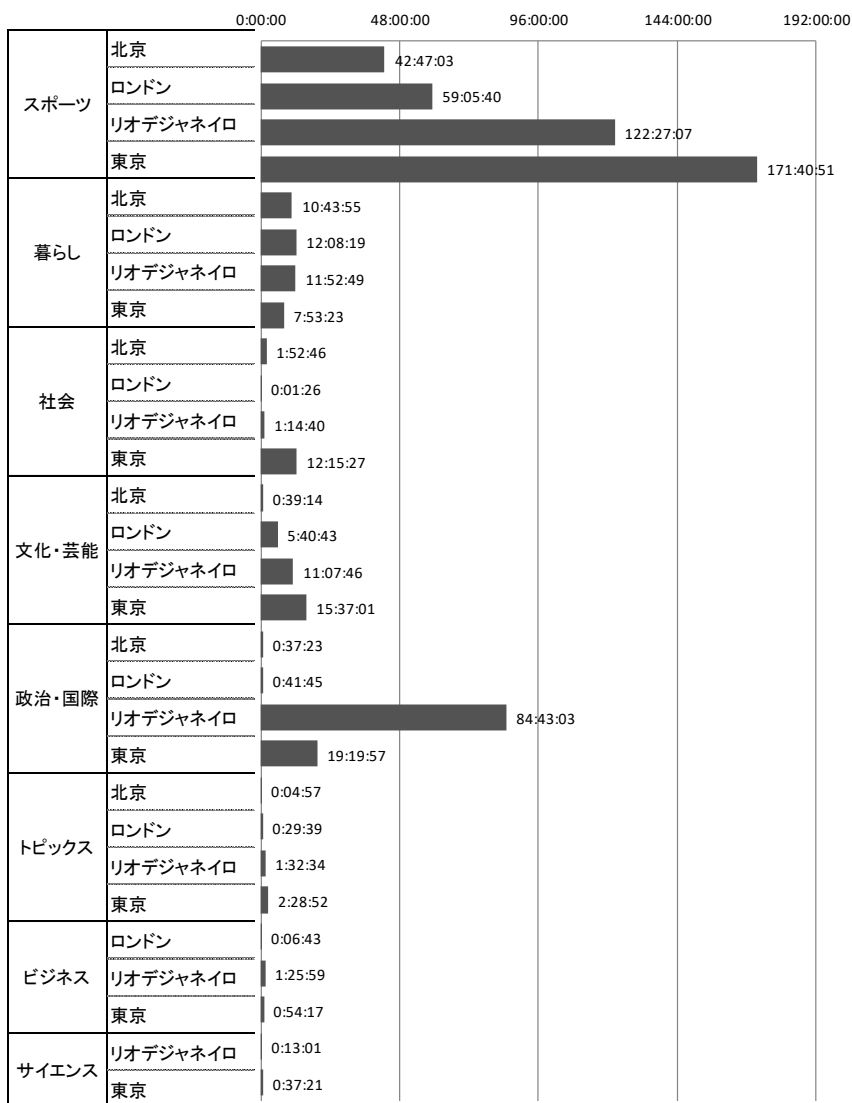
注) 番組カテゴリーは、番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

2.3 番組コーナー別にみる大会別の放送時間

番組内で取り上げられたコーナー別に4大会の放送時間をみると、過去4大会ともに「スポーツ」コーナーで取り上げられる放送時間が最も多く、その中でも、北京大会(42時間47分3秒)から3倍増となったリオデジャネイロ大会(122時間27分7秒)よりさらに増加して、東京大会では171時間40分51秒であった(図表2-14)。

過去3大会では、ほとんど取り上げられなかった「社会」コーナーにおいても、東京大会では約12時間取り上げられた。

図表2-14 番組内コーナー別にみる大会別の放送時間 (時:分:秒)



注) 番組カテゴリーは、番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース／報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

3. 東京大会日本代表選手別の放送時間

東京大会に出場した日本代表選手 254 人のうち、「開催前」「開催中」「開催後」の合計の放送時間の多い上位 30 人は以下のとおりであった(図表 2-15)。上位 11 位までをメダリストが占めた。

図表 2-15 東京大会の放送時間が長い選手上位 30 人

| NO. | 氏名 | ふりがな | 競技 | 放映時間 合計 |
|-----|-------|-----------|-----------------|------------|
| 1 | 富田宇宙 | とみた うちゅう | 水泳 | 11:44:31 |
| 2 | 木村敬一 | きむらけ いいち | 水泳 | 11:35:45 |
| 3 | 国枝慎吾 | くにえだ しんご | 車いすテニス | 10:41:44 |
| 4 | 上地結衣 | かみじ ゆい | 車いすテニス | 8:02:01 |
| 5 | 杉村英孝 | すぎむら ひでたか | ボッチャ | 7:49:21 |
| 6 | 佐藤友祈 | さとう ともき | 陸上競技 | 7:41:36 |
| 7 | 道下美里 | みちした みさと | 陸上競技 | 7:21:53 |
| 8 | 山田美幸 | やまだ みゆき | 水泳 | 6:51:32 |
| 9 | 池崎大輔 | いけざき だいすけ | 車いすラグビー | 6:19:52 |
| 10 | 鈴木孝幸 | すずき たかゆき | 水泳 | 6:17:12 |
| 11 | 池透暢 | いけ ゆきのぶ | 車いすラグビー | 6:01:16 |
| 12 | 岩淵幸洋 | いわぶち こうよう | 卓球 | 4:46:52 |
| 13 | 日向楓 | ひなた かえで | 水泳 | 4:43:51 |
| 14 | 杉浦佳子 | すぎうら けいこ | 自転車競技 | 4:26:48 |
| 15 | 伊藤智也 | いとう ともや | 陸上競技 | 4:21:39 |
| 16 | 倉橋香衣 | くらはし かえ | 車いすラグビー | 4:21:19 |
| 17 | 鳥海連志 | ちょうかい れんし | 車いすバスケットボール(男子) | 4:08:55 |
| 18 | 山本篤 | やまもと あつし | 陸上競技 | 3:57:57 |
| 19 | 谷真海 | たに まみ | トライアスロン | 3:42:01 |
| 20 | 村岡桃佳 | むらおか ももか | 陸上競技 | 3:23:38 |
| 21 | 山口尚秀 | やまぐち なおひで | 水泳 | 3:16:20 |
| 22 | 藤本怜央 | ふじもと れお | 車いすバスケットボール(男子) | 3:10:26 |
| 23 | 岡崎愛子 | おかざき あいこ | アーチェリー | 3:09:59 |
| 23 | 里見紗李奈 | さとみ さりな | バドミントン | 3:09:59 |
| 25 | 唐澤剣也 | からさわ けんや | 陸上競技 | 3:02:10 |
| 26 | 瀬立モニカ | せりゅう もにか | カヌー | 2:43:03 |
| 27 | 和田伸也 | わだ しんや | 陸上競技 | 2:41:48 |
| 28 | 香西宏昭 | こうざい ひろあき | 車いすバスケットボール(男子) | 2:37:12 |
| 29 | 川村怜 | かわむら りょう | 5人制サッカー | 2:34:41 |
| 30 | 島川慎一 | しまかわ しんいち | 車いすラグビー | 2:32:09 |

「開催前」「開催中」「開催後」ごとの放送時間の多い上位 10 人は以下のとおりであった(図表 2-16)。

図表 2-16 東京大会の放送時間が長い選手上位 10 人(開催前・開催中・開催後)

| No. | 開催前 | | | 開催中 | | | 開催後 | | |
|-----|------|-------------|---------|------|-------------|---------|------|---------------------|---------|
| | 氏名 | 実施競技 | 放映時間 | 氏名 | 実施競技 | 放映時間 | 氏名 | 実施競技 | 放映時間 |
| 1 | 木村敬一 | 水泳 | 2:56:35 | 上地結衣 | 車いす テニス | 6:26:35 | 道下美里 | 陸上競技 | 3:55:57 |
| 2 | 池透暢 | 車いす ラグビー | 2:45:15 | 富田宇宙 | 水泳 | 6:09:35 | 国枝慎吾 | 車いす テニス | 3:40:39 |
| 3 | 富田宇宙 | 水泳 | 2:35:03 | 鈴木孝幸 | 水泳 | 5:57:45 | 木村敬一 | 水泳 | 3:32:05 |
| 4 | 池崎大輔 | 車いす ラグビー | 2:20:26 | 国枝慎吾 | 車いす テニス | 5:16:54 | 富田宇宙 | 水泳 | 2:59:53 |
| 5 | 倉橋香衣 | 車いす ラグビー | 2:12:00 | 木村敬一 | 水泳 | 5:07:05 | 佐藤友祈 | 陸上競技 | 2:38:11 |
| 6 | 村岡桃佳 | 陸上競技 | 2:04:41 | 杉村英孝 | ポッチャ | 4:43:04 | 杉村英孝 | ポッチャ | 2:32:16 |
| 7 | 国枝慎吾 | 車いす テニス | 1:44:11 | 佐藤友祈 | 陸上競技 | 4:33:51 | 伊藤智也 | 陸上競技 | 2:25:41 |
| 8 | 島川慎一 | 車いす ラグビー | 1:41:22 | 山田美幸 | 水泳 | 4:29:35 | 山田美幸 | 水泳 | 2:14:53 |
| 9 | 岩渕幸洋 | 卓球 | 1:38:44 | 池崎大輔 | 車いす ラグビー | 3:59:26 | 鳥海連志 | 車いす バスケット ボール | 1:55:48 |
| 10 | 道下美里 | 陸上競技 | 1:38:06 | 杉浦佳子 | 自転車競技 | 3:25:54 | 山本篤 | 陸上競技 | 1:35:24 |

4. まとめと考察

東京 2020 パラリンピック競技大会の開催が決定した 2013 年以降、パラリンピックや障害者スポーツに関するテレビ番組が増えた。本調査は、2016 年度に調査を実施した北京大会、ロンドン大会、リオデジャネイロ大会の地上波テレビ放送時間に、東京大会の放送時間を追加して集計・分析したものである。

大会別の放送時間をみると、リオデジャネイロ大会は、北京大会から約 4 倍増、ロンドン大会から約 3 倍増と急増したが、東京大会はリオデジャネイロ大会からの大きな増加はみられなかった。放映時間を「開催前」「開催中」「開催後」に分けてみると、その要因がみえてくる。北京大会と東京大会を比較すると、「開催前」では約 6 倍増、「開催中」では約 4 倍増、「開催後」は約 3 倍増と、いずれも北京大会から増加した。「開催後」の放映時間は、リオデジャネイロ大会では、北京大会から約 10 倍増、ロンドン大会から約 7 倍増と、東京大会に向けて、各テレビ局が一斉に注目を向け始めたことを示唆していたが、東京大会では一転して、リオデジャネイロ大会の放送時間の 3 分の 1 に減少した。減少の理由としては、①開催後の期間（2021 年 9 月 6 日～2021 年 10 月 5 日）が自民党の総裁選の時期と重なり、各局の番組編成内容の優先順位が変わってしまったこと、②各テレビ局の取材班・取材チームがパラリンピック終了に合わせて縮小・解散したこと、③東京大会の 1 年延期により、後ろ倒しになっていた担当記者の人事異動が、2021 年の東京大会終了後のタイミングで行われ、継続的な取材・情報収集が十分にできなかったこと、④従来であれば、メダリストをはじめ、大会で活躍した選手がテレビ番組に出演していたが、コロナ禍での大会だったということもあり、出演する機会自体が減少したこと、⑤コロナ禍で祝勝会や祝賀イベントなどが自粛され、公の場に登場する機会を逸したために露出が減少したこと、などが挙げられる。

テレビ番組のカテゴリーでみると、リオデジャネイロ大会で急増した「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」は、東京大会でいずれも減少した。その一方で、「スポーツ」はロンドン大会とリオデジャネイロ大会ではほとんど放送時間に変化はなかったが、東京大会では約 2 倍増となった。

テレビ番組内のコーナー別でみると、4 大会すべてにおいて「スポーツ」が最も多かった。2016 年度調査同様、ニュース報道、ワイドショーなどの番組内スポーツコーナーにおいて、パラリンピックに関する内容を取り上げていたと推察する。北京大会、ロンドン大会ではほとんど取り上げられなかった「政治・国際」コーナーは、リオデジャネイロ大会ではロシアのドーピング問題で 80 時間超の放送時間であったが、東京大会ではコロナ禍での大会関係者の来日、選手村での滞在者の行動などが理由で約 20 時間を割いたと思われる。

テレビ局別にみると、4大会の合計放送時間は「NHK 総合」が最も多く、ついで「NHK 教育」「TBS」となっている。北京大会、ロンドン大会は、民放テレビ局の放送時間は少なく、「NHK 総合」「NHK 教育」が放送時間の大部分を占めていたが、リオデジャネイロ大会では民放テレビ局が放送時間を総じて増やした。ロンドン大会では、ジャパンコンソーシアムとしてNHKと民放テレビ局の共同放送体制をとっていたが、リオデジャネイロ大会、東京大会の独占放映権をNHKが獲得したことにより、リオデジャネイロ大会で「NHK 教育」から「NHK 総合」に放送時間の割合を大きくシフトさせた。こうした変化は、NHKがパラリンピックや障害者スポーツを、これまでの福祉的、教育的観点の放送から、スポーツとして放送する方針に変更したからだと推察できる。

東京大会に出場した選手の放送時間をみると、1位富田宇宙(水泳)、2位木村敬一(水泳)、3位国枝慎吾(車いすテニス)、4位上地結衣(車いすテニス)、5位杉村英孝(ボッチャ)と、メダリストが上位11位までを占めた。

(小淵和也)

第3章

パラリンピアンに対する社会的認知度調査

調査概要

(1)調査目的

東京 2020 パラリンピック大会開催後のパラリンピアンに対する社会的認知度を測定する。
 前回調査との比較を行い、変化、傾向、要因などを調査する。

(2)調査内容

主な調査内容は以下のとおりである。

- ・パラリンピアンへの社会的認知度
- ・東京大会の視聴状況
- ・日常生活におけるスポーツ環境

(3)調査対象

全国の市町村に在住する 20 歳以上の男女

(4)調査期間

2021 年 11 月 10 日(水)～2021 年 11 月 11 日(木)

(5)調査方法

インターネットによるウェブ調査

当財団調べ(マクロミルモニタを利用)

(6)回答結果 回答者数:2,060 人

| | | | |
|------------------|-----|------------------|-----|
| 東日本エリア/男性/20 代 | 103 | 西日本エリア/男性/20 代 | 103 |
| 東日本エリア/男性/30 代 | 103 | 西日本エリア/男性/30 代 | 103 |
| 東日本エリア/男性/40 代 | 103 | 西日本エリア/男性/40 代 | 103 |
| 東日本エリア/男性/50 代 | 103 | 西日本エリア/男性/50 代 | 103 |
| 東日本エリア/男性/60 代以上 | 103 | 西日本エリア/男性/60 代以上 | 103 |
| 東日本エリア/女性/20 代 | 103 | 西日本エリア/女性/20 代 | 103 |
| 東日本エリア/女性/30 代 | 103 | 西日本エリア/女性/30 代 | 103 |
| 東日本エリア/女性/40 代 | 103 | 西日本エリア/女性/40 代 | 103 |
| 東日本エリア/女性/50 代 | 103 | 西日本エリア/女性/50 代 | 103 |
| 東日本エリア/女性/60 代以上 | 103 | 西日本エリア/女性/60 代以上 | 103 |

(7) 調査報告並びにトピック内に示した図表の注意事項

- ・ 帯グラフにおいて 3%未満のデータラベルは非表示とした
- ・ クロス集計においては、原則 χ^2 検定分析による有意差検定で処理して、有意水準 1% を▲▼、5%を△▽、10%を∴∴で表示するとともに、有意差が認められない場合には非表示とした。

要約

- ◆ 最も認知度が高い選手は「国枝慎吾」(45.2%)で、ついで、「上地結衣」(22.5%)、「富田宇宙」(11.3%)、「池崎大輔」(8.7%)、「山本篤」(7.9%)であった。
- ◆ 実施競技の正答率が最も高かったのは「国枝慎吾(車いすテニス)」(81.2%)で、ついで、「上地結衣(車いすテニス)」(71.2%)、「鳥海連志(車いすバスケットボール)」(57.1%)、「木村敬一(水泳)」(56.7%)、「道下美里(陸上競技)」(51.4%)であった。
- ◆ 東京オリンピックの観戦形態は、「テレビで中継番組を観た」が 59.5%で最も多く、ついで、「テレビのニュース番組で観た」(51.4%)、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」(17.3%)であった。「テレビやインターネットで観戦しなかった」は 25.3%であった。
- ◆ 東京パラリンピックの観戦形態は、「テレビのニュース番組で観た」が 42.9%で最も多く、ついで、「テレビで中継番組を観た」(33.0%)、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」(11.7%)であった。観戦した競技は、「車いすテニス」(46.2%)が最も多く、ついで、「水泳」(41.5%)、「車いすバスケットボール」「開会式」(35.7%)「陸上競技」(31.7%)であった。
- ◆ 東京パラリンピックを観戦した感想は、「アスリートとして非常に優れていると感じた」(76.4%)が最も多く、ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」(70.3%)、「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」(68.3%)であった。「2024 年パリ・パラリンピックを直接観戦したい」は 23.2%で、2016 年度調査で尋ねた「2020 年東京・パラリンピックを直接観戦したい」の 35.2%より減少した。
- ◆ 東京オリンピック・パラリンピックのチケットの申し込み状況は、オリンピック・パラリンピックのいずれか、もしくはどちらも申し込んだのは 10.3%で、約 9 割は「オリンピックもパラリンピックも申し込まなかった」。地域別でみると、関東地方は他地域よりも高く、16.8%がオリンピック・パラリンピックのいずれか、もしくはどちらも申し込んだ。
- ◆ 日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景をみたことがあるかについて、「障害のある人がスポーツを行う光景をみることがある」は、2016 年度調査の 6.0%から 9.4%に増加した。地域別では、関東地方で、2016 年度調査の 3.7%から 8.6%と 2 倍以上増加した。

調査報告

1. パラリンピアン認知度

パラリンピアン 45 名を対象に認知度を尋ねた。

45 名の抽出条件は以下のとおりである。

<条件①>

「テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査」において、東京大会に出場した 254 名のうち、放送時間の多い上位 30 人(107 ページ参照)

<条件②>

直近 4 大会(北京大会、ロンドン大会、リオデジャネイロ大会、東京大会)に出場した選手(条件①の対象者を除く)→12 人が対象

<条件③>

2016 年度調査時の調査対象者であり、東京大会でメダルを獲得した選手→3 人が対象

条件①～③のいずれかを満たした選手 45 名を対象に調査した結果、最も認知度の高い選手は、「国枝慎吾」であり、「知っている」「聞いたことがある」を合わせると、45.2%であった(図表 3-1)。ついで、「上地結衣」22.5%(知っている:12.9%、聞いたことがある:9.6%)、「富田宇宙」11.3%(知っている:3.4%、聞いたことがある:7.9%)、「池崎大輔」8.7%(知っている:3.5%、聞いたことがある:5.2%)、「山本篤」7.9%(知っている:3.3%、聞いたことがある:4.6%)だった。前述の「知っている」「聞いたことがある」と回答した人を対象に実施競技について尋ねたところ、正答率が最も高かったのは「国枝慎吾(車いすテニス)」の 81.7%であった。ついで、「上地結衣(車いすテニス)」(71.2%)、「道下美里(陸上競技)」(57.9%)、「鳥海連志(車いすバスケットボール)」(57.1%)、「木村敬一(水泳)」(56.7%)であった。

図表 3-1 パラリンピアン認知度と正答率(上位 30 人)

(96)

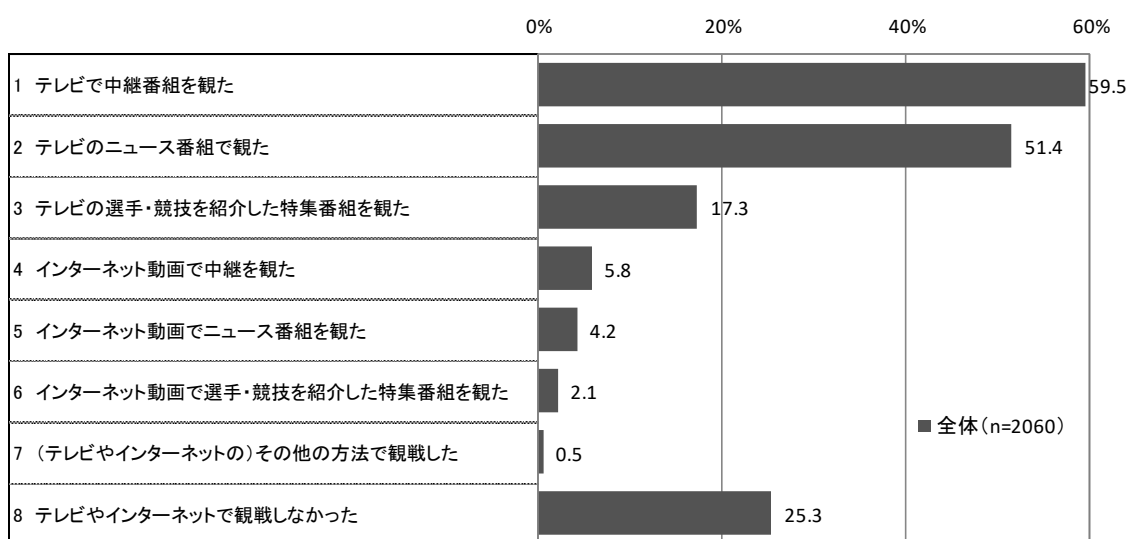
| NO | 氏名 | 全体(N) | 認知している | | | 知らない | 競技名 | 正答率 |
|----|----------------------|-------|--------|----------|------|------|-----------------|------|
| | | | 知っている | 聞いたことがある | | | | |
| 1 | 国枝 慎吾(くにえだ しんご) | 2060 | 45.2 | 31.3 | 13.9 | 54.8 | 車いすテニス | 81.7 |
| 2 | 上地 結衣(かみじ ゆい) | 2060 | 22.5 | 12.9 | 9.6 | 77.6 | 車いすテニス | 71.2 |
| 3 | 富田 宇宙(とみた うちゅう) | 2060 | 11.3 | 3.4 | 7.9 | 88.6 | 水泳 | 36.8 |
| 4 | 池崎 大輔(いけざき だいすけ) | 2060 | 8.7 | 3.5 | 5.2 | 91.3 | 車いすラグビー | 28.3 |
| 5 | 山本 篤(やまもと あつし) | 2060 | 7.9 | 3.3 | 4.6 | 92.1 | 陸上競技 | 37.7 |
| 6 | 和田 伸也(わだ しんや) | 2060 | 7.9 | 2.5 | 5.4 | 92.1 | 陸上競技 | 11.7 |
| 7 | 木村 敬一(きむら けいいち) | 2060 | 7.3 | 3.8 | 3.5 | 92.7 | 水泳 | 56.7 |
| 8 | 瀬立 モニカ(せりゅう もにか) | 2060 | 7.1 | 2.3 | 4.8 | 92.9 | カヌー | 21.8 |
| 9 | 鈴木 孝幸(すずき たかゆき) | 2060 | 6.9 | 2.4 | 4.5 | 93.1 | 水泳 | 38.5 |
| 10 | 道下 美里(みちした みさと) | 2060 | 6.8 | 3.7 | 3.1 | 93.2 | 陸上競技 | 57.9 |
| 11 | 鳥海 連志(ちょうかい れんし) | 2060 | 6.1 | 3.3 | 2.8 | 93.9 | 車いすバスケットボール(男子) | 57.1 |
| 12 | 日向 楓(ひなた かえで) | 2060 | 6.0 | 1.6 | 4.4 | 94.1 | 水泳 | 21.3 |
| 13 | 藤本 伶央(ふじもと れお) | 2060 | 5.8 | 2.0 | 3.8 | 94.2 | 車いすバスケットボール(男子) | 22.7 |
| 14 | 村岡 桃佳(むらおか ももか) | 2060 | 5.8 | 1.9 | 3.9 | 94.2 | 陸上競技 | 12.5 |
| 15 | 中西 麻耶(なかにし まや) | 2060 | 5.2 | 2.4 | 2.8 | 94.8 | 陸上競技 | 47.2 |
| 16 | 谷真 海(たに まみ) | 2060 | 5.1 | 2.8 | 2.3 | 95.0 | トライアスロン | 20.2 |
| 17 | 岡崎 愛子(おかざき あいこ) | 2060 | 5.1 | 1.5 | 3.6 | 95.0 | アーチェリー | 8.7 |
| 18 | 土田 和歌子(つちだ わかこ) | 2060 | 4.7 | 2.3 | 2.4 | 95.3 | 陸上競技、トライアスロン | 30.9 |
| 19 | 伊藤 智也(いとう ともや) | 2060 | 4.6 | 1.6 | 3.0 | 95.4 | 陸上競技 | 9.5 |
| 20 | 佐藤 友折(さとう ともき) | 2060 | 4.4 | 2.1 | 2.3 | 95.6 | 陸上競技 | 26.4 |
| 21 | 鈴木 徹(すずき とおる) | 2060 | 4.3 | 0.9 | 3.4 | 95.7 | 陸上競技 | 9.0 |
| 22 | 山田 美幸(やまだ みゆき) | 2060 | 4.2 | 1.8 | 2.4 | 95.7 | 水泳 | 34.1 |
| 23 | 香西 宏昭(こうざい ひろあき) | 2060 | 4.0 | 1.7 | 2.3 | 96.0 | 車いすバスケットボール(男子) | 30.5 |
| 24 | 杉浦 佳子(すぎうら けいこ) | 2060 | 3.9 | 1.7 | 2.2 | 96.0 | 自転車競技 | 19.5 |
| 25 | 浦田 理恵(うらた りえ) | 2060 | 3.8 | 1.4 | 2.4 | 96.2 | ゴールボール(女子) | 23.1 |
| 26 | 上与那原 寛和(うえよなばる ひろかず) | 2060 | 3.8 | 1.3 | 2.5 | 96.2 | 陸上競技 | 21.5 |
| 27 | 池 透暢(いけ ゆきのぶ) | 2060 | 3.7 | 1.8 | 1.9 | 96.3 | 車いすラグビー | 36.8 |
| 28 | 杉村 英孝(すぎむら ひでたか) | 2060 | 3.6 | 1.8 | 1.8 | 96.4 | ボッチャ | 37.3 |
| 29 | 里見 紗季奈(さとみ さりな) | 2060 | 3.6 | 1.0 | 2.6 | 96.4 | バドミントン | 12.0 |
| 30 | 山田 拓朗(やまだ たくろう) | 2060 | 3.4 | 1.2 | 2.2 | 96.7 | 水泳 | 15.9 |

2. 東京オリンピック・パラリンピックの観戦

2.1 オリンピックの観戦形態

東京オリンピックの観戦形態についてみると、「テレビで中継番組を観た」が59.5%と最も多く、ついで「テレビのニュース番組で観た」(51.4%)であった(図表 3-2)。

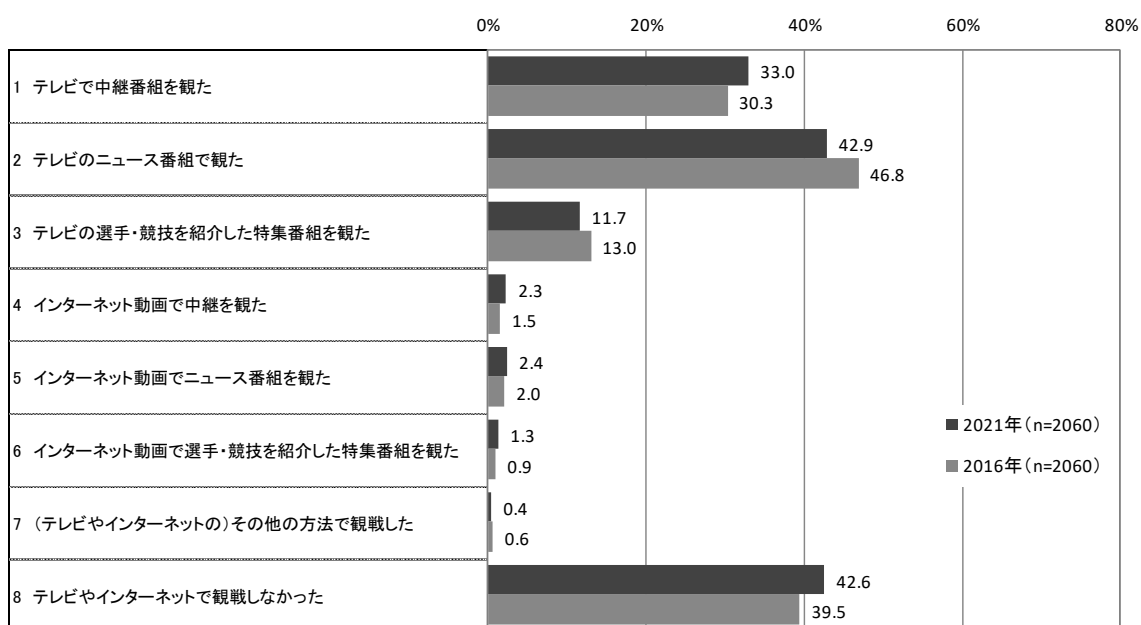
図表 3-2 東京オリンピックの観戦形態(複数回答)



2.2 パラリンピックの観戦形態

東京パラリンピックの観戦形態についてみると、「テレビのニュース番組で観た」が42.9%と最も多く、ついで、「テレビで中継番組を観た」(33.0%)であった(図表 3-3)。リオデジャネイロ大会の観戦形態を尋ねた前回調査と比べて、「テレビで中継番組を観た」「テレビのニュース番組で観た」がほとんど変わらなかった。「テレビやインターネットで観戦しなかった」も、ほとんど変化がみられなかった。

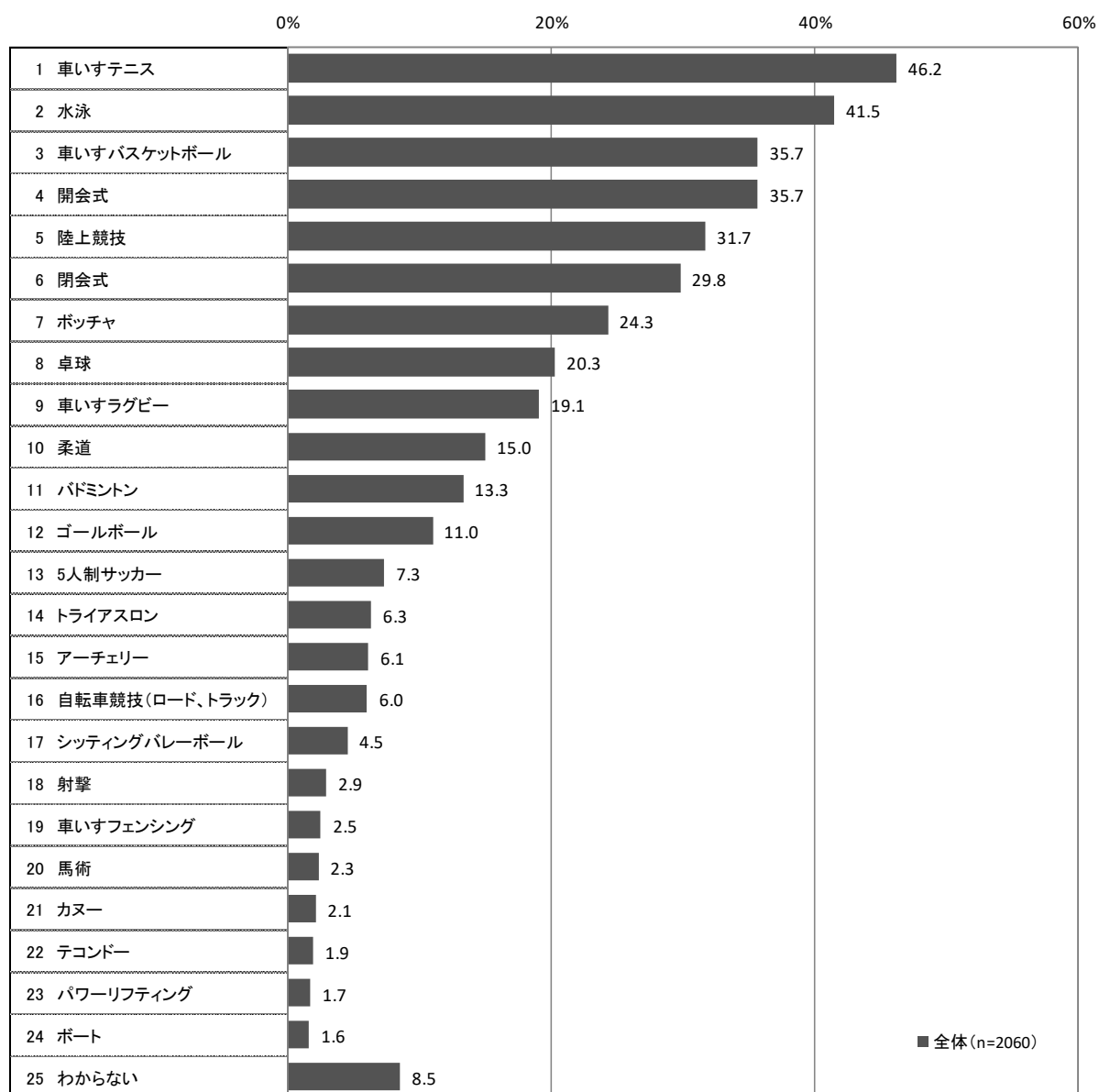
図表 3-3 東京パラリンピックの観戦形態(複数回答)



2.3 観戦種目

テレビやインターネットで東京パラリンピック大会を観戦した人のうち、観戦競技について尋ねたところ、「車いすテニス」が46.2%で最も多く、ついで、「水泳」(41.5%)、「車いすバスケットボール」(35.7%)、「開会式」(35.7%)、「陸上競技」(31.7%)、「閉会式」(29.8%)であった(図表3-4)。「わからない」が8.5%であった。

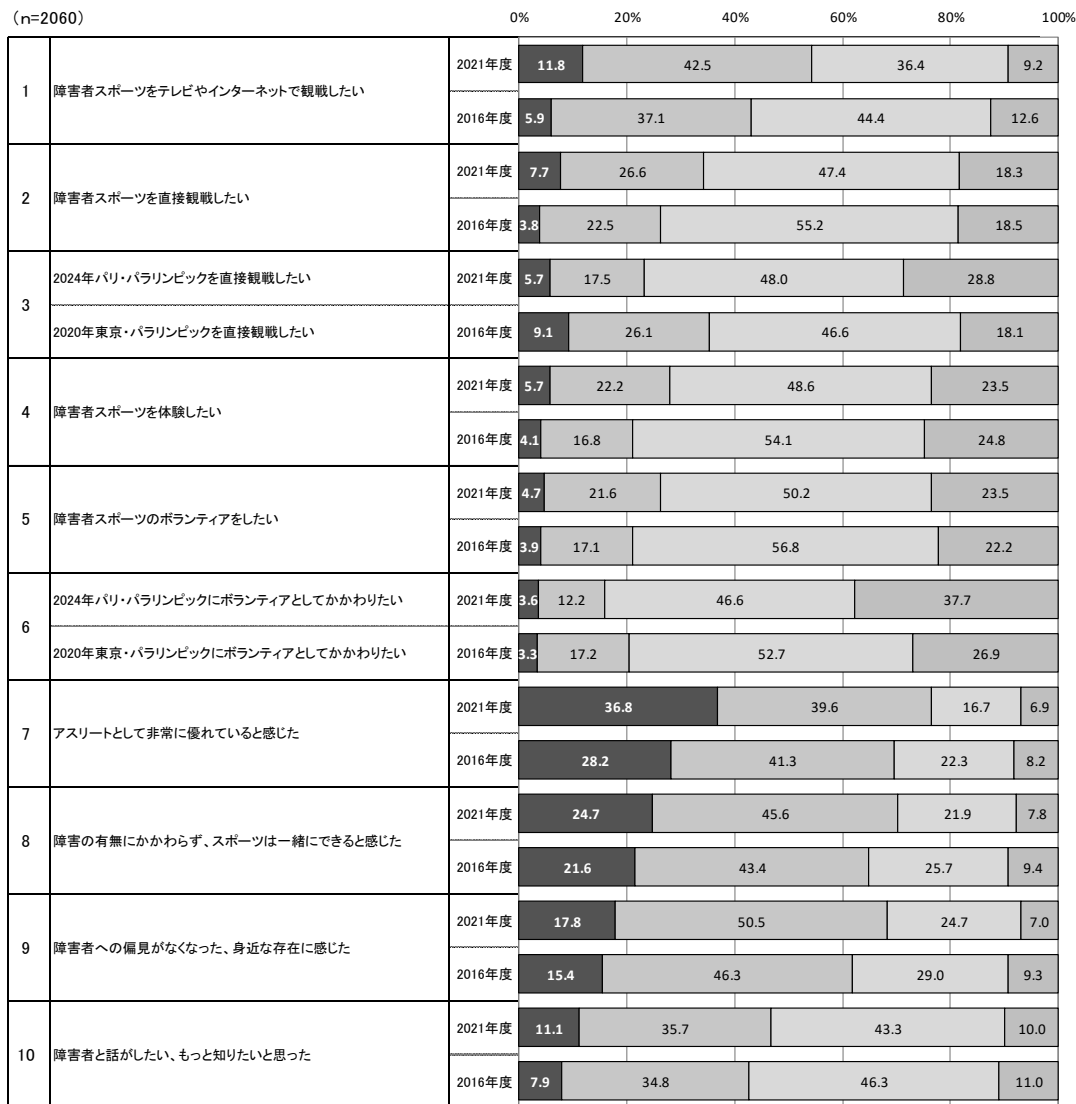
図表3-4 東京パラリンピックの観戦競技(複数回答)



2.4 東京パラリンピック大会観戦後の感想

テレビやインターネットで東京パラリンピック大会を観戦した人のうち、観戦した感想について尋ねたところ、最も多かったのが「アスリートとして非常に優れていると感じた」であった(図表 3-5)。「よく当てはまる」(36.8%)と「やや当てはまる」(39.6%)を合わせると 7 割を超えた。ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」の 70.3%(よく当てはまる:24.7%、やや当てはまる:45.6%)、「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」の 68.3%(よく当てはまる:17.8%、やや当てはまる:50.5%)であった。「2024 年パリ・パラリンピックを直接観戦したい」は 23.2%(よく当てはまる:5.7%、やや当てはまる:17.5%)で、前回調査で尋ねた「2020 年東京・パラリンピックを直接観戦したい」の 35.2%(よく当てはまる:9.1%、やや当てはまる:26.1%)よりも減少した。

図表 3-5 東京パラリンピック大会観戦後の感想

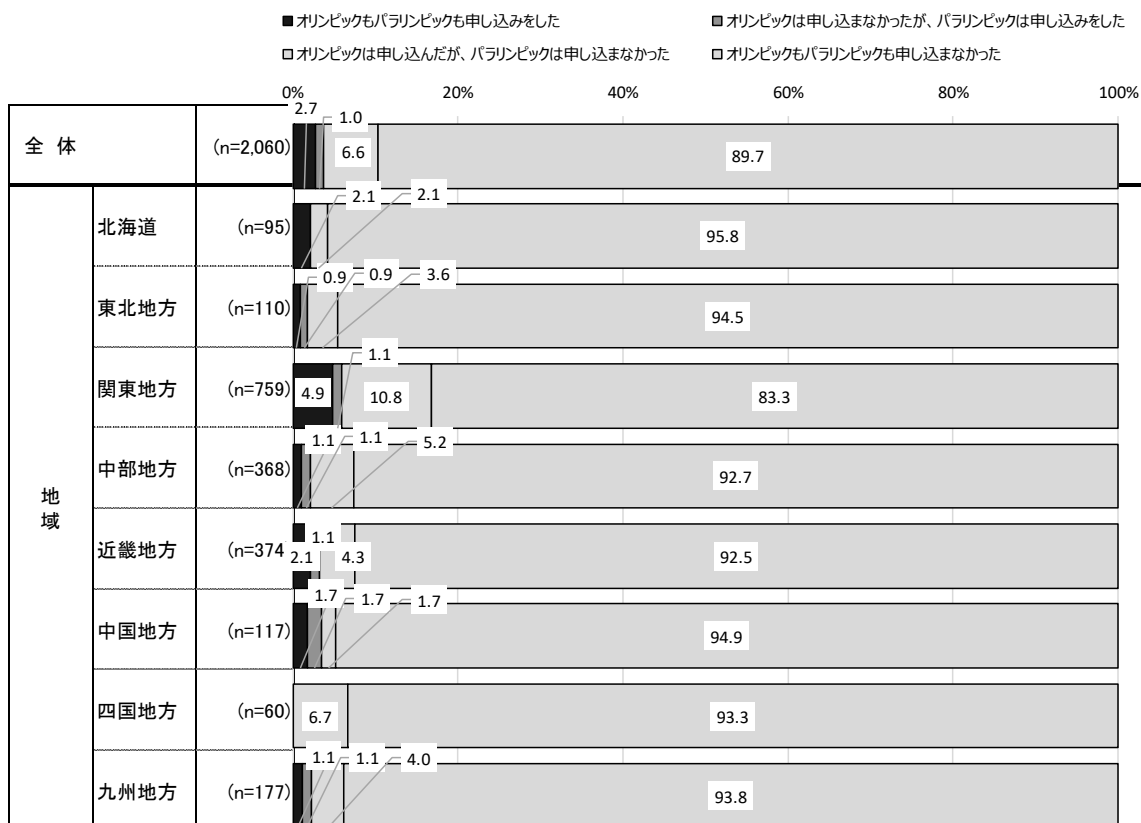


3. 東京オリンピック・パラリンピックのチケット購入状況

3.1 チケットの申込状況

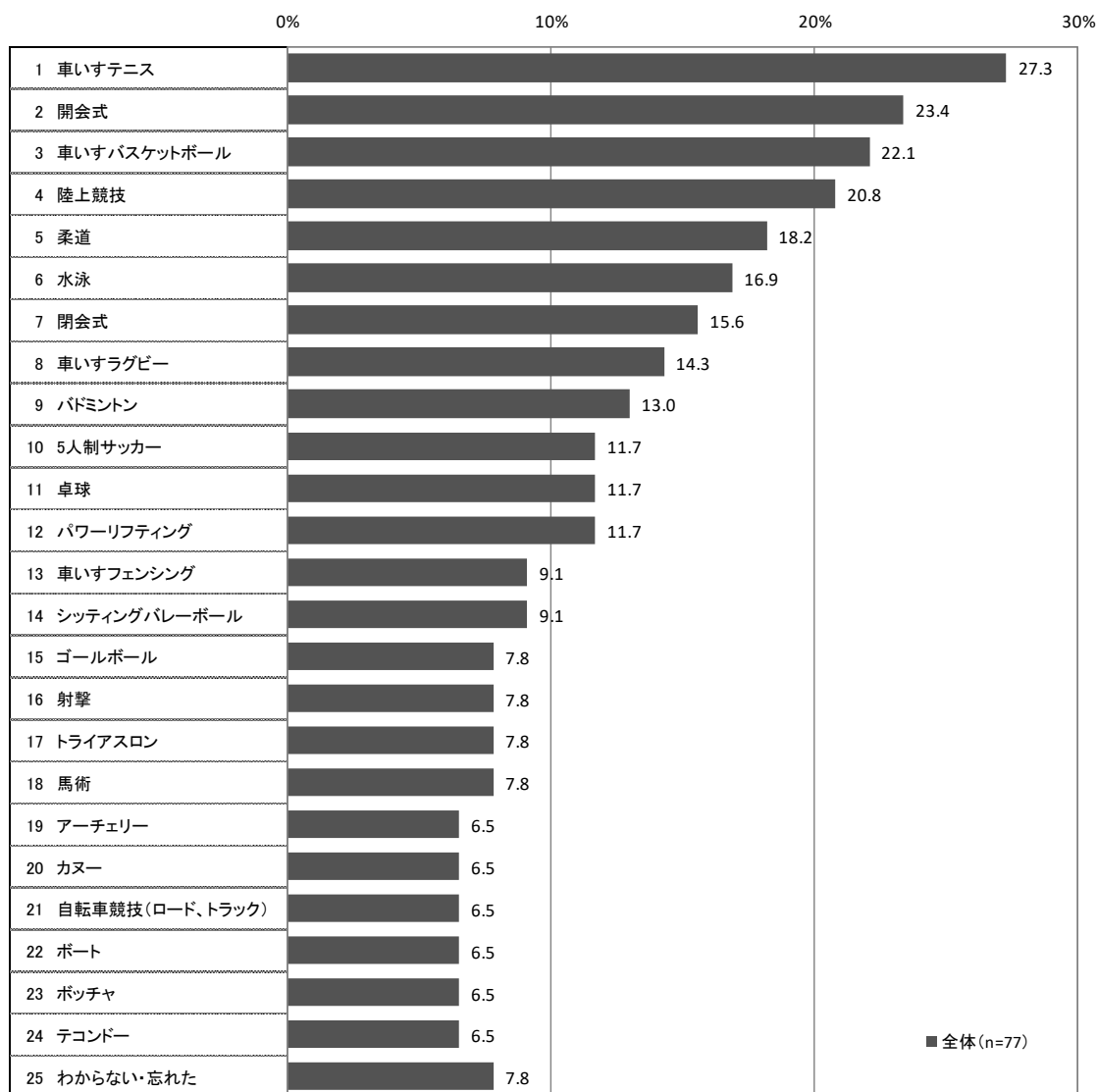
東京オリンピック・パラリンピックのチケットの申し込み状況について尋ねたところ、「オリンピックもパラリンピックも申し込みをした」は2.7%、「オリンピックは申し込みなかったが、パラリンピックは申し込みをした」は1.0%、「オリンピックは申し込んだが、パラリンピックは申し込みなかった」は6.6%だった(図表 3-6)。「オリンピックもパラリンピックも申し込みなかった」のは約9割だった。地域別にみると、「関東地方」では、「オリンピックもパラリンピックも申し込みをした」は4.9%、「オリンピックは申し込みなかったが、パラリンピックは申し込みをした」は1.1%、「オリンピックは申し込んだが、パラリンピックは申し込みなかった」は10.8%と、いずれも全体平均より高かった。

図表 3-6 チケット申込状況



東京パラリンピックのチケットを申し込んだ人の競技についてみると、「車いすテニス」が27.3%と最も多く、ついで、「開会式」(23.4%)、「車いすバスケットボール」(22.1%)、「陸上競技」(20.8%)、「柔道」(18.2%)だった(図表 3-7)。

図表 3-7 チケット申込競技(複数回答)

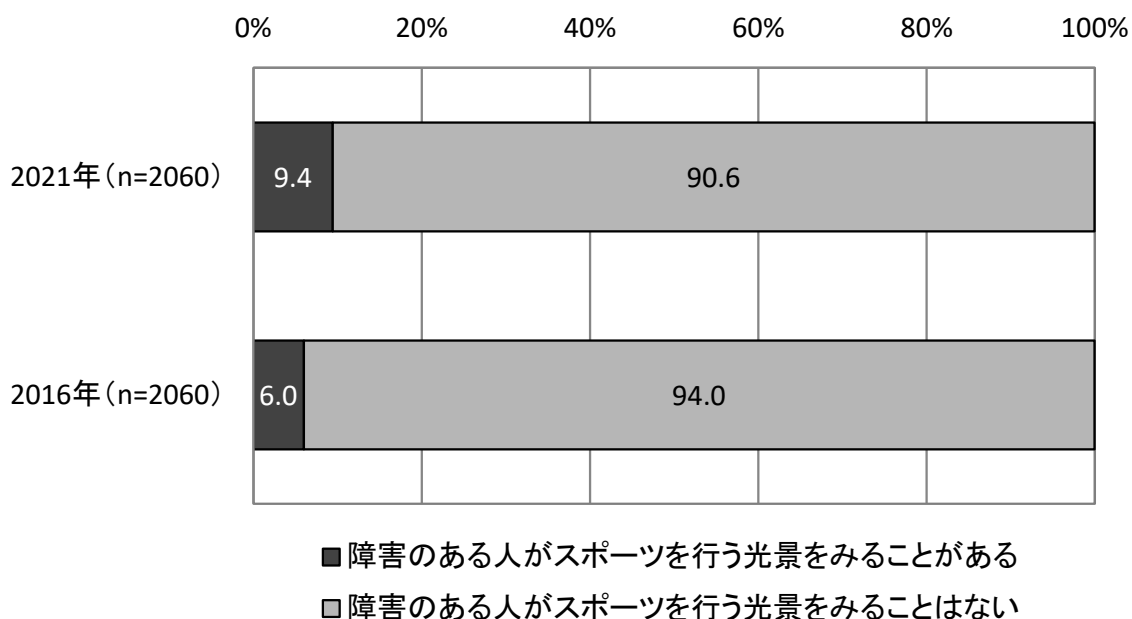


4. 障害者スポーツとの接点

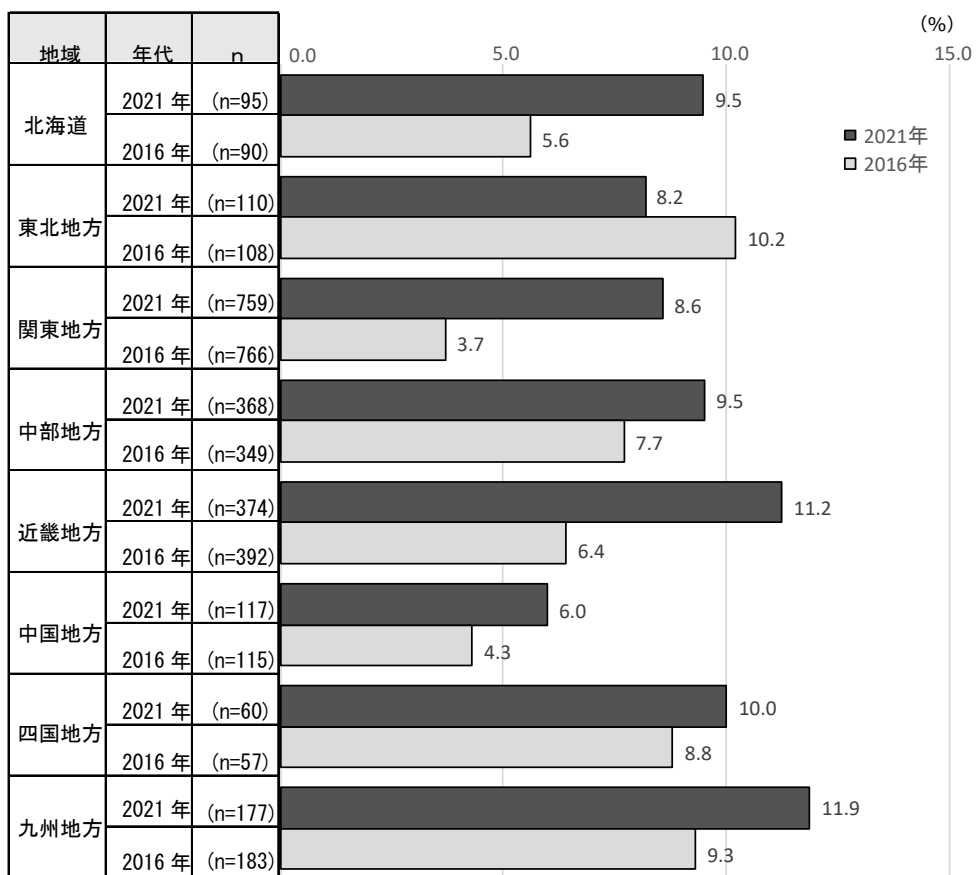
4.1 障害のある人がスポーツを行う光景・種目

日常生活の中で人々がスポーツを行う光景を見ることがあるかについて尋ねたところ、「障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがある」は、2016 年度調査の 6.0%から 9.4%に増加した(図表 3-8)。地域別にみると、関東地方で 2016 年度調査(3.7%)から 8.6%と 2 倍以上増加した(図表 3-9)。性年代別にみると、「女性/20 代」「女性/20 代」「女性/30 代」「女性/60 代以上」で急増した(図表 3-10)。その中で、見たスポーツの種目は、「バスケットボール」が最も多く、ついで、「テニス」であった(図表 3-11)。「陸上競技」「水泳」「ボッチャ」は 2016 年度調査から、大幅に増加した。

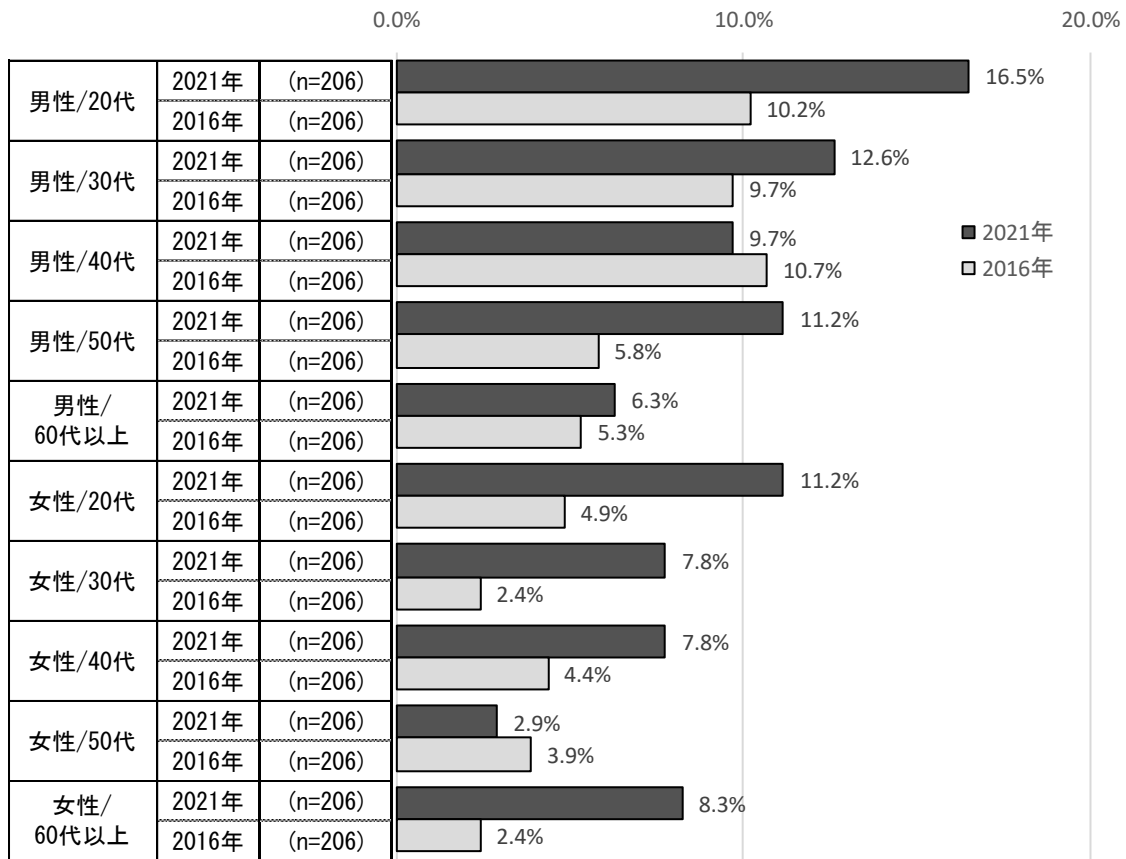
図表 3-8 障害のある人がスポーツを行う光景



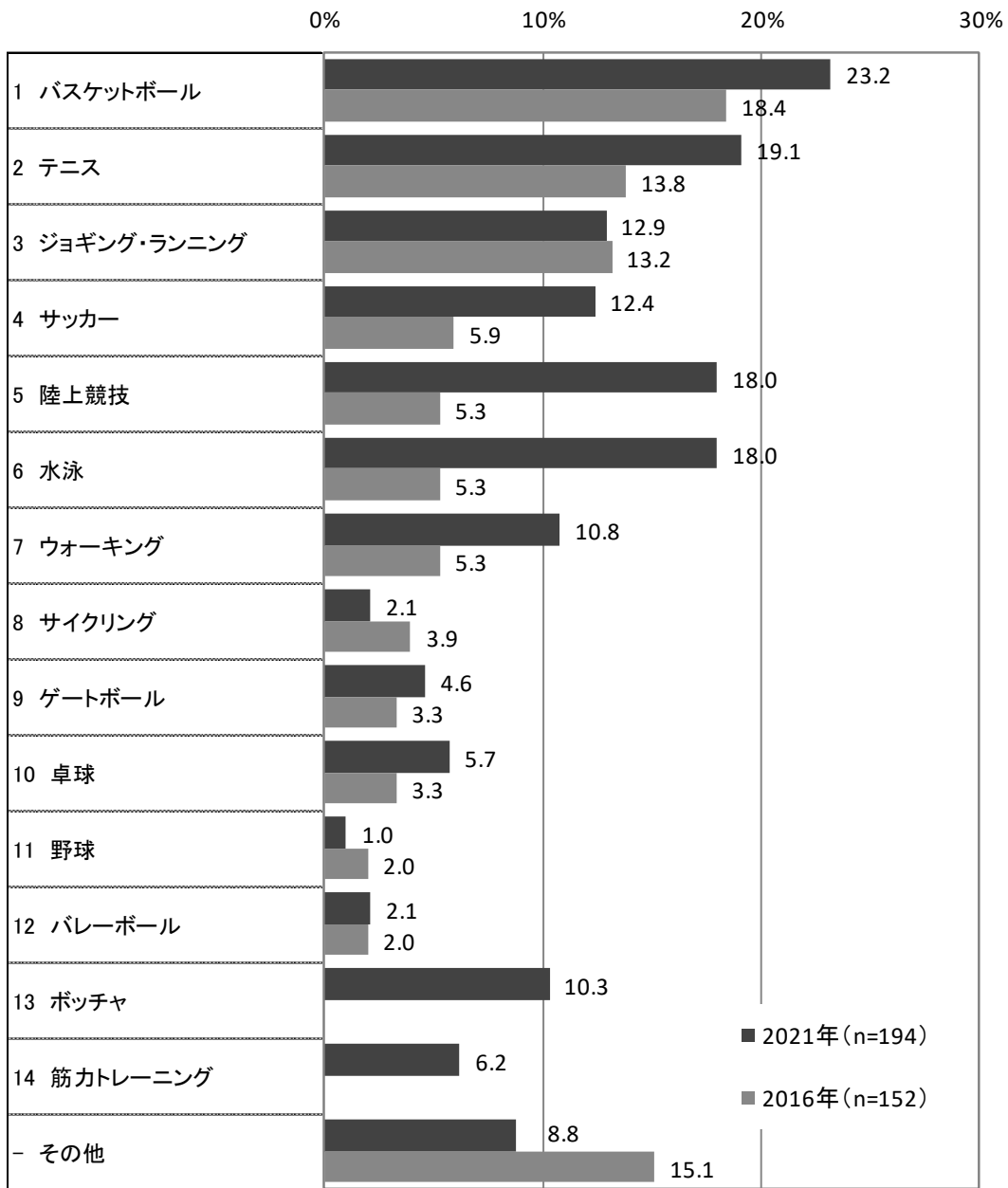
図表 3-9 障害のある人がスポーツを行う光景(地域別)



図表 3-10 障害のある人がスポーツを行う光景(性年代別)



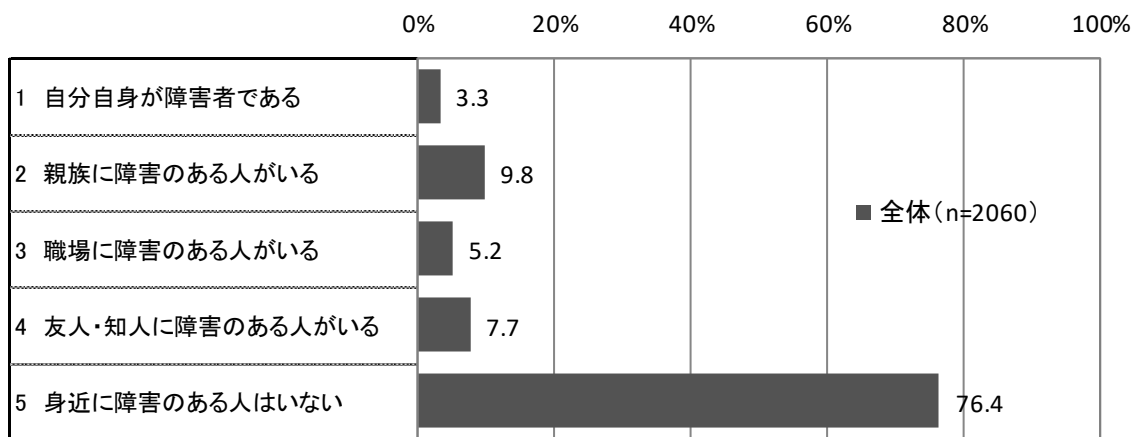
図表 3-11 障害のある人がスポーツを行う光景で見る種目一覧(複数回答)



4.2 身近にいる障害のある人

身近に障害のある人について尋ねたところ、「身近に障害のある人はいない」が 76.4%で最も多く、ついで、「親族に障害のある人がいる」(9.8%)、「友人・知人に障害のある人がいる」(7.7%)であった。「自分自身が障害者である」は 3.3%であった(図表 3-12)。

図表 3-12 身近にいる障害のある人の有無



5. クロス集計

身近に障害のある人の有無別にパラリンピック観戦形態についてみると、「自分以外の身近な人に障害者がいる」では、「テレビのニュース番組で観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「(テレビやインターネット)以外のその他の方法で観戦した」が1%水準で有意に高かった(図表 3-13)。一方で、「身近に障害のある人はいない」では、「テレビの中継番組を観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「インターネット動画で中継番組を観た」「インターネット動画でニュース番組を観た」「インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た」が1%水準で有意に低かった。「テレビやインターネットで観戦しなかった」非実施層は、「身近に障害のある人はいない」が1%水準で有意に高かった。

図表 3-13 身近に障害のある人の有無別にみるパラリンピック観戦形態

| | | 全体 | テレビで中継番組を観た | テレビのニュース番組で観た | テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た | インターネット動画で中継を観た | インターネット動画でニュース番組を観た | インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た | (テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した | テレビやインターネットで観戦しなかった |
|---------------------|------------------|-------|-------------|---------------|-----------------------|-----------------|---------------------|-----------------------------|---------------------------|---------------------|
| | | (%) | | | | | | | | |
| 全体 | | 2,060 | 33.0 | 42.9 | 11.7 | 2.3 | 2.4 | 1.3 | 0.4 | 42.6 |
| あなたの身近に障害のある人がいますか。 | 自分自身が障害者である | 69 | 37.7 | 43.5 | 14.5 | 2.9 | 1.4 | 1.4 | 0.0 | 42.0 |
| | 自分以外の身近な人に障害者がいる | 430 | △39.3 | ▲48.8 | ▲18.1 | 4.9 | △5.6 | △3.3 | ▲0.7 | ▼36.0 |
| | 身近に障害のある人はいない | 1,574 | ▼31.2 | ▽41.4 | ▼10.0 | ▼1.6 | ▼1.6 | ▼0.8 | 0.3 | ▲44.3 |

【全体との差の検定】
有意水準 高 低
1% ▲ ▼
5% △ ▽
10% ∴ ∴

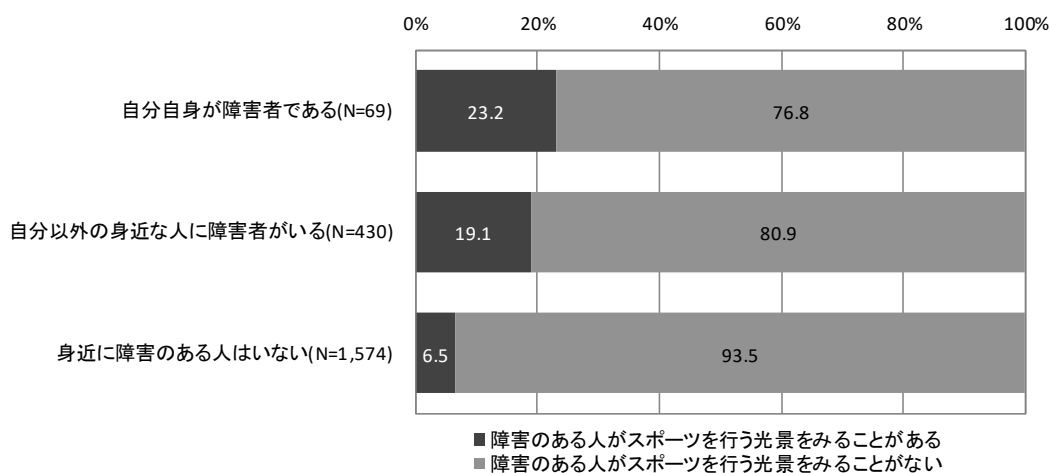
身近に障害のある人の有無別にパラリンピック観戦の感想をみた。「自分以外の身近な人に障害者がいる」では、「障害者スポーツのボランティアをしたい」が「よく当てはまる」において1%水準で有意に高かった(図表 3-14)。一方で、「身近に障害のある人はいない」では、「障害者スポーツを体験したい」「障害者スポーツのボランティアをしたい」「障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った」が「よく当てはまる」において1%水準で有意に低かった。

図表 3-14 身近に障害のある人の有無別にみる観戦後の感想

| | | 全体 | よく当てはまる | やや当てはまる | あまり当てはまらない | まったく当てはまらない |
|--------------------------------|------------------|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------|------------|-------------|
| | | | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: auto;"> 【全体との差の検定】 有意水準 高 低 1% ▲ ▼ 5% △ ▽ 10% ∴ ∴ </div> | | | |
| 障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい | 全体 | 1183 | 11.8 | 42.5 | 36.4 | 9.2 |
| | 自分自身が障害者である | 40 | 20.0 | 42.5 | 32.5 | 5.0 |
| | 自分以外の身近な人に障害者がいる | 275 | ∴17.5 | ▲50.9 | ∴26.2 | ▼5.5 |
| | 身近に障害のある人はいない | 877 | ▽9.8 | ▼40.0 | ∴39.7 | ▲10.5 |
| 障害者スポーツを直接観戦したい | 全体 | 1183 | 7.7 | 26.6 | 47.4 | 18.3 |
| | 自分自身が障害者である | 40 | 10.0 | 32.5 | 47.5 | 10.0 |
| | 自分以外の身近な人に障害者がいる | 275 | ∴10.5 | ▲36.0 | ▼39.6 | ▽13.8 |
| | 身近に障害のある人はいない | 877 | ∴6.8 | ▼23.4 | ▲49.9 | △19.8 |
| 2020年東京パラリンピックを直接観戦したい | 全体 | 1183 | 5.7 | 17.5 | 48.0 | 28.8 |
| | 自分自身が障害者である | 40 | 10.0 | 20.0 | 37.5 | 32.5 |
| | 自分以外の身近な人に障害者がいる | 275 | ∴8.4 | ∴21.5 | 45.1 | 25.1 |
| | 身近に障害のある人はいない | 877 | ▽4.7 | ∴16.2 | 49.3 | 29.9 |
| 障害者スポーツを体験したい | 全体 | 1183 | 5.7 | 22.2 | 48.6 | 23.5 |
| | 自分自身が障害者である | 40 | 12.5 | 22.5 | 42.5 | 22.5 |
| | 自分以外の身近な人に障害者がいる | 275 | △8.7 | ∴26.5 | 44.7 | 20.0 |
| | 身近に障害のある人はいない | 877 | ▼4.6 | 21.0 | 49.9 | 24.5 |
| 障害者スポーツのボランティアをしたい | 全体 | 1183 | 4.7 | 21.6 | 50.2 | 23.5 |
| | 自分自身が障害者である | 40 | 7.5 | 17.5 | 42.5 | 32.5 |
| | 自分以外の身近な人に障害者がいる | 275 | ▲8.7 | △26.5 | 47.3 | ▼17.5 |
| | 身近に障害のある人はいない | 877 | ▼3.5 | ∴20.2 | 51.3 | ∴25.0 |
| 2020年東京パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい | 全体 | 1183 | 3.6 | 12.2 | 46.6 | 37.7 |
| | 自分自身が障害者である | 40 | 7.5 | 17.5 | ▽30.0 | 45.0 |
| | 自分以外の身近な人に障害者がいる | 275 | 5.5 | 14.5 | 46.5 | 33.5 |
| | 身近に障害のある人はいない | 877 | ▽2.9 | 11.3 | 47.1 | 38.8 |
| アスリートとして非常に優れていると感じた | 全体 | 1183 | 36.8 | 39.6 | 16.7 | 6.9 |
| | 自分自身が障害者である | 40 | 45.0 | 40.0 | 7.5 | 7.5 |
| | 自分以外の身近な人に障害者がいる | 275 | 41.1 | 42.5 | 13.5 | ▼2.9 |
| | 身近に障害のある人はいない | 877 | ∴35.2 | 38.8 | ∴17.9 | △8.1 |
| 障害の有無にかかわらず、スポーツと一緒にできると感じた | 全体 | 1183 | 24.7 | 45.6 | 21.9 | 7.8 |
| | 自分自身が障害者である | 40 | 25.0 | 45.0 | 25.0 | 5.0 |
| | 自分以外の身近な人に障害者がいる | 275 | 26.9 | 50.2 | 18.9 | ▼4.0 |
| | 身近に障害のある人はいない | 877 | 23.8 | 44.6 | 22.6 | △9.0 |
| 障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた | 全体 | 1183 | 17.8 | 50.5 | 24.7 | 7.0 |
| | 自分自身が障害者である | 40 | 17.5 | 52.5 | 22.5 | 7.5 |
| | 自分以外の身近な人に障害者がいる | 275 | ∴21.8 | 53.8 | ▽19.3 | 5.1 |
| | 身近に障害のある人はいない | 877 | ∴16.4 | 49.6 | △26.3 | 7.6 |
| 障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った | 全体 | 1183 | 11.1 | 35.7 | 43.3 | 10.0 |
| | 自分自身が障害者である | 40 | △25.0 | 32.5 | 30.0 | 12.5 |
| | 自分以外の身近な人に障害者がいる | 275 | △15.3 | △41.8 | ▽36.7 | ▽6.2 |
| | 身近に障害のある人はいない | 877 | ▼9.4 | ∴34.1 | △45.5 | ∴11.1 |

身近に障害のある人の有無別に、障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無について尋ねたところ、「障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがある」では、「身近に障害のある人はいない」(6.5%)が、「自分自身が障害者である」(23.2%)の約 4 分の 1、「自分以外の身近な人に障害者がいる」(19.1%)の約 3 分の 1 だった(図表 3-15)。

図表 3-15 身近に障害のある人の有無別にみる
障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無



日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景有無についてみると、日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見たことがある人の方が、「テレビで中継番組を観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「インターネット動画で中継を観た」「インターネット動画でニュース番組を観た」において、1%水準で有意に高かった(図表 3-16)。

図表 3-16 日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無別にみる東京パラリンピック大会の観戦形態

| | 全体 | 観戦形態 | | | | | | | | |
|----------------------------------------|-------|-------------|---------------|-----------------------|-----------------|---------------------|-----------------------------|---------------------------|---------------------|-------|
| | | テレビで中継番組を観た | テレビのニュース番組で観た | テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た | インターネット動画で中継を観た | インターネット動画でニュース番組を観た | インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た | (テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した | テレビやインターネットで観戦しなかった | |
| | (%) | | | | | | | | | |
| 全体 | 2,060 | 33.0 | 42.9 | 11.7 | 2.3 | 2.4 | 1.3 | 0.4 | 42.6 | |
| あなたは日常生活の中で、障害のある人がスポーツを行う光景をみるがありますか。 | ある | 194 | ▲48.5 | 52.1 | ▲19.6 | ▲7.7 | ▲9.3 | ▲7.7 | △2.1 | ▼24.7 |
| | ない | 1,866 | ▼31.4 | 42.0 | ▼10.8 | ▼1.7 | ▼1.7 | ▼0.6 | △0.2 | ▲44.4 |

6. まとめと考察

本調査の回答対象とした東京パラリンピックに出場した 45 名のパラリンピアンのうち、最も認知度の高い選手は「国枝慎吾」で、「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度は 45.2%だった。第 2 位は「上地結衣」で、「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度は 22.5%だった。2016 年度調査でも第 1 位「国枝慎吾」、第 2 位「上地結衣」であり、5 年経過した現在でも、パラリンピアンの中で 2 人の認知度が高いことが明らかとなった。2016 年度からの変化をみるために、いずれの調査でも上位 10 位以内の「国枝慎吾」「上地結衣」「池崎大輔」(本調査第 4 位)と「山本篤」(本調査第 5 位)の結果をみていく。「知っている」「聞いたことがある」を合わせた認知度(2016 年度調査→2021 年度調査)をみると、「国枝慎吾」(34.0%→45.2%)、「上地結衣」(14.8%→22.5%)、「池崎大輔」(5.2%→8.7%)、「山本篤」(5.6%→7.9%)の 4 人全員の認知度が上昇している。実施競技の正答率(2016 年度調査→2021 年度調査)をみると、「国枝慎吾」(79.2%→81.7%)、「上地結衣」(56.4%→71.2%)、「池崎大輔」(17.8%→28.3%)、「山本篤」(22.6%→37.7%)と、認知度同様に 4 人全員の正答率が上昇している。特に、正答率 8 割超の「国枝慎吾」、7 割超の「上地結衣」は、多くの国民が車いすテニスの選手であることを認識していると言える。

オリンピックとパラリンピックの観戦状況を見ると、テレビ中継でオリンピックを観たのは 59.5%、パラリンピックを観たのは 33.0%だった。パラリンピックの独占放映権を NHK が保有しており、中継番組の多くを NHK が放映したため、民放各局で放映していたオリンピックと比べて、中継番組を観る機会が少なかったと言える。民放各局で放映したテレビのニュース番組でオリンピックを観たのは 51.4%、パラリンピックを観たのは 42.9%と、中継番組ほど差は開いていない。多くの放送局で取り扱われれば、それだけ国民の目に触れる機会が増えることから、民放各局でもパラリンピック中継をしていたら、中継番組の結果も変わっていたかもしれない。さらに、パラリンピックの観戦状況について、2016 年度調査と比較すると、「テレビやインターネットで観戦しなかった」は 39.5%から 42.6%と、非観戦層が増加した。時差のない国内開催であることに加えて、パラリンピック開催中に限れば、過去 4 大会で最も多くの放映時間を費やしていたにも関わらず、観戦率の上昇には繋がらなかった。コロナ禍での開催となり、開催是非について世論が割れる中、国民全体が必ずしも大会開催に好意的でなかったのも影響しているかもしれない。

東京大会の観戦後の感想については、2016 年度調査同様、「アスリートとして非常に優れていると感じた」(76.4%)が最も多く、ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」(70.3%)、「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」

(68.3%)であった。いずれも、2016 年度の結果よりも上昇している。次回大会の直接観戦やボランティア参加については、「2024 年パリ・パラリンピックを直接観戦したい」は 23.2%で、2016 年度調査の「2020 年東京・パラリンピックを直接観戦したい」の 35.2%より減少した。ボランティアとしての関りも、「2024 年パリ・パラリンピックでボランティアとしてかかわりたい」は 15.8%で、「2020 年東京・パラリンピックでボランティアとしてかかわりたい」の 20.5%より減少した。パラリンピックが国内開催か、国外開催かで、国民の行動形態がはっきりと変わった顕著な結果となった。

東京オリンピック・パラリンピックのチケットは、国民の約 9 割が申し込まなかった。実際にチケットを購入して大会を観戦しようとして検討していたのは約 1 割である。地域別では、オリンピック・パラリンピックの会場が多く点在する関東地方の申込率が高かったが、観戦に伴う移動費や大会期間中に高騰すると言われていた宿泊費などを考えると、関東圏以外の人たちが二の足を踏んだのも当然と言えるかもしれない。

日常生活の中で「障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがある」は、2016 年度調査の 6.0%から 9.4%に増加した。地域別では、ほとんどの地域で増加したが、特に関東地方では、2016 年度調査の 3.7%から 8.6%と 2 倍以上増加した。前述のチケット申込率も関東地方が高かったが、スポーツを行う光景をみることも、関東地方の増加率が最も大きかった。こうした背景には、パラリンピック会場が東京を中心に関東圏内に集中していたことで、会場近隣の住民や子どもたちが、他地域に比べて、障害者スポーツの体験会や交流会、パラリンピック教育を受ける機会などが多かったことが考えられる。そうした経験の積み重ねが、多角的に物事を見る目を養い、これまでは気付いていなかった障害のある人がスポーツを行う光景にも気付くようになってきたことも考えられる。

身近な環境に障害者がいるかどうか、自身の行動に影響を与えているとも言える。本調査の結果からも、パラリンピックの観戦状況やパラリンピック観戦後の感想について、身近に障害者がいる人の方が、身近に障害者がいない人よりも有意に高かった。一方で、身近に障害者がいない人は、日常生活で障害者がスポーツをする光景を見ることや、障害者スポーツの体験希望やボランティア希望、障害者との交流などについて、有意に低かった。

2013 年から始まったパラリンピックに向けた機運醸成も一段落した。国民の意識や行動が少しずつ変わってきたことは、本調査でも明らかになった。東京大会のレガシーを評価する上での一つの判断材料は提供できたと考えるが、長期的にみて 10 年後、15 年後の日本社会が、東京大会を契機にどう変わるかは、引き続き注視していきたい。

(小淵和也)

第4章

シンポジウム抄録集

シンポジウム 2021「パラリンピック報道とパラリンピアン
の認知度における社会発信の変化」

シンポジウム「パラリンピック報道とパラリンピアンへの認知度における社会発信の変化」を開催しました」

2021年12月17日(金)



当日は、当財団障害者スポーツ・プロジェクトを代表して小淵和也氏(公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 政策ディレクター)がまず、2021年に開催された東京2020パラリンピックを含めた過去4大会のテレビ放送量の変化やパラリンピアンへの認知度状況についての調査研究結果を報告。

その後のパネルディスカッションでは、引き続き小淵氏がコーディネーターを務め、報道する立場として元NHKリポーターで電動車いすユーザーの千葉絵里菜氏と共同通信社 運動部記者 パラスポーツキャップの鉄谷美知氏、パラアスリートとして車いすバスケットボールで北京・東京パラリンピック日本代表選手の網本麻里氏とプロ陸上競技選手、北京・ロンドン・リオデジャネイロ(以下、リオ)・東京パラリンピック日本代表選手の山本篤氏をパネリストに、それぞれの立場から障害者スポーツの環境変化や課題について、オンラインで視聴されている方からの質問・意見も交えながら、共に考えました。

最後に当財団障害者スポーツ・プロジェクトのプロジェクトリーダーである藤田紀昭氏(日

本福祉大学スポーツ科学部教授)より、パラリンピックの国内開催による共生社会実現への道が継続することを願うと共に今後もパラスポーツの報道とそれに伴う社会変化の記録を続けていく意向を話し、シンポジウム 2021 を終了しました。



コーディネーター役の小淵 和也氏

パネリスト・網本 麻里氏



パネリスト・山本 篤氏

パネリスト・千葉 絵里菜氏



パネリスト・鉄谷 美知氏

全体統括・藤田 紀昭氏

パラリンピック報道とパラリンピアンへの認知度に関する調査結果報告

小淵 和也さん(公益財団法人笹川スポーツ財団 政策ディレクター)

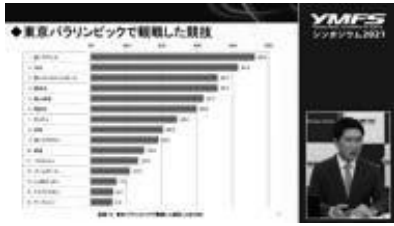


「テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査」と「パラリンピアンに対する社会的認知度調査」の 2 つの調査に関して結果の一部をご紹介します。

まず、テレビメディアの露出状況についてです。北京、ロンドン、リオ、そして東京の過去 4 大会の放送時間の変遷を見ていただくと、大会を重ねるにつれ放送時間が増えています。特に 2012 年のロンドンから 2016 年のリオにかけては、2013 年に東京パラリンピックの開催が決定したこともあって、約 3 倍以上に激増しています。ところが、東京大会ではリオよりわずかに減少しているのです。この放送時間の量を開催前、開催中、開催後に分けたグラフを見ていただくとお分かりいただけますが、開催前は、大会を重ねるごとに徐々に増えてきて東京が一番多く、開催中もロンドン・リオと増えて東京でドンと急増しています。問題は開催後です。リオはすごく増えていましたが、東京は激減している状況でした。色々な要因が考えられ、このあとのパネルディスカッションでも取り上げていきたいと思えます。

次にテレビ局別の放送時間です。過去 4 大会の合計は、NHK 総合がダントツで、北京、ロンドン、リオで急増し、東京でも一番でした。民放も基本的には同じ傾向ですが、NHK 教育だけ、北京、ロンドンと増えてリオで半減しているんです。というのもロンドン大会までは障害者スポーツやパラリンピックを福祉的、教育的観点で放送していたのに対し、2013 年東京パラリンピックの開催が決定したのち、障害者スポーツやパラリンピックもスポーツとして取り扱っていかうという方針に変えた結果、NHK 総合での放送がぐんと増えたとのこと。

そして番組カテゴリー別に見ると「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」「スポーツ」の 3 つが非常に多く、中でも徐々に「スポーツ」の番組で放送されるようになっていきます。放映権などの絡みもありますが、東京大会が 4 大会の中で最も「スポーツ」の番組で放映されました。



続いて「パラリンピアンに対する社会的認知度調査」です。東京 2020 パラリンピックの日本代表選手約 120 人の認知度を調べた結果、1 位が認知度 45.2%で車いすテニスの国枝慎吾選手、同じく車いすテニスの上地結衣選手が 22.5%で 2 位、本日も登壇いただく山本篤選手

が 7.9%で第 5 位です。この認知度を 2016 年リオ大会と比較すると、この時も国枝選手が 1 位で 34.0%、2 位が 14.8%の上地選手、山本選手 5.6%で 6 位でした。

山本選手は、2018 年冬のパラリンピック平昌にも出ています。認知度の経過を追っていくとリオで 5.6%、平昌で 6.9%、今回の東京で 7.9%と着実に認知されています。2,000 人を対象にした調査なので、日本国民 1 億 2000 万人に換算すると、1%しか増加していませんが、120 万人が知ってくれることになるので、選手の周りでは結構な影響や変化があったと思われる。

さらに選手の競技種目を知っているかを尋ねた項目では、国枝選手が車いすテニスの選手と知っている割合は、リオの時は 79.2%でしたが、東京では 81.7%まで増加。上地選手も 56.4%から 71.2%へと激増しています。山本選手もリオの 22.6%から今回 37.7%へと 15%以上も陸上選手であることへの認識が増えています。

そして東京パラリンピックの観戦状況については、「テレビで中継番組を観た」人の数は、リオが 30.3%で、東京 33.0%とそんなに変化がありませんでした。観戦した競技は、1 位が車いすテニス、2 位に水泳、3 位に車いすバスケットボール、4 位の開会式と 6 位閉会式に挟まれて陸上競技が 5 位に入っています。

何より驚いたことは、オリンピック・パラリンピックのチケット購入状況です。コロナ禍になる前の購入ですが、9 割近い方がオリンピックもパラリンピックもチケットを申し込んでいなかったのです。東京がメイン会場ですので、その周辺の方はチケットを買おうと思うかもしれませんが、そこから離れるとなかなか買いにくいのかなと思いましたが、地域別にも分けて集計しています。地域別では、関東地方が約 12%でトップでした。

最後に日常生活で障害者スポーツを見る状況についてです。リオが終わった後、日常生活で障害者がスポーツをしているのを見る状況にあると答えた人は 6.0%でしたが、東京大会の後には 9.4%に増加。地域別、性別、年代別で見ても、ほぼ同じように、障害者がスポーツする光景を見るようになったと答えています。個人的には、日本国民の多くの方が、障害者ス

スポーツに対するアンテナを張るようになってきたんじゃないかなと感じています。ただし、女性の40代、女性の50代では減っていて、調査報告書を発行する年度末に向けて、細かな分析を進めていこうと思っています。

ここまでが主な調査結果の報告です。ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

～パラリンピック報道とパラリンピアンへの認知度に関する調査結果報告をもとに～

東京大会開催後の報道量低下の要因を探る



コーディネーター・小淵和也氏(以下、小淵、敬称略):先ほどの調査結果をもとに「パラリンピック報道とパラリンピアン認知度」と言うテーマで登壇者の方々と色々意見交換ができればと思っております。

まずは、メディア報道について。パラリンピック開催後のテレビ放送時間が東京大会で減少した要因や、新聞・活字媒体での報道量について教えてください。

鉄谷美知氏(以下、鉄谷):新型コロナウイルス感染症の影響が非常に大きかったと思っています。先の報道量の調査結果はテレビ中継の集計なので、私自身は新聞記者ですから、正しいかわかりかねますが、ロンドンやリオの平時の大会ですと、情報番組やニュース番組に選手が出演し、大会の名シーンを振り返るなどがあったと思います。しかしコロナ禍でそういう機会がなかったからではないかと想像しています。

もう一点、各選手の地元での祝賀イベントなどが非常に抑制的で、そういうイベントがないと取材機会もなく、露出が減少したと思います。

象徴的な例が、2016年リオの後に行われた、オリンピックとパラリンピック合同でのパレード。80万人ぐらいの観客の方がいらっちゃって、パラスポーツも認知が広がったと思うんです。今回はそういう機会も逸したところがありますね。

またそのリオの後というのは、東京大会に向けての機運醸成として、リオ大会で活躍した選手やホープの選手の特集が組

まれたりという例もあったと思うんです。東京大会後はそうした報道量が減っているのかなと思います。



パネリスト・鉄谷 美知氏
「共同通信の記者でパラスポーツを担当しています。今回の東京パラリンピック取材して、その中で感じたことや新聞製作上で考えたことなど、お話しさせていただければと思います」

小淵：当財団の調査結果は、テレビメディアに限定していましたが、新聞にフォーカスした場合も同じような傾向でしょうか？

鉄谷：パラリンピックの後は、競技大会も少なくなりますので、報道が少ないことは、テレビも新聞も一緒だと思います。やはりいろんなアスリートがイベントに出てくる機会が、4年前に比べると少なく、そこが響いているのではないのでしょうか。

小淵：山本さん、パラリンピック後の祝賀イベントについて、2016年のリオ大会と今回の東京とで変化がありますか？ また報道量低下について、どう感じられていますか？

山本篤氏(以下、山本)：変わっていると思いますね。タイミングを見計らいながら色々な表敬や報告会をやらせていただけてるんですけど、リオの後はもう本当に色々なところに出る機会が多かったので、今年はものすごく変わりましたね。

(報道量の低下について)僕が一番感じたのは、金メダリストが引退をしなかったことじゃないかなと。例えば、オリンピックを機に卓球の水谷選手が引退をして、テレビに今も出続けていますよね。現役の選手だと練習があったり、いろんな思惑があって、テレビ側は使いにくいと思うんです。でも引退してしまえば練習とか関係ないし、すごく使いやすいんじゃないかな。ですので、パラリンピアン金メダリストが引退していたら、もうちょっと増えたのではないかという勝手な印象がありますね。



パネリスト・山本 篤氏
「プロアスリートとして活動しています。東京パラリンピックでは T63 走り幅跳びと100Mに出場しました。何大会かパラリンピックに出ている中での変化や日頃感じていることを率直にお話しさせていただきますと思います」

2018年、成田緑夢選手が平昌で金メダルを取った後に引退宣言をし、その後、バラエティー番組を総なめしていたんですよね。それで一気に認知度を上げた例をすごく間近で見ていて、こういうやり方があるんだなっていうのを知っていたので、今回は水谷選手がそれをやっていると感じました。

小淵：面白い視点ですね。続いて、ちょっと話を変えます。

NHKの放送時間に関していえば、パラスポーツも福祉・教育的観点ではなく、スポーツとして取り扱っていかうという、局の方針が変更され、開催中の放送量が増加した報告を先ほど

しました。その方針変更のひとつの流れの中で、千葉さんがNHKのリポーターに選ばれたのではないかと思うのですが、選ばれた経緯などを教えていただけますか？

千葉絵里菜氏(以下、千葉):2017年の5月、6月ぐらいにNHKが障害者キャスター、リポーターを応募していることを知り合いに教えてもらいました。元々車いすスラロームや車いすカーリング、電動車いすサッカーなどをやっていて、スポーツが大好きだったので応募しました。

応募人数は159名。そこから3人が選ばれました。1人が私、脳性麻痺で電動車いすユーザー、ボッチャを中心に取材しました。あとは聴覚障害の後藤佑季さんが主に陸上を担当され、左上肢機能障害の三上大進さんが、競泳をやってらっしゃいました。

ロンドンパラリンピックで当事者キャスターやリポーターが活躍したことがきっかけで、NHKでも障害者当事者が放送に関わることが重要だと判断したと聞いています。

選ばれてからNHKで2週間ほどアナウンサーの研修をしました。とにかく現場に出ること、取材をすること、それを言葉にすることを繰り返し、最初は平昌大会のBSの生放送でしゃべらせていただきました。今も緊張していますが、覚えているのが、緊張で足がバタバタ動いてしまって、マイクスタンドを蹴ってしまって皆さんにちょっとご迷惑をかけたことですね。

ちょうど東京オリンピック・パラリンピックを控えていてユニバーサルタクシーが導入され始めた時だったのですが、手をあげても止まってくれないということが起きていました。そのことを「サンデースポーツ」でレポートさせていただきました。その後はユニバーサルタクシーの方々ともご縁があったのでそこで繋がりができて前向きに取り組んでいただいております。



パネリスト・千葉 絵里菜氏
「北海道帯広市出身で、大学では福祉を学びました。脳性麻痺でヤマハの電動車いすを使っています。2017年10月からNHKのパラリポーターとして、パラスポーツや共生社会に向けたテーマでテレビやラジオで伝えさせていただきました」

東京大会までに、いろんなパラスポーツを取材しました。その中で同じ脳性麻痺の選手とたくさん出会ったんですね。ボッチャ、馬術、競泳、卓球などなど。脳性麻痺と言っても特性が異なることを分かってはいましたが、目の前にして自分が取材することで、同じ障害があっても1人1人違うんだよっていうことを分かって欲しくて。私が伝

えなくてはいけないという気持ちで、NHK で働いておりました。

小淵：ここで、チャットでいくつか質問が来ているので、鉄谷さんに伺います。パラリンピックの期間ではない時のパラスポーツや障害者スポーツに関する報道自体が少ないように感じるんですけども、それは実際少ないのでしょうか？ またその理由をお伺いできますか？

鉄谷：少ないと言われれば少ないと思います。例えば東京パラリンピックに向けて、何を書いてどういう取材をするかっていうところで、競技面がメインになってしまうのは事実だと思います。

理由は、なかなか難しいんですが、スポーツ面について話をさせていただきますと、大会があって、それを取り上げて、それを取り巻く人たち、プレーなどについて書くというサイクルで、そういうところでは、東京パラリンピックに向けて露出は増えてきたと思うんですけども、恒常的に書いていくことについて、これからまたやってかなければならないところかなと思います。



山本：パラスポーツが、日常的にリーグ戦をしていることってないですよ。そういうことが関係していませんか？

サッカー、野球、バスケは、日常的にリーグ戦で結構な試合数があるじゃないですか。(障害者スポーツは)大会はあるけど、常にあるわけではないので大会ごとの単発記事になって出ていくのかなあと、聞いていて思いました。

小淵：レギュラーシーズンみたいなものがもしあれば、取材もしやすかったりするんですか？

鉄谷：報じるのが日本選手権とか、トップの大会になると、パラリンピック種目が 22 競技あったとしても、一つの競技がフューチャーされるのが年に 1 回とか 2 回とかなので、やはり数が少なくなってきます。

日常的にそういう大会が増えて、これを報じていく土壌ができて、東京大会に向けてそういうのができてきたと思うんですが、これからもっと増やして報じる機会が増えていけば、報道の量も増えていくかなと思いますね。

小淵：網本さん、レギュラーシーズンとかリーグ戦という形で日常的に大会を行うと、もうちょっと状況が変わるかもしれないという話ですが、車いすバスケットでそういう話が出た時にどう思われますか？

網本麻里氏(以下、網本)：普通のバスケットの場合は、男女ともにシーズンがあって、その間に天皇杯とか皇后杯とかも行われているんですけど、車いすバスケットは、男女ともリーグ戦もないですし、本当に女子は皇后杯だけ、男子は天皇杯だけでシーズンがない。大会を開催しても小規模であったりします。

そもそも観戦していただく人に私自身が SNS で発信したり、他の選手もそれぞれの SNS など発信したりしても、なかなか観客が集まらず、メディアの方にも取り上げていただけないのが現状です。



パネリスト・網本 麻里氏

「今、大阪にいます。車いすバスケットをやっています。今日は短い時間ですけど、パラリンピックを始め、パラスポーツそしてパラリンピックの認知度を上げたり、盛り上げたりしたいと思います」

小淵：メディア報道関係でもう一つ、鉄谷さんにお伺いしたいのですが、東京パラリンピック2020の報道に感動ポルノ的なことが多く入ってくるかと思っていましたが、実際にはそんなことはありませんでした。それは意識してのことでしょうか？

鉄谷：パラアスリートの方が障害を受け入れ、スポーツを通じて自己実現をしていく、その人の人生を輝かせていく、というようなストーリーが強調されると感動ポルノと言われますが、それは否定されるものではなく、弊社の報道でも記事の根幹になるようなストーリーだと思っています。ただ相対的にそう多くなかったとおっしゃるのは、多種多様な記事が出てきたからではないでしょうか。

私はスポーツ面の記者ですが、今回心がけたのは、選手は障害にどういう風に折り合いをつけて、そのパフォーマンスを上げる工夫をしていくのか、そういうところを書いていくことでスポーツの面白さを伝えられるんじゃないかと考えていました。

例えば、山本選手のような義足を使われる選手の場合、その義足をどうやって開発していくのかとか、できたものを使いこなすためにどう体を鍛えていくのかとか。

あるいは網本選手のように車いす競技の場合、車いすの開発や工夫にもかなり注力されると思うんですが、その機動性をどう上げていくのか、例えば座面の高さはどう変えて、それ

がプレーにどう影響するのかとか、そういうところを書いていくことで、障害者スポーツの特性みたいなものを表現できないかなと思って取り組んできたつもりです。

語弊があるかもしれませんが、ウィークポイントを克服して、その競技を競い合う人たちの中で、自分たちの強みを伸ばしていくことは、パラスポーツに限らず、まさしく一般のスポーツも同じこと。そこを書いていくことによって、逆にこうパラスポーツの特徴みたいなのが、際立ってくるんじゃないかと考えてました。



あともう1点、こう障害を乗り越えたとか、克服したというような紋切り型の表現をあまり使わない方が良いよね、という話を社内でしたことをすごく覚えています。パラアスリートの方全てが、障害を乗り越えたと思っているか非常に疑問点もありましたし、そこを強調しすぎると、障害があるのにがんばっているよねという、非常に画一的なストーリーになるんじゃないか。多分それが感動ポルノと言われるものですけども、そこを特段意識した訳ではありませんが、スポーツサイドの話を淡々と書いていくことで十分ではないかと。スポーツ面に関してはそういう意識でやっていました。

小淵:今度は取材される側のアスリートにお話をお伺いします。山本さんは2008年の北京からパラリンピックに出場しているので、報道の違い、変遷は多分誰よりも身に沁みながら今に至っていると思うんですけど、2008年から振り返っていかがですか？

山本:2008年頃から、パラリンピックのたびに、30分ぐらいの特集番組を大会開催前に組んでもらっていましたが、よくよく考えてみると福祉ネットワークとか、NHK教育で放送されるようなことが多かったんです。でもリオぐらいから、民放の特集番組に出るようになったり、いろんな形で関わるようになって、そこはすごく変わったなーとデータを見て感じていました。今回の調査は、テレビがメインだと思いますが、新聞なども変わってきたと思いますね。

2008年北京パラリンピックに出た時にある新聞社の社会部を担当されているような方が(取材に)来たんですね。僕たちはスポーツをやっているんだからスポーツ部の方が来てよって思っ、そのことを口にしたんです。

それが東京大会に向けては、スポーツ欄に大きく載るようになった。人間的なストーリーについては社会面に載ったりしますが、でもやっぱりスポーツとして見られるようになってきた。この2008年から2021年にかけて大きく変わってきたと思いますね。
実際、今日来られている鉄谷さんもスポーツキャップの方ですし(笑)。

小淵:調査結果の答え合わせができた、安心しました。

ここで報道とは少し離れて、このご時世、SNSが無視できない存在としてあると思います。2008年当時、SNSはそんなに発達していなかった気がしていますが、網本さん、SNSの功罪あると思いますが、どう感じていましたか？

網本:初めてパラリンピックに出場した2008年大会の時は、SNSといえば私自身ではFacebookぐらいでした。テレビとかでほとんど放送されなかったこともあって、私の祖母が、「麻里ちゃんががんばってね」って言うのをNHKさんにFAXしたっていうのを大会が終わってから知ることがありました。



でも今回の東京2020パラリンピックでは、私のSNSに直接コメントをいただいたり、ダイレクトメッセージをいただきました。自国開催で時差がないことも大きかったのかなって個人的には思っているんですけど、直接的な応援メッセージをいただけたことがメリットですね。直接応援のメッセージをいただけるというのは本当に選手としてとてもありがたいんですけど、デメリットとして、いただいたメッセージへの返信をいつ、どういう風に返そうかなと、ちょっと困ることがありました。

小淵:大会期間中、SNSなどは見られていたんですか？

網本:見てました。でも一人の人に返信してしまうと、全部に返さないと、って思ってしまったので、大会期間中は、お返事せずに、終わってから返信したりしていました。

小淵:次回の大会ではもっと違うSNSが出てくるかもしれませんね。

続々とチャットでも質問いただいているので、一つだけ感想という形でいただいているものを共有させていただきます。

「千葉さんをはじめ、NHK パラリンピック放送リポーターの 3 人の方は NHK 的には大ヒットだったと思っています。どの方も笑顔で楽しそうにレポートする姿にとっても自然なものがありようを感じました」と感想をいただきました。

千葉:ありがとうございます。とても嬉しいです。

パラアスリートの認知度について



小淵:メディア報道からちょっと離れまして、今度は認知度のお話をしていければと思います。

ここは最初に山本さんに聞かざるを得ない、聞きたいと思っ
ていて、先の調査結果で認知度を発表させていただきまし
たが、ズバリご自身の認知度をご覧になっていかがでしょう

か?

山本:大会に出るたびに、少しずつ認知度が上がって行って。1%ずつぐらいで、1%かぁと思
っていたんですけど、換算すると120万人っていうので、ものすごい数の人に知ってもらえて
いるのかなとは思いますが。でも認知度の調査結果に出ていた上位3人と(認知度のパーセン
テージが)1桁台の人たちとでは、大きな差があると思いますね。

年々認知度が増えているとのことで、地元・大阪で声をかけてもらう機会は、すごく増えてき
ました。最初の頃は地元に戻った時に、パラリンピックが終わってすぐだと僕に気付いて声を
かけてもらうことはありましたが、だんだん薄れて行って、次の大会に出て、またちょっと知っ
てもらって、という状況です。

2016年のリオに出て、18年の平昌に出て、21年の東京に出る、こう短期間にたくさん出る
ことによって、いろんなメディアの方々に取り上げてもらえる機会があって、ちょっとずつ認知
度を伸ばしてきたのかなと思いましたね。

小淵:先ほどの調査結果のところで、山本選手の認知は、リオで5.6%、平昌で6.9%、今回

の東京で 7.9%と 2 年ごとに増えているとお伝えしましたが、その感覚ってありました？
120 万人に知られたって言う。

山本:全くないですね(笑)。声をかけられる数くらいしか、
分からないので。ちょっと増えたなっていうのは、肌感覚とし
てはあるんですけど、でもさほど多くはないと思っています。
義足で走り幅跳びをしているので、マルクス・レーム選手と
同じクラスなんじゃないかとよく間違われるんですよ。そう
すると、クラス分けのような細かいところまでは、まだまだ知ってもらえてないと感じますね。



マルクス・レーム選手について説明すると、陸上競技は障害の種類とその程度によってクラス
が分けられているんですが、彼は T64 という、ひざ関節があるクラス。僕はひざ関節がない
T63 のクラスです。T64 と T63 は、パラリンピックとしては別の競技なので、マルクス・レー
ム選手と僕は一緒に競技をしません。以前はクラス混同でやる場合もありましたので、ロンド
ンの大会かな、一緒に競技をしてポイント計算で、順位を争ったこともありましたが、リオ大会
や東京大会は、クラスも違うし、メダルも別なんです。

小淵:続いて競技の認知についてです。網本さん、車いすバスケットボール競技の認知につ
いて、知っている人が多いと思いますが、実際に観客や大会などでの変化はありましたか？

網本:2013 年に東京大会が決まってから、会社ぐるみや学生が部活全員で来てくれたりと、
観客が圧倒的に増えてきた印象があります。

あとはボランティアをしていただく方々が、大会ごとに増えてきていることも感じていました。

皇后杯では、チームにボランティアの人が 2 人、3 人付いていただいています。また会場内の
誘導などの運営のお手伝いをしていただくボランティアの方も増えていて、何年か続けて来
ていただく方とかも増えていました。

小淵:車いすバスケットは、障害のない人も参加できることから、大会など盛り上がっている
と伺いましたが、いかがですか？

網本:全ての全国大会は、男女関係なく出場可能です。天皇杯・皇后杯は、障害関係なく出場できるので、健常者の方が登録されたり、出場可能です。持ち点は最も障害の軽い4.5点*です。



※車いすバスケットボールの選手には障害レベルの重い者の順から1.0～4.5の持ち点が定められており、試合中コート上の5人の持ち点の合計が14.0を超えてはならない

小淵:持ち点4.5ということは、エース級の方々との戦いになるってことですね。ポジション争いとかレギュラー争いとか。

網本:そうです、試合に出たかったら、練習してレギュラー争いに勝ってくださいっていうことになります(笑)。

小淵:認知度とは話が変わりまして、千葉さん、NHKリポーターとしてメディアに出る機会が非常に多かったと思います。実際にその周囲の変化とかを感じる機会ってありましたか？

千葉:車いすを見て、パラリンピック前までは、保護者の方から「危ない」って、言われることがちょこちょこあったんです。保護者の方が危ないって言うのは親心なので仕方ないんですけど。それがなくなってきていて。今では、子どもが車いすに興味を持ったら、車いすに乗っている当事者の方が良ければ、触らせてもらってもいいという、距離感が一歩近づいて、理解してもらっていると感じています。子どもたちが「何、あれ！」って言って近づいてきてくれるのが嬉しいです。

また、私の周囲の人が変わったとするならば、近くに来てくれたNHKの人たちの理解が深まったと感じております。例えば、食堂で配膳係の方が、私を見つけると駆け寄って来てくださって、「運びますよ」「今日何食べるんですか」って話をしたり、コンビニでは、私は握力がちょっと弱いので、蓋を開けてくださいって、初めのうち言ってたんですけど、買っていくペースが増えるにつれ、開けておいてくれたり。



そういう部分でも車いすに対する理解が深まっているなど感じていましたし、仕事上では、トイレに時間がかかるのでそこを理解してもらって、時間の余裕を見てくださったり。途中から局内の作業にもヘルパーさんがついてくれるようになりました。

今後のパラスポーツの活動、報道について

小淵：2020 のパラリンピックが終了したところで、今後どうしていくかという話で最後まとめていければと思います。

まず鉄谷さんにお伺いします。メディアの報道に関して、この東京 2020 パラリンピック開催を経て、どのようになっていくとお考えですか。

鉄谷：東京パラリンピックの報道体制は、各社特別だったと思います。質・量ともに。これからパリに向けて、この報道量を、さっきご指摘がありましたけども、増やしていくかと言うと、なかなか難しいという印象を持っています。

ただ東京大会というのは、日本で開催したということで、いわゆる一つの国際スポーツ、総合スポーツ大会という域からはみ出て、多くの論点が論じられたと思っています。

例えば都市のバリアフリー化ですとか、障害者雇用の問題、障害者のスポーツ行政、さらにはインクルーシブ教育やダイバーシティなど、いろんな論点がスポーツをフックに語られるようになりました。

弊社でも今までパラリンピック報道って言うと、運動部または社会部が担当していたのですが、例えば政治部とか経済部とかですね、いろんな記者も参画したという印象を持っています。ですので、東京大会で、色んな所に光が当たったものを、論点を、これからも報道し続けていくことが理想ではないかと思っています。



小淵：パリ大会では、東京並みの放送量っていうのは、担保できないかなという一方で、先ほどおっしゃられた、論点が増えた、今回の東京大会をきっかけにいろんな論点で話がされた、

スポーツをフックに、というところの視点は、おそらくパリに向けても、やっぱり無くしてはいけない視点だなと個人的に感じていたというところですね。その辺は気をつけて見ていく必要がありますね。

続いて網本さんにお伺いしていければと思います。今後の障害者スポーツ、日本における障害者スポーツってどうなっていくべき、どうなって欲しいですか？

網本：パラスポーツが、障害者の方がやっているスポーツというより、いちスポーツとして皆さんに認知していただけるようになれば、東京で開催されたパラリンピックがブームでなくて文化、カルチャーになっていけるかなって思っています。

海外で生活していたこともあるんですけど、衝撃的だったのが、オーストラリア。大国って言われるだけあって、体育館一つにしても 12 面ぐらいコートが取れるんですよ。そしてこっちは車いすバスケットをやっていて、その隣のコートで小学生の子らが、そのまた隣では中学生や高校生といっ



たちょっと大きい学生の子たちがバスケットをやっていて、さらにその隣で大人が……と言うような、もうジャンルを問わずに全てのバスケットの競技をやっていたり。

そしてその隣でバレエや、また違う競技をやっているという情景を見ていると、こういう風になっていくと、スポーツというものがもっと広がっていくんだろうなと感じました。

小淵：多世代や他のジャンルのスポーツと一緒に自然に行われる。日常的にそういう環境ができてくる。カルチャーとして、障害者のスポーツもきちんと根付いていく必要があるし、東京大会を経てそういうところもどんどん進んでいってほしいという感じですね。

では続いて、山本さんにお伺いしたいと思います。今後のパラアスリートの在り方というところをお伺いできればと思います。

山本：これまでは、東京パラリンピックがあることによって、アスリートであれば報道してもらえる機会がありました。でも今後は、パラアスリートであっても報道してもらえる機会は多分ぐんと減ってくると思うんです。必要なのは、パラアスリート自身が情報源となって、何か報道の

方たちにアクションを起こすことが大切なのかなって考えています。

僕自身も、義足メーカー主催のランニングクリニックを今までずっとやってきていたんですけど、東京パラリンピックの年に限って、開催されなかったんですよ。コロナ禍ということもあって、みんなで集まってイベントやることに、企業側は消極的だったのかなと思うんですけど。僕としては、そういうイベントがやっぱりあった方がいい、義足の方たちが走れる機会っていうのを作りたいと思って、自分たちで動いて、競技用義足のランニング講習会「ブレードアスリートアカデミー」を行ったんですね。



そういうイベントを自らやることによって、報道の人たちに来てもらいました。何しろ応募者がすごく多くて。義足になって、パラリンピックを見て、自分も走りたいっていう方もいました。あとは教育関係や企業とコラボしてイベントをやったり、講演会をやったりという仕掛けをすることで、関連する報道の人たちに来てもらって、僕たちパラアスリートがやっている活動を知ってもらう、それをメディアを通して伝えてもらうっていう機会が、これからは大切なのではないでしょうか。

パラアスリート自身が何か発信源にならないと、ただのパラアスリートでは媒体に載ることは、すごく減ってくるんじゃないかな。報道量は絶対的に減っていきますので、その中で報道をしたいって思えるような選手っていうのは、いろんな話題性がある選手だと思いますので、パラアスリート自身が自覚を持ってやっていかないといけないと思いますね。

小淵:なるほどと思って伺っていたのですが、ここはあえて、鉄谷さんにお伺いします。今の山本さんの発言、つまりパラアスリート自身が発信源、情報源になってアクションしていかなければいけないという、そういったアクションがあった方が取材する側としては、取材しやすかったり、メディアに露出しやすかったりするんですか。

鉄谷:山本選手のイベントは弊社でも取り上げたんですが、ここ何年かで、世の中でのダイバーシティやインクルージョンといった価値観が、パラリンピックと関係ないところで、広がってきていると思うんです。そして、パラアスリートの方は、そうしたものの象徴になれる可能性が非常にあると思っていて、メッセージを発信できるパラアスリートの方が、企業のサポートを

得られたり、メディアにも取り上げやすいところがあると思っています。

小淵:最後に千葉さんにお伺いします。NHK のリポーターの経験を踏まえて、今後社会はどうかあるべきかということについてお伺いできますか？

千葉:違いを認め合うっていうコメントがあると思うんですけど、障害者、健常者って、人間なんですね。だから違いはないんですよ。だから私は障害者とか健常者とか、そういう言葉を無くしていく活動をしたくて。生きづらさを感じてる人たちが、生きやすい世の中に自らできたらなって思っています。



小淵:千葉さんの障害者という言葉がなくなるような活動をしていきたいということは、共生社会と繋がってくるかと思えます。ただ共生社会という言葉は、使い方に気をつけなければなりません。きちんと多様性を認め合って理解しあっていく中で、本当に生きやすい形を作っていく。そんなに簡単ではないし、いろんな人がいろんな行動を起こしながら、やっていかなきゃいけないものではないかと思っています。そういった活動もこれから期待しております。



今回色々な立場の方にご登壇いただき、さまざまな視点でお話しただけました。何かがここで決まる話ではなく、このようなシンポジウムで話されたことを、将来的に答え合わせできると面白いのではないかと思います。

これにてパネルディカッションは終了とさせていただきます。

ご清聴いただき、ありがとうございました。

シンポジウム総括

藤田 紀昭氏(日本福祉大学 スポーツ科学部教授)



パラリンピックの国内開催により、報道する側、される側、そして見る側に様々な良い影響を与えたということが、本日のシンポジウムからお分かりいただけたと思います。この国内大会での成長が継続発展していくことを願わずにはいられません。

ただ一点、これまでどちらかと言うとパラスポーツ、障害者スポーツは、甘やかされていると言ったら語弊がありますが、手厳しい報道は少なかったと思います。しかしこれから、いちスポーツとして認められていくに伴い、厳しい報道も出てくるのではないのでしょうか。選手、それから競技団体は、そういうこともきちんと認識しておく必要があると思います。

来年3月には北京で冬季パラリンピック大会が開かれます。コロナウイルスの影響は、悪いことがほとんどですけれども、一つだけ良いことがあったとすると、夏の大会が終わってから半年でまたパラリンピックが開かれるという、ワクチンではありませんが、これはかなり強烈なことではないかと思っています。日本の社会に非常に良い影響が出てくることを期待しております。

本財団では、来年3月に本日発表した内容に加えて、パラアスリートのキャリアに関するレポート等を含めた報告書を出す予定です。そちらも注目いただければ幸いです。

今後もこのパラスポーツと放送に伴う社会の変化をしっかりと記録して参りたいと思っております。今後とも皆様のご協力をいただけますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが本日視聴していただいた皆様、そしてご登壇いただいた皆様、誠にありがとうございました。



第5章

ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査

1. チャレンジ！ユニ★スポについて

「チャレンジ！ユニ★スポ」とは、“健常者と障害者の相互理解促進”や“共生社会実現への貢献”を目的に、“静岡県内の特別支援学級がある小・中学校の児童・生徒・教員”を対象に障害者スポーツ『ボッチャ』をユニバーサルなスポーツ教材と位置づけた体験授業で、当財団が(公財)静岡県障害者スポーツ協会(以下、「県協会」、当財団障害者スポーツ・プロジェクトメンバーの齊藤まゆみ氏(筑波大学体育系准教授)の協力や指導を得て2019年より実施している事業である。2019年度にケーススタディーとして開始し、2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大で継続開催が危ぶまれたものの12の小学校を対象に無事実施できた。特に感染症対策については、県からのガイドラインを基本に、県協会、講師担当の障がい者スポーツ指導員や開催校の教員から提示された現場視点での感染防止のアイデアを順次取り入れた。そして児童と教員を対象とした意識調査も実施することができ、ボッチャ体験を通じた障害者への理解促進やスポーツが苦手な人に対する有用性などが確認できた。一方で、教員からは、出前形式の体験会であれば実施できるが、自前では難しいという回答が多くみられ、その理由として「用具がない」「予算がない」「専門の知識がない」ことが指摘された。そこで、一連の取り組みを一過性のイベントとしないために、今年度は、体験会終了後にボッチャセットを各校に寄贈することとし、阻害要因の1つをクリアすることでどのような成果があるのかを追跡調査することになっている。

本事業は、今年度も県協会の多大な協力を得て実施した。また、開催にあたって多岐にわたりご協力をいただいた静岡県、静岡県障害者スポーツ指導者協議会および指導員の皆様、当財団障害者スポーツ・プロジェクトメンバー、そして本活動にご理解ご協力いただいた静岡県内の学校関係者の皆様にお礼申し上げたい。

2. プログラムの特徴

本事業ではボッチャ体験会に加え、①障害者スポーツに関する知識の提供(学習機会)、②スポーツが苦手な人に対するスポーツの有用性、価値への理解浸透、意識変革、③スポーツ普及を通じた障害者への理解促進、偏見などの減少、④社会的価値の醸成(学術的価値)を有するプログラムとしている。2019年度は、静岡県内の小・中学校から全15校、約1200名の児童・生徒および教員が参加した。さらに、2020年度は全12校、約860名の児童・生徒および教員が参加した(図表5-1)。

図表 5-1 2020 年度 ユニ★スポ活動結果

| | 日程 | 学校名 | 参加者数 | | | | |
|----|-----------|-------------|------|-----|---------------------|----|-----|
| | | | 健常者 | 障害者 | 児童生徒 (特別支援対象児含む) | 教員 | 合計 |
| 1 | 9月3日(木) | 袋井市立袋井西小学校 | 70 | 6 | 76 | 3 | 79 |
| 2 | 9月8日(火) | 菊川市立河城小学校 | 35 | 2 | 37 | 4 | 41 |
| 3 | 9月30日(水) | 伊東市立東小学校 | 29 | 11 | 40 | 5 | 45 |
| 5 | 10月14日(水) | 磐田市立磐田西小学校 | 90 | 5 | 95 | 5 | 100 |
| 6 | 10月20日(火) | 磐田市立豊田東小学校 | 73 | 2 | 75 | 2 | 77 |
| 7 | 10月27日(火) | 袋井市立山名小学校 | 136 | 9 | 145 | 4 | 149 |
| 4 | 11月4日(水) | 掛川市立中小学校 | 22 | 0 | 22 | 2 | 24 |
| 8 | 11月10日(火) | 浜松市立笠井小学校 | 79 | 2 | 81 | 3 | 84 |
| 9 | 11月12日(木) | 御殿場市立朝日小学校 | 76 | 2 | 78 | 4 | 82 |
| 10 | 11月13日(金) | 静岡市立由比小学校 | 43 | 0 | 43 | 4 | 47 |
| 11 | 12月4日(金) | 浜松市立追分小学校 | 24 | 30 | 54 | 8 | 62 |
| 12 | 12月18日(金) | 伊豆の国市立大仁小学校 | 67 | 1 | 68 | 3 | 71 |
| 合計 | | | 744 | 70 | 814 | 47 | 861 |

3. 目的

本調査は、2020 年度より順次施行される新しい学習指導要領の理念を実現し、スポーツを通じた共生社会実現に寄与する教育内容検討のための基礎資料を得ることを目的とした。新しい学習指導要領にはパラリンピック教育が明示され、児童生徒の意識のみならず多様な行動変容につながるような教育の推進が期待される。そこで「チャレンジ！ユニ★スポ」の教育内容で子どもたちの意識や行動がどのように変容するのかを、アダプテッド・センシティブ尺度(齊藤ら,2021)を用いて調査した。

4. 2020年度の児童を対象とした調査（調査1）

2020年度の対象校において、事前学習（座学）とポッチャ（体験）を通して、子どもたちの障害や障害者スポーツ等に関する意識や視点がどのように変化するかを研究仮説にもとづいて分析した。

調査の手続きとして、まず、参加校において説明と依頼をし、承諾を得た。次に事前学習前の意識調査（アンケート1）を実施した。事前調査実施後に各校において座学での授業を事前学習として実施した。その後ポッチャを教材とした体験学習を実施し、体験学習終了時に意識調査（アンケート2）を行った。さらに、体験学習の数か月経過後に意識調査（アンケート3）を実施し、全体の傾向と学校別の分析およびフィードバックを実施した。



2020年度の児童を対象とした調査の流れ

4.1. 対象者

「チャレンジ！ユニ★スポ」に応募し、調査協力の同意を得た静岡県内 12 校の児童生徒 814 名が調査対象である。

4.2. アンケート調査

アンケートは、「事前学習前（アンケート1）」用、「体験会参加直後（アンケート2）」用、「体験会から2～3か月経過後（アンケート3）」用の3種類であるが、いずれも共通する調査項目を設定している（図表5-2）。同一対象者へ期間中に3回の回答を依頼した（調査用紙は巻末資料参照）。

アンケート実施にあたっては、以下について補足説明を加えた。

- ・アンケートへの協力は強制でなく任意である。
- ・回答者コードは、外部には回答者を特定できない配慮を加えた個別識別コード設定となっ

ており、児童自身で設定する仕組みである。記入は児童の意思を尊重するが、可能な範囲で協力して欲しい。

- ・調査結果発表時に回答者個人を特定する情報は一切含まれない。
- ・「必ず3つ選んでください」と指示している一部の設問では、児童からの質問が想定される。例えば、「2つしか該当項目がない。全てが当てはまる。どれも当てはまらない」などである。その場合は「自分の気持ちに近い順に上から3つ選んで○を」という回答を教師に依頼した。

図表 5-2 調査項目と実施時期

| 質問項目 | 事前 | 直後 | 数か月後 |
|----------------------------|----|----|------|
| 障害のある人との距離感 | ○ | ○ | ○ |
| 東京 2020 オリンピック・パラリンピックへの興味 | ○ | | |
| 知っている障害者スポーツ種目 | ○ | | |
| ボッチャの感想 | | ○ | |
| 障害イメージ | ○ | ○ | ○ |
| 障害者スポーツイメージ | ○ | ○ | ○ |
| アダプテッドの考え方 | ○ | ○ | ○ |
| アダプテッドの実践力 | ○ | ○ | ○ |

○は実施項目

4.3. 事前学習

事前学習は、国際パラリンピック委員会の公認教材である『I'm POSSIBLE(アムポッシブル)』を用いた。教材についてはスライド、ワークシート、動画を提供し、協力校に実施を依頼した。なお、教材はいずれも TOKYO 2020 for KIDS ウェブサイト (<https://education.tokyo2020.org/jp/>) の東京 2020 教育プログラムからダウンロード可能であった(図表 5-3・4)。

図表 5-3 事前学習で使用したスライド

①「パラリンピックってなんだろう」(必須)

②「ボッチャをやってみよう」(必須)

P13 までを座学にて依頼 P14 以降は体験会にて説明

③「公平について考えてみよう」(任意)

④「東京 2020 パラリンピックを楽しもう」(任意)

図表 5-4 事前学習で使用したスライド

- ①「リオ 2016 パラリンピックダイジェスト(3分 34秒)」(必須)
- ②「ボッチャ競技説明(2分 34秒)」(任意)
- ③「ボッチャをやってみよう(5分 10秒)」(必須)
- ④「(教師用)ボッチャ授業の進め方(4分 53秒)」(参考)

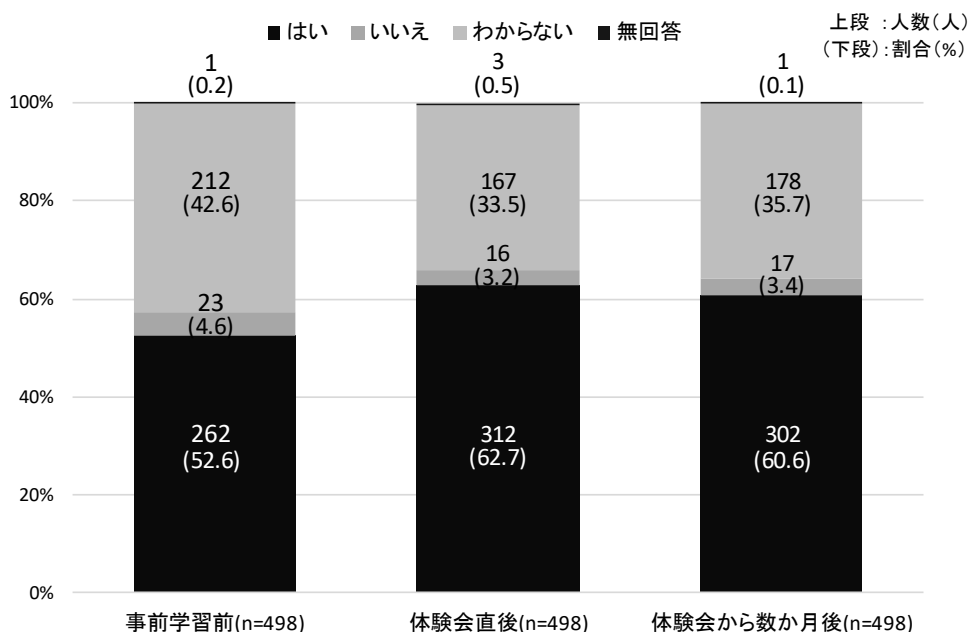
4.4. 結果の概要

期間中に実施した3回のアンケートから、回答者コードで紐づけられた 498 組のデータを分析対象とした。結果の概要は以下の通りである。

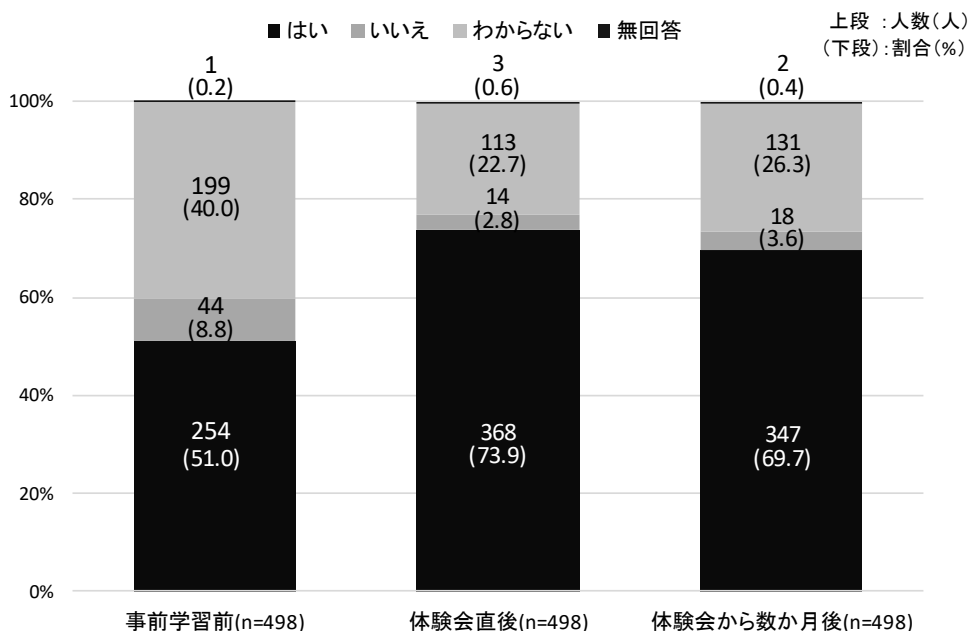
4.4.1. 障害のある人との距離感

ここでは「障害のある人と仲良くできる?」「障害のある人と一緒にスポーツできる?」「一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう?」という 3 つの質問に「はい」「いいえ」「わからない」で回答してもらった。図表 5-5~7 はその結果を示したものである。

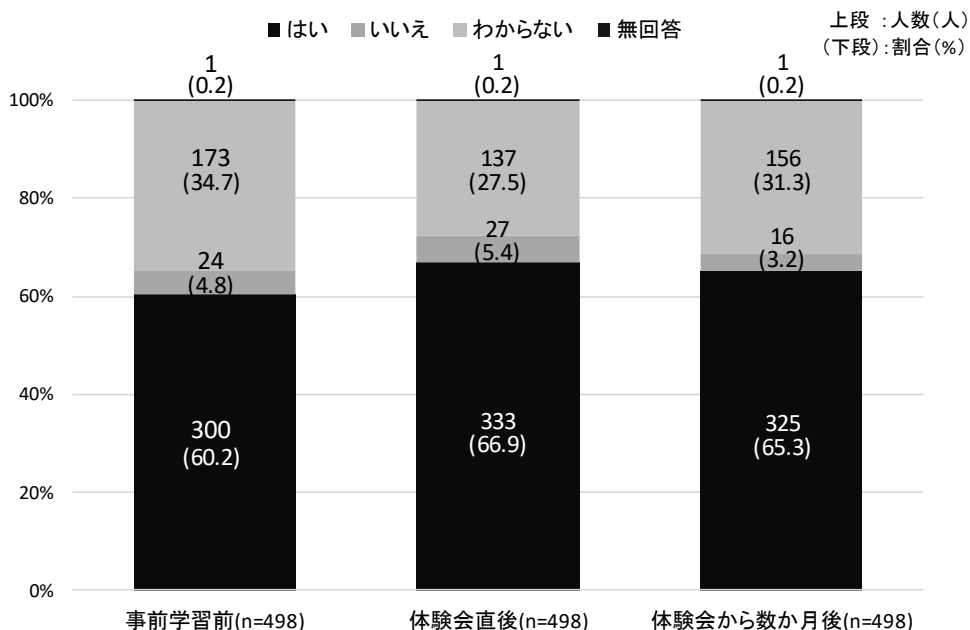
図表 5-5 障害のある人と仲良くできる?(小学校)



図表 5-6 障害のある人と一緒にスポーツできる？(小学校)



図表 5-7 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？(小学校)



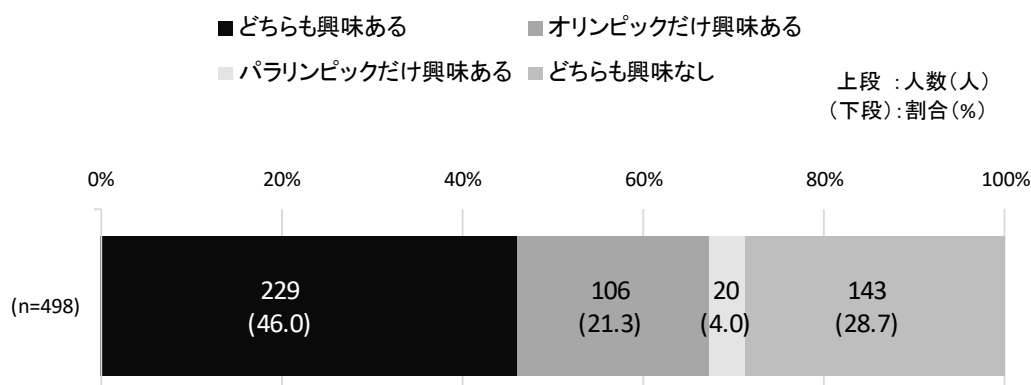
いずれの項目も、実施前よりも実施後に「はい」の回答割合が増え、一定期間を経過してもその意識が定着していることが示された。回答に変化を示したのは、「わからない」と回答していた児童生徒であり、事前学習とボッチャというスポーツの体験をすることで障害のある人との具体的な関わり方のイメージが持てるようになったと考えられる。また、「いいえ」という回答も一定の割合で存在することが示された。

4.4.2. 東京 2020 オリンピック・パラリンピックへの興味

東京 2020 オリンピック・パラリンピックへの興味について、「どちらも興味がある」「オリンピックだけ興味がある」「パラリンピックだけ興味がある」「どちらも興味なし」からの選択回答とした。

「どちらも興味がある」が 46.0%で最も多く、次いで「オリンピックだけ興味がある」21.3%、「パラリンピックだけ興味がある」4.0%であるが、「どちらにも興味なし」が 28.7%であり、2019 年度の調査(「どちらにも興味なし」,23.6%)よりも高い割合が示された(図表 5-8)。

図表 5-8【事前学習前】東京 2020 オリンピック・パラリンピックに興味ありますか



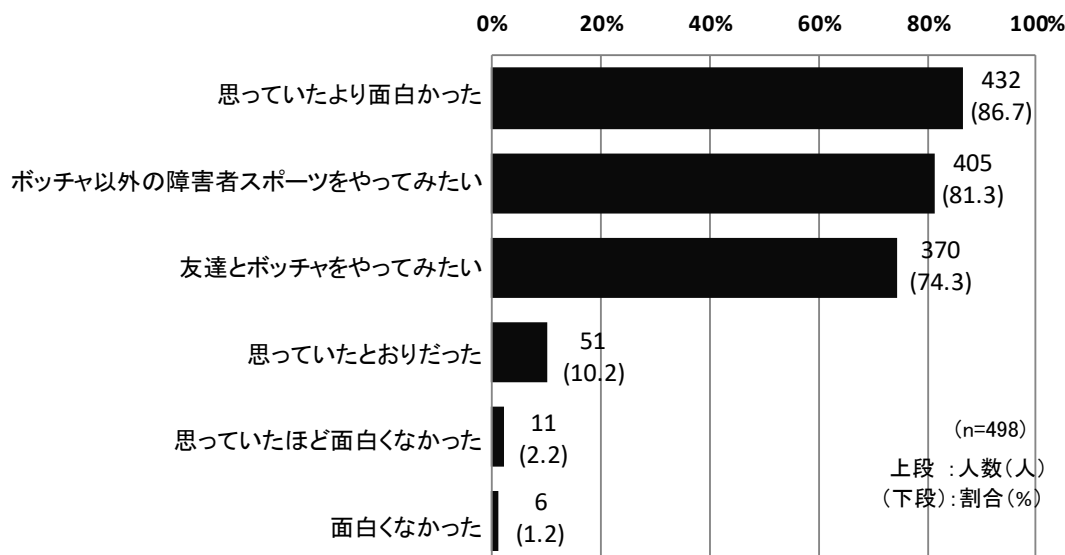
4.4.3. ボッチャの感想

体験会直後の感想として、思っていたより面白かった、思っていた通りだった、思っていたほど面白くなかった、面白くなかったという面白さを問う選択肢と「友達とボッチャをやってみたい」「ボッチャ以外の障害者スポーツをやってみたい」という興味の広がりについての選択肢を設定した。

複数回答の結果、思っていたより面白かった(全体 432 件,86.7%)が最も多く、次いでボッチャ以外の障害者スポーツをやってみたい(405 件,81.3%)、友達とボッチャをやってみたい(370 件,74.3%)であり、やってみたいという割合は 2019 年度よりも高かった。これらのことから、事前学習と体験会を通してボッチャの魅力を伝えることができたと推察されるが、実際に行動を促す結果に繋がったかについての検証ができていない。その後児童生徒が実際にボッチャを実施した、ボッチャ以外のスポーツについて自ら調べた、ボッチャ以外の

スポーツを実施した等の行動変容が生じたかについて追跡調査ができれば興味深い(図表5-9)。

図表5-9 ポッチャの感想であなたの気持ちに近いもの



4.4.4. 障害者イメージ

障害者に対してどのようなイメージを持っているかを把握するために、「障害」から連想する用語として「困っている、個性的、手伝いが必要、不便なことがある、その人らしさ、リハビリ、自由に動けない、できることがある、車いす」の選択肢から3つを選択してもらい、3回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。数値はポジティブなイメージが高い方から3,2,1,0となる。その結果、事前学習前(0.46±0.72)に比べ体験会直後(0.77±0.90)にポジティブなイメージ変化があり、その傾向が数か月後(0.76±0.90)まで継続することが示された(図表5-10)。

4.4.5. 障害者スポーツイメージ

障害者スポーツから連想するイメージについて、「楽しそう、大変そう、チャレンジしてみたい、不便、激しい、障害者のためのもの」という選択肢より3つを選択してもらい、3回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。数値はポジティブなイメージが高い方から3,2,1,0となる。その結果、事前学習前(1.42±0.76)に比べ体験会直後(1.62±0.69)にポジティブなイメージ変化があり、その傾向が数か月後(1.64±0.72)まで継続することが示された(図表5-10)。

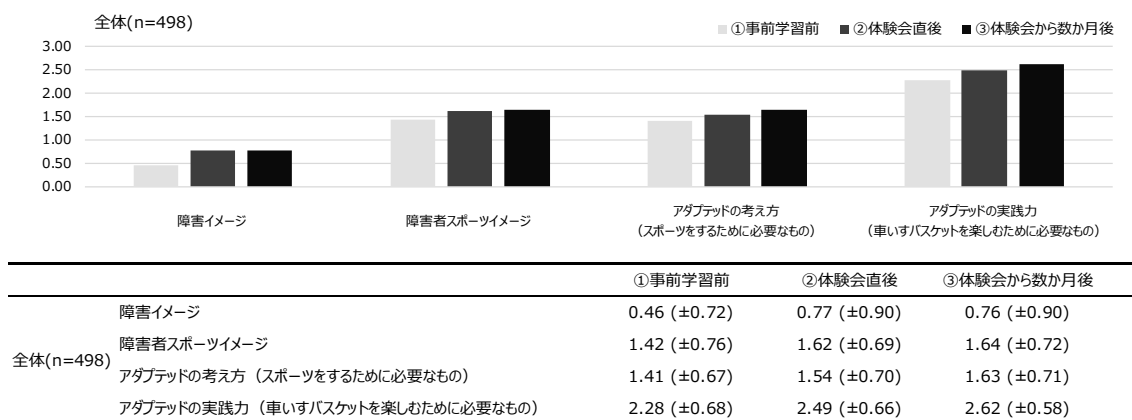
4.4.6. アダプテッドの考え方

障害のある友達とスポーツをするために必要なものとして、「障害者スポーツに詳しい先生やコーチ、スポーツのルールを変えること、障害者スポーツの本や資料、障害のある友達と相談すること、障害者スポーツ専用の道具や場所、サポートすること」という選択肢より 3 つを選択してもらい、3 回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。自らが主体的に関わっていこうとする意識をアダプテッドの自発性と捉え、数値は自発性が高い方から 3,2,1,0 となる。その結果、事前学習前(1.41±0.67)、体験会直後(1.54±0.70)、数か月後(1.63±0.71)と高まる傾向を示した(図表 5-10)。

4.4.7. アダプテッドの実践力

障害のある友だちとスポーツを楽しむために必要だと思うことを、体育授業での場面設定をもとに「友だちがうまくなるように練習をがんばってもらう、友だちも楽しめるようにルールを変える、あまりボールを渡さないようにしてあげる、みんなが車いすに乗って車いすバスケットボールをする、無理をさせず得点係や応援で頑張ってもらう、ボールを使いやすいものに変える」という選択肢から 3 つを選んでもらい、3 回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。一緒に楽しむための配慮や工夫を必要な場面で適用しようとする意識をアダプテッドの適用度と捉え、数値は適用度が高い方から 3,2,1,0 となる。その結果、事前学習前(2.28±0.68)、体験会直後(2.49±0.66)、数か月後(2.62±0.58)であった(図表 5-10)。

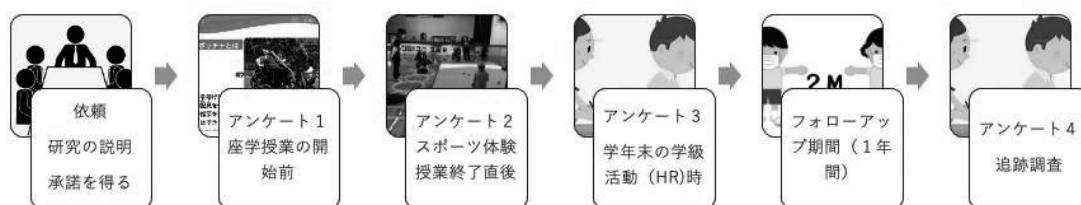
図表 5-10



一連の学習内容が、児童の障害イメージをポジティブな方向に変容させることが示された。また、障害のある友だちとスポーツをするために自ら主体的に関わっていこうとする意識の醸成や必要な場面でアダプテッドを適用しようとする意識があることも明らかとなった。以上のことから、ユニバーサル・スポーツを教材とした体験会を軸とする教育内容は、児童生徒の意識変化に影響すると考えられた。

5. 2019 年度参加児童における1年後の追跡調査（調査2）

2019 年度の対象校のうち、当時4年生が対象となっていた学校に対し、2021 年度の 6 年生を対象に追跡調査の依頼をした。4年生で体験会に参加した児童の1年経過後の意識と行動変容に関する調査である。



調査2の流れ

5.1. アンケート調査結果

体験授業と4回すべての調査に参加した 319 名の回答を分析対象とした。

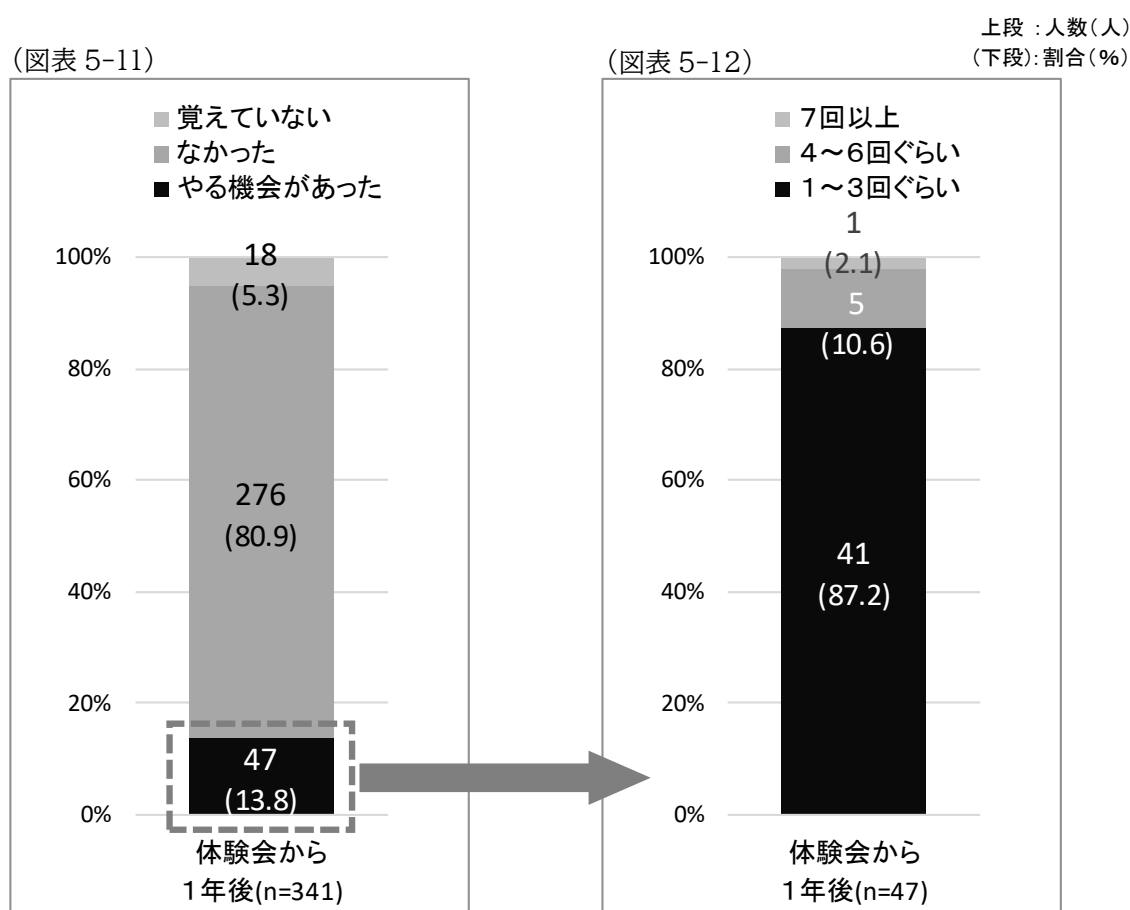
5.2. 1年後の調査結果概要

5.2.1. ボッチャをする機会

ユニ★スポ体験学習のあとに、ボッチャ体験をする機会があったかどうかについて「やる機会があった」「なかった」「覚えていない」より回答してもらった(図表5-11)。また、実際の実施状況についてもあわせて回答してもらったところ、1~3回が87%以上となっており、日常的に実施できる環境ではないことが示された。図5-12はその結果を示したものである。

図表 5-11【体験会から1年後】ボッチャ体験会のあと、ボッチャをやる機会があったか

図表 5-12【体験会から1年後】やる機会があった人は、何回ぐらいいましたか

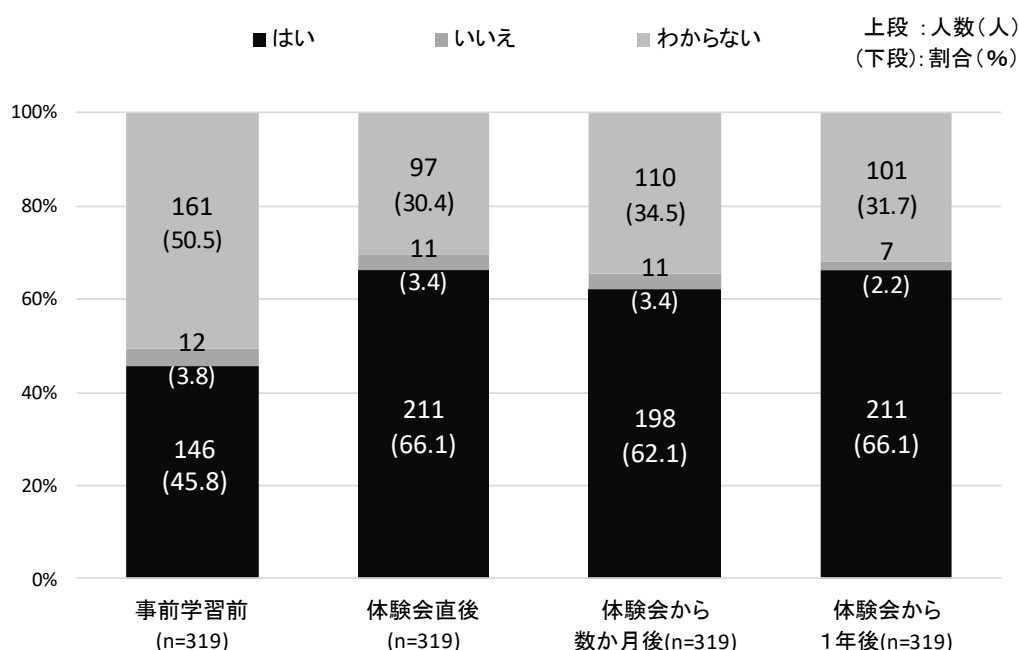


5.2.2. 障害のある人との距離感

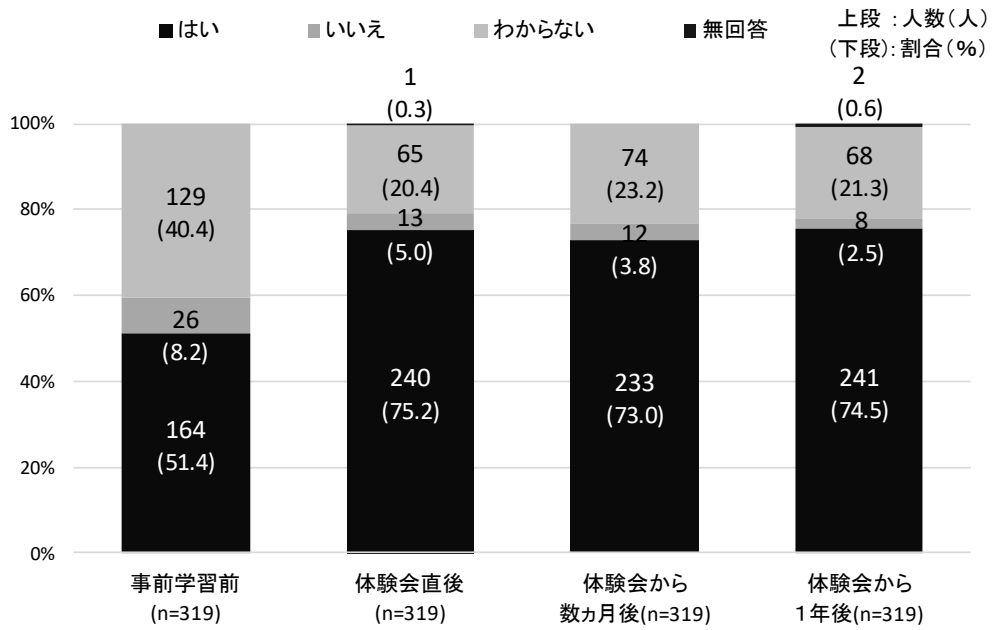
2019年度に実施したのと同じ項目である「障害のある人と仲良くできる?」「障害のある人と一緒にスポーツできる?」「一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう?」という3つの質問に「はい」「いいえ」「わからない」で回答してもらった。図表5-13~15はその結果を示したものである。

いずれの項目とも、体験会から数か月後の状態が維持されていることが確認できた。次にポッチャをする機会の有無で比較したところ、経験ありの方が「はい」と答える割合が高いことが示された。つまり、ユニ★スポ体験学習がその後の児童の意識や行動変容に影響を与えていることが示唆された。

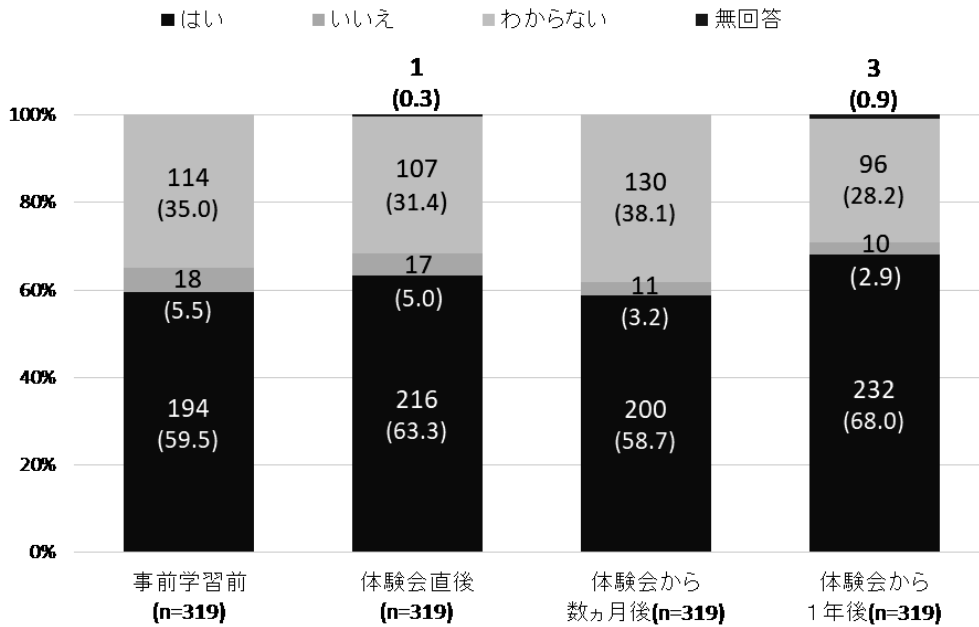
図表 5-13 障害のある人と仲良くできる?



図表 5-14 障害のある人と一緒にスポーツできる？



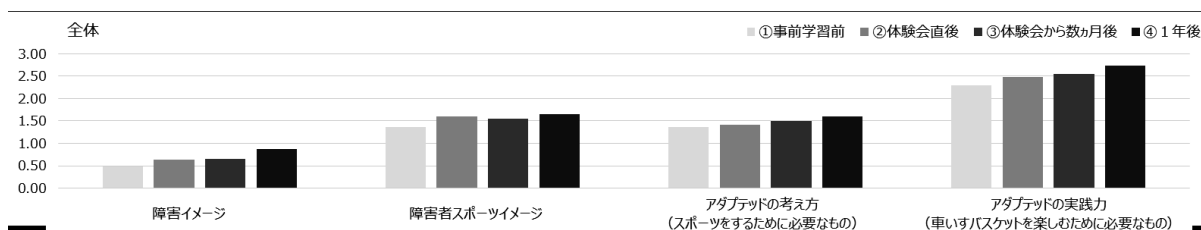
図表 5-15 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？



5.2.3. 教育効果の検証

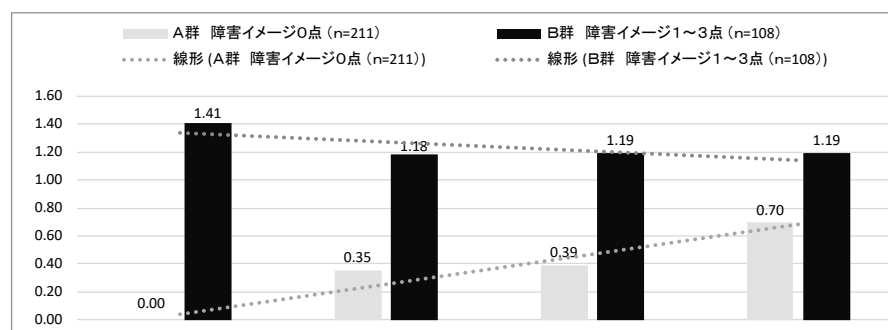
図5-16は、それぞれの得点をグラフ化したものである。1年後の追跡調査において、障害イメージ、障害者スポーツイメージ、アダプテッドの考え方、アダプテッドの実践力のいずれにおいても、スコアが高く保たれていることが示された。

図表 5-16 イメージスコア(全体)



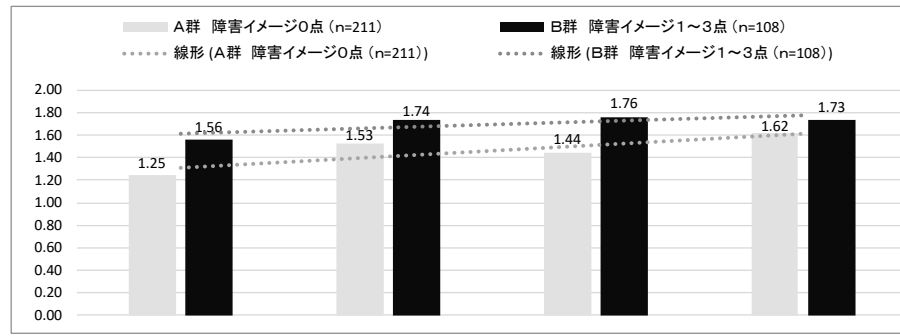
次に事前授業前の障害イメージスコアが0であった211名をA群、1～3であった108名をB群として各スコアを比較したところ、A群は障害イメージ、障害者スポーツイメージ、アダプテッドの考え方、アダプテッドの実践力のいずれにおいても1年経過後の追跡調査までのスコアが上昇傾向であったが、スコアそのものは、障害イメージと障害者スポーツイメージでは依然B群の方が高い数値であった。また、B群はアダプテッドの考え方とアダプテッドの実践力のスコアが上昇傾向であることが示された。これらのことから、ユニ★スポ体験学習は、事前学習前に抱いていた障害イメージがネガティブな児童にとっては、その意識変容の契機となること、その他の児童にとっては、アダプテッドの考え方や実践力を高める具体的な知識や方法を学ぶ契機となったことが伺えた。(図表5-17～20)

図表 5-17 障害イメージ



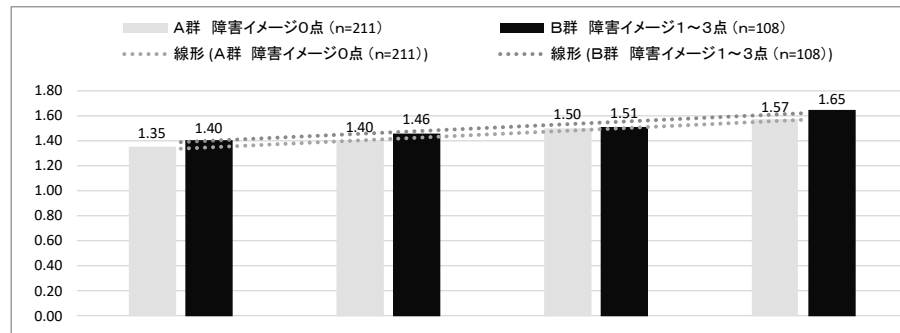
| | ①事前学習前 | ②体験会直後 | ③体験会から数か月後 | ④1年後 |
|-----------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 障害イメージ | | | | |
| 全体 (n=319) | 0.48 (±0.76) | 0.63 (±0.87) | 0.66 (±0.84) | 0.87 (±0.96) |
| A群 障害イメージ0点 (n=211) | 0.00 (±0.00) | 0.35 (±0.62) | 0.39 (±0.62) | 0.70 (±0.84) |
| B群 障害イメージ1～3点 (n=108) | 1.41 (±0.64) | 1.18 (±1.01) | 1.19 (±0.96) | 1.19 (±1.08) |

図表 5-18 障害者スポーツイメージ



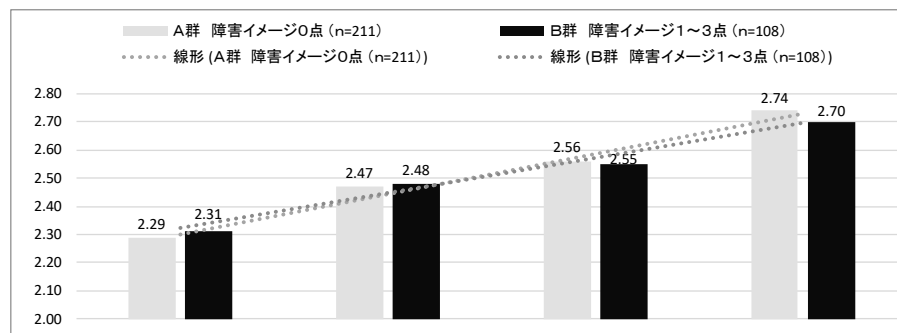
| 障害イメージ | ①事前学習前 | ②体験会直後 | ③体験会から数か月後 | ④1年後 |
|-----------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 全体 (n=319) | 1.36 (±0.76) | 1.60 (±0.74) | 1.55 (±0.75) | 1.66 (±0.70) |
| A群 障害イメージ0点 (n=211) | 1.25 (±0.76) | 1.53 (±0.77) | 1.44 (±0.75) | 1.62 (±0.72) |
| B群 障害イメージ1~3点 (n=108) | 1.56 (±0.72) | 1.74 (±0.64) | 1.76 (±0.69) | 1.73 (±0.66) |

図表 5-19 アダプテッドの考え方(スポーツをするために必要なもの)



| 障害イメージ | ①事前学習前 | ②体験会直後 | ③体験会から数か月後 | ④1年後 |
|-----------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 全体 (n=319) | 1.37 (±0.62) | 1.42 (±0.67) | 1.50 (±0.68) | 1.60 (±0.74) |
| A群 障害イメージ0点 (n=211) | 1.35 (±0.62) | 1.40 (±0.66) | 1.50 (±0.68) | 1.57 (±0.75) |
| B群 障害イメージ1~3点 (n=108) | 1.40 (±0.64) | 1.46 (±0.69) | 1.51 (±0.67) | 1.65 (±0.74) |

図表 5-20 アダプテッドの実践力(車いすバスケットを楽しむために必要なもの)



| | ①事前学習前 | ②体験会直後 | ③体験会から数ヵ月後 | ④1年後 |
|-----------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 障害イメージ | | | | |
| 全体 (n=319) | 2.29 (±0.72) | 2.48 (±0.70) | 2.55 (±0.64) | 2.73 (±0.52) |
| A群 障害イメージ0点 (n=211) | 2.29 (±0.72) | 2.47 (±0.71) | 2.56 (±0.63) | 2.74 (±0.50) |
| B群 障害イメージ1～3点 (n=108) | 2.31 (±0.71) | 2.48 (±0.67) | 2.55 (±0.66) | 2.70 (±0.57) |

5. 2. 4. 今後の課題

本調査を実施するにあたっては学校関係者の協力が不可欠である。事前学習では、教師が配布された教材をもとに展開することから教師の教材観や扱い方も重要な要素である。1年後の追跡調査からは、継続して実施することで児童の障害イメージやアダプテッドへの意識が定着することも示唆された。そのためには年間計画に組み込まれていくことが必要であり、障害者スポーツ指導員による「出前授業・出前講座」から各校の教員による「自前授業・自前体験会」が展開できるよう、教員対象の研修も同時に進めていくことが求められる。

また、前回指摘された課題として、用具不足や予算の問題が継続に対する阻害要因として示されたことから、今年度は体験会後に当該校へ用具を提供することとし、その後の変化を追跡調査していくことになっている。

6.まとめ

本調査からは前年度と同様に、事前学習、体験、振り返りという一連の学習内容が児童の障害イメージをポジティブな方向に変容させることが示された。さらに、1年後の追跡調査からも児童の障害イメージやアダプテッドへの意識が定着することが示唆された。

チャレンジ！ユニ★スポで実施しているボッチャを教材とした授業が、スポーツを通じた共生社会の実現という教育目標に合致し、児童生徒の意識変容を促進する可能性も示唆された。

本調査にご協力いただいた児童生徒の皆さん、事業の実施にご協力いただいた学校関係者ならびに、静岡県障害者スポーツ協会にお礼申し上げます。

(齊藤まゆみ)

■児童の感想

2021年度開催校より児童の感想文をいただいたので、いくつか紹介させていただきます。

(ケガした友達と一緒に体験できた)

- ・ ぼくは、手首のほねをおってしまっていたので、できるか心配だったけど、右手だけでできたのでボッチャはしょうがいがあるひとでもできるスポーツだということが分かりました。そして右手だけでも大かつやくできたのかなと思います。
- ・ ぼくのチームに「こっせつ」した友達がありました。でもその子はふつうにできていてすごいなと思いました。重たいけがをしているのにもかかわらずやっていて、だいじょうぶかなという気持ちもありました。しょうがいをもっているひとでも楽しくできることが分かりました。
- ・ ぼくはボッチャをやるときに、右足をけがしていました。ぼくは走るのはむずかしいけど、歩くのならできるのでみんなのように楽しく遊べたと思います。ボッチャはどこかしょう害があっても楽しめるものなんだと思いました。

(ボッチャのボールって…)

- ・ ボールをもってみたら重くてびっくりしました。ボールのなかは米やいろいろなもので作っているのをしったので、家で作ってやってみたらできました。
- ・ 私はパラリンピックのときにボッチャを知りました。家のボールをつかってボッチャをやっていたのですが、本物のボールを使ってやったのは初めてです。ボッチャのボールがあんなに重いなんて知らなかったし、いろいろな投げ方があるのも知りませんでした。
- ・ わたしは、もともとボッチャが好きで、家で新聞紙を色付きのガムテープで丸めて遊んでいます。

(手加減はいらない)

- ・ ボッチャは想ぞうしていたよりもとても楽しかったです。ボッチャは手加げんなしでできるスポーツだから思うぞんぶん楽しめました。
- ・ ぼくはボッチャを始めてやりました。だれでも同じように手加げんなしでできるので、もっといろんな人といっしょにやりたいです。みんなと楽しんでいたら、あつというまに時間がたってしまうほど、何回もやりたくなります。

- ・ パラリンピックを見てきょう見を持っていました。みんなで手かげんせずにたたかいました。だれとでのできるスポーツと言うことが分かりました。

(ボッチャをやってみて…)

- ・ ボッチャは思っていたのと違いました。なげ方が自由というのがみんながいっしょに出来る原点だと思いました。
- ・ さいしょのボッチャのイメージは「しょうがい者だけが楽しめるしょうがい者向けのかんたんなあそび」というイメージがとても強かったです。でも、じっさいにやってみて「みんなで楽しめる盛り上がる楽しいスポーツ」だとあらためて分かりました。
- ・ ボッチャをやって楽しくうれしかったことがあります。みんなからおうえんされているということです。わたしが立ち上がるとみんなが「がんばってー」や「いけるよー」とおうえんしてくれたのです。ボッチャは一人一人のきずなを深めることのできる競技だと思いました。
- ・ せっせんになっていいしあいが出来ました。一人一人自分の考えをもってしあいができたので、より楽しくなりました。しあいがもり上がってくると、どちらのチームも仲間も応援できました。一人一人のみんなの気持ちが一つになったからだと私は思います。

■展開事例の紹介

静岡市立清水江尻小学校 「地域のお年寄りと一緒にポッチャを楽しむ交流会」の開催

12月15日(水)、静岡市立清水江尻小学校では「地域のお年寄りと一緒にポッチャを楽しむ交流会」が開催された。これは、10月開催した「チャレンジ！ユニ★スポ」ポッチャ体験会のあと、その楽しかった体験をもとに4年生担任の松岡先生が「みんな、このあとどうしていきたい？」と児童に投げかけたことから始まる。児童からは「もっとやりたい」「いろんな人に知って欲しい」「いろんな人とやれるスポーツなのでいろんな人ともやってみたい」などの意見が出た。「いろんな人ってだーれ？」と尋ねると、家族、障害者、お年寄り、低学年などの意見があがり、まず1, 2, 3年生と一緒にやる体験会を開催。続いて「近くにいるおじいちゃん、おばあちゃんたち。」と話が膨らんでいき、今回の交流会につながったということである。

まず、用具であるポッチャボールが無いのだが、これは「チャレンジ！ユニ★スポ」で提供した「ポッチャボールの作り方」を参考として、児童がそれぞれに手作りでボールを作成。また参加者集めにあたっては、児童が手作りでポッチャ交流会の案内チラシを作成し、近くのシニアクラブやデイサービスなどに案内されている。当日は体育館に約40名のお年寄りが参加された。児童は受付でチーム分けされた名札を参加者の皆さんに配布、押し車のお年寄りへは、児童が寄り添いながら会場に案内していた。

進行プログラムは「チャレンジ！ユニ★スポ」で体験したことを基に、児童がそれぞれの役割分担を決めて作っていったとの事である。最初に「私たちは授業でポッチャを知って、もっといろんな人に知って欲しいから体験会を開くことにしました。」「ポッチャは年齢、障害に関係なく楽しめるスポーツです」としっかり開催趣旨を説明。小学校では運動前に必ずおこなう準備体操についても、参加されたお年寄り(みんなイスに座っている)の事を考えて、「座ったままでいいです」と説明が入り、首回しなどお年寄りでも負担の無い内容で実施したのち早速各コートに分かれて体験会を開始した。

各コートでは児童が指導役となって、ルールや投げ方、点数の数え方を説明。ボールが手作りの為、思い通りに転がらない事もあってか、歓声やため息が入り交じりながらゲームを進めていった。驚いたのは、視覚障害者を想定しての投球まで実施したことである。おじいちゃんおばあちゃんには目をつぶってもらい、狙いのジャックボールの位置から児童が拍手で音をだして投げてもらおう模擬体験である。これも自分たちの体験をもとに組み上げた進行であるが、そこまで行うとは思っていなかったのが非常に嬉しく感じた。

体験会終了後には、児童がお年寄り一人一人のそばに寄り添い、個々に感想を聞いてい

た。参加されたおじいちゃんおばあちゃんに対して、「しっかり伝える」、「耳を傾ける」、「一緒に楽しむ」、が盛り込まれた交流会となっていることを感じた。

ユニバーサルなスポーツ教材として実施した「チャレンジ！ユニ★スポ」が、先生のリードや児童のいろんなアイデアで応用展開され、意識や行動を変化させるきっかけとなること、そして地域交流や相互理解につながっていく事は当プログラムの願うところである。（大庭義隆）



ポッチャとルールの説明。



ボールは数が無いので手作り。



やり方は、各コートで児童が直接伝える。



手押し車の人にも「あそこが狙い目」とアドバイス。



目をつぶってもらい、拍手の方向に投げてもらおう。



最後にお年寄りの横について、「どうだった？」と感想を聞く。

附録 1

パラリンピアンに対する社会的認知度調査 調査票

Q1.あなたは、以下に示す人物について知っていますか。

| | 1 知っている | 2 聞いたことがある | 3 知らない |
|--------------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1. 池 透暢 (いけ ゆきのぶ) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 2. 池崎 大輔 (いけざき だいすけ) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 3. 伊藤 智也 (いとう ともや) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 4. 岩渕 幸洋 (いわぶち こうよう) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 5. 上与那原 寛和 (うえよなばる ひろかず) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 6. 浦田 理恵 (うらた りえ) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 7. 岡崎 愛子 (おかざき あいこ) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 8. 上地 結衣 (かみじ ゆい) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 9. 唐澤 剣也 (からさわ けんや) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 10. 川村 怜 (かわむら りょう) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 11. 木村 敬一 (きむら けいいち) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 12. 木村 潤平 (きむら じゅんぺい) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 13. 国枝 慎吾 (くにえだ しんご) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 14. 倉橋 香衣 (くらはし かえ) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 15. 香西 宏昭 (こうざい ひろあき) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 16. 佐藤 友祈 (さとう ともき) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 17. 里見 紗李奈 (さとみ さりな) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 18. 島川 慎一 (しまかわ しんいち) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 19. 杉浦 佳子 (すぎうら けいこ) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 20. 杉村 英孝 (すぎむら ひでたか) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 21. 鈴木 孝幸 (すずき たかゆき) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 22. 鈴木 徹 (すずき とおる) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 23. 瀬立 モニカ (せりゆう もにか) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 24. 谷真 海 (たに まみ) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 25. 鳥海 連志 (ちょうかい れんし) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 26. 土田 和歌子 (つちだ わかこ) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 27. 富田 宇宙 (とみた うちゅう) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 28. 豊島 英 (とよしま あきら) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 29. 中西 麻耶 (なかにし まや) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 30. 中村 智太郎 (なかむら ともたろう) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 31. 日向 楓 (ひなた かえで) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 32. 廣瀬 隆喜 (ひろせ たかゆき) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 33. 藤井 友里子 (ふじい ゆりこ) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 34. 藤澤 潔 (ふじさわ きよし) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 35. 藤田 征樹 (ふじた まさき) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 36. 藤本 怜央 (ふじもと れお) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 37. 堀越 信司 (ほりこし ただし) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 38. 道下 美里 (みちした みさと) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 39. 宮島 徹也 (みやじま てつや) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 40. 村岡 桃佳 (むらおか ももか) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 41. 山口 尚秀 (やまぐち なおひで) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 42. 山田 拓朗 (やまだ たくろう) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 43. 山田 美幸 (やまだ みゆき) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 44. 山本 篤 (やまもと あつし) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 45. 和田 伸也 (わだ しんや) | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |

Q2.Q1 であげた人は、2021 年に開催された東京パラリンピックに出場した選手です。「知っている」「聞いたことがある」と回答された選手の実施競技についてお答えください。

| | 1 アーチェリー | 2 車いすラグビー | 3 カヌー | 4 車いすフェンシング | 5 車いすテニス | 6 車いすバスケットボール | 7 ゴールボール | 8 5人制サッカー | 9 シットティングバレーボール | 10 自転車競技（ロード、トラック） | 11 柔道 | 12 水泳 |
|--------------------------|-------------|--------------|----------|----------------|-------------|------------------|-------------|--------------|--------------------|-----------------------|----------|----------|
| 1. 池 透暢 (いけ ゆきのぶ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 2. 池崎 大輔 (いけざき だいすけ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 3. 伊藤 智也 (いとう ともや) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 4. 岩淵 幸洋 (いわぶち こうよう) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 5. 上与那原 寛和 (うえよなばる ひろかず) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 6. 浦田 理恵 (うらた りえ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 7. 岡崎 愛子 (おかざき あいこ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 8. 上地 結衣 (かみじ ゆい) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 9. 唐澤 剣也 (からさわ けんや) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 10. 川村 怜 (かわむら りょう) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 11. 木村 敬一 (きむら けいいち) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 12. 木村 潤平 (きむら じゅんぺい) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 13. 国枝 慎吾 (くにえだ しんご) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 14. 倉橋 香衣 (くらはし かえ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 15. 香西 宏昭 (こうざい ひろあき) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 16. 佐藤 友祈 (さとう ともき) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 17. 里見 紗李奈 (さとみ さりな) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 18. 島川 慎一 (しまかわ しんいち) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 19. 杉浦 佳子 (すぎうら けいこ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 20. 杉村 英孝 (すぎむら ひでたか) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 21. 鈴木 孝幸 (すずき たかゆき) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 22. 鈴木 徹 (すずき とおる) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 23. 瀬立 モニカ (せりゅう もにか) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 24. 谷真 海 (たに まみ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 25. 鳥海 連志 (ちょうかい れんし) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 26. 土田 和歌子 (つちだ わかこ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 27. 富田 宇宙 (とみた うちゅう) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 28. 豊島 英 (とよしま あきら) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 29. 中西 麻耶 (なかにし まや) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 30. 中村 智太郎 (なかむら ともたろう) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 31. 日向 楓 (ひなた かえで) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 32. 廣瀬 隆喜 (ひろせ たかゆき) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 33. 藤井 友里子 (ふじい ゆりこ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 34. 藤澤 潔 (ふじさわ きよし) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 35. 藤田 征樹 (ふじた まさき) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 36. 藤本 怜央 (ふじもと れお) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 37. 堀越 信司 (ほりこし ただし) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 38. 道下 美里 (みちした みさと) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 39. 宮島 徹也 (みやじま てつや) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 40. 村岡 桃佳 (むらおか ももか) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 41. 山口 尚秀 (やまぐち なおひで) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 42. 山田 拓朗 (やまだ たくろう) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 43. 山田 美幸 (やまだ みゆき) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 44. 山本 篤 (やまもと あつし) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 45. 和田 伸也 (わだ しんや) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

Q2.Q1 であげた人は、2021 年に開催された東京パラリンピックに出場した選手です。「知っている」「聞いたことがある」と回答された選手の実施競技についてお答えください。

| | 13 射撃 | 14 卓球 | 15 トライアスロン | 16 馬術 | 17 パワートリフティング | 18 ボート | 19 ボッチャ | 20 陸上競技 | 21 バドミントン | 22 テコンドー | 23 わからない |
|-------------------------|----------|----------|---------------|----------|------------------|-----------|------------|------------|--------------|-------------|-------------|
| 1. 池 透暢(いけ ゆきのぶ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 2. 池崎 大輔(いけざき だいすけ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 3. 伊藤 智也(いとう ともや) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 4. 岩淵 幸洋(いわぶち こうよう) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 5. 上与那原 寛和(うえよなばる ひろかず) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 6. 浦田 理恵(うらた りえ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 7. 岡崎 愛子(おかざき あいこ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 8. 上地 結衣(かみじ ゆい) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 9. 唐澤 剣也(からさわ けんや) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 10. 川村 怜(かわむら りょう) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 11. 木村 敬一(きむら けいいち) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 12. 木村 潤平(きむら じゅんぺい) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 13. 国枝 慎吾(くにえだ しんご) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 14. 倉橋 香衣(くらはし かえ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 15. 香西 宏昭(こうざい ひろあき) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 16. 佐藤 友祈(さとう ともき) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 17. 里見 紗李奈(さとみ さりな) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 18. 島川 慎一(しまかわ しんいち) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 19. 杉浦 佳子(すぎうら けいこ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 20. 杉村 英孝(すぎむら ひでたか) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 21. 鈴木 孝幸(すずき たかゆき) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 22. 鈴木 徹(すずき とおる) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 23. 瀬立 モニカ(せりゅう もにか) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 24. 谷真 海(たに まみ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 25. 鳥海 連志(ちょうかい れんし) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 26. 土田 和歌子(つちだ わかこ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 27. 富田 宇宙(とみた うちゅう) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 28. 豊島 英(とよしま あきら) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 29. 中西 麻耶(なかにし まや) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 30. 中村 智太郎(なかむら ともたろう) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 31. 日向 楓(ひなた かえで) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 32. 廣瀬 隆喜(ひろせ たかゆき) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 33. 藤井 友里子(ふじい ゆりこ) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 34. 藤澤 潔(ふじさわ きよし) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 35. 藤田 征樹(ふじた まさき) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 36. 藤本 怜央(ふじもと れお) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 37. 堀越 信司(ほりこし ただし) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 38. 道下 美里(みちした みさと) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 39. 宮島 徹也(みやじま てつや) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 40. 村岡 桃佳(むらおか ももか) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 41. 山口 尚秀(やまぐち なおひで) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 42. 山田 拓朗(やまだ たくろう) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 43. 山田 美幸(やまだ みゆき) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 44. 山本 篤(やまもと あつし) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 45. 和田 伸也(わだ しんや) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

Q3.あなたは、2021年に開催された東京オリンピックをテレビやインターネット動画で観戦しましたか？(いくつでも)

- 1. テレビで中継番組を観た
- 2. テレビのニュース番組で観た
- 3. テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た
- 4. インターネット動画で中継を観た
- 5. インターネット動画でニュース番組を観た
- 6. インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た
- 7. (テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した
- 8. テレビやインターネットで観戦しなかった

Q4.あなたは、2021年に開催された東京パラリンピックをテレビやインターネット動画で観戦しましたか？(いくつでも)

- 1. テレビで中継番組を観た
- 2. テレビのニュース番組で観た
- 3. テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た
- 4. インターネット動画で中継を観た
- 5. インターネット動画でニュース番組を観た
- 6. インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た
- 7. (テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した
- 8. テレビやインターネットで観戦しなかった

Q5.あなたが、テレビやインターネット動画で観戦した 2021 年開催の東京パラリンピック競技は何ですか。(いくつでも)

※「観戦した」番組には、中継番組、ニュース番組、特集番組を含みます。

- 1. アーチェリー
- 2. 車いすラグビー
- 3. カヌー
- 4. 車いすフェンシング
- 5. 車いすテニス
- 6. 車いすバスケットボール
- 7. ゴールボール
- 8. 5人制サッカー
- 9. シットイングバレーボール
- 10. 自転車競技(ロード、トラック)
- 11. 柔道
- 12. 水泳
- 13. 射撃
- 14. 卓球
- 15. トライアスロン
- 16. 馬術
- 17. パワーリフティング
- 18. ボート
- 19. ボッチャ
- 20. 陸上競技
- 21. バドミントン
- 22. テコンドー
- 23. 開会式
- 24. 閉会式
- 25. わからない

Q6. 2021 年に開催された東京パラリンピックをテレビやインターネットで観戦して、どう思いましたか。

| | 1 よく 当てはまる | 2 やや 当てはまる | 3 あまり 当てはまらない | 4 まったく 当てはまらない |
|------------------------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1. 障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 2. 障害者スポーツを直接観戦したい | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 3. 2024年パリ・パラリンピックを直接観戦したい | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 4. 障害者スポーツを体験したい | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 5. 障害者スポーツのボランティアをしたい | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 6. 2024年パリ・パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 7. アスリートとして非常に優れていると感じた | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 8. 障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 9. 障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 10. 障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |

Q7.あなたは、2021 年に開催された東京オリンピック・パラリンピックのチケットを申し込みましたか？

- 1. オリンピックもパラリンピックも申し込みをした
- 2. オリンピックは申し込まなかったが、パラリンピックは申し込みをした
- 3. オリンピックは申し込んだが、パラリンピックは申し込まなかった
- 4. オリンピックもパラリンピックも申し込まなかった

Q8.2021年に開催された東京パラリンピックで実際にどの競技をお申込みになりましたか。

(いくつでも)

- 1. アーチェリー
- 2. 車いすラグビー
- 3. カヌー
- 4. 車いすフェンシング
- 5. 車いすテニス
- 6. 車いすバスケットボール
- 7. ゴールボール
- 8. 5人制サッカー
- 9. シットイングバレーボール
- 10. 自転車競技(ロード、トラック)
- 11. 柔道
- 12. 水泳
- 13. 射撃
- 14. 卓球
- 15. トライアスロン
- 16. 馬術
- 17. パワーリフティング
- 18. ボート
- 19. ボッチャ
- 20. 陸上競技
- 21. バドミントン
- 22. テコンドー
- 23. 開会式
- 24. 閉会式
- 25. わからない

Q9.あなたは日常生活の中で、障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがありますか。

- 1. ある
- 2. ない

Q10.あなたが日常生活の中で見る、障害のある人が行っているスポーツの種目をお書きください。複数ある場合は、主なものを最大3つまでお書きください。

- 1. バスケットボール
- 2. テニス
- 3. ジョギング・ランニング
- 4. サッカー
- 5. 陸上競技
- 6. 水泳
- 7. ウォーキング
- 8. サイクリング
- 9. ゲートボール
- 10. 卓球
- 11. 野球
- 12. バレーボール
- 13. ボッチャ
- 14. 筋カトレーニング
- 15. ヨーガ・ピラティス
- 16. その他【 】

Q11.あなたの身近に障害のある人がいますか。(いくつでも)

- 1. 自分自身が障害者である
- 2. 親族に障害のある人がいる
- 3. 職場に障害のある人がいる
- 4. 友人・知人に障害のある人がいる
- 5. 身近に障害のある人はいない

附録2

パラリンピアンに対する社会的認知度調査 集計表

| Q1 | あなたは、以下に示す人物について知っていますか。 単一回答 | 全体(N) | 1 | 2 | 3 |
|----|----------------------------------|-------|-------|----------|------|
| | | | 知っている | 聞いたことがある | 知らない |
| 1 | 池 透暢 (いけ ゆきのぶ) | 2060 | 1.8 | 1.9 | 96.3 |
| 2 | 池崎 大輔 (いけざき だいすけ) | 2060 | 3.5 | 5.2 | 91.3 |
| 3 | 伊藤 智也 (いとう ともや) | 2060 | 1.6 | 3.0 | 95.4 |
| 4 | 岩渕 幸洋 (いわぶち こうよう) | 2060 | 0.9 | 1.5 | 97.6 |
| 5 | 上与那原 寛和 (うえよなばる ひろかず) | 2060 | 1.3 | 2.5 | 96.2 |
| 6 | 浦田 理恵 (うらた りえ) | 2060 | 1.4 | 2.4 | 96.2 |
| 7 | 岡崎 愛子 (おかざき あいこ) | 2060 | 1.5 | 3.6 | 95.0 |
| 8 | 上地 結衣 (かみじ ゆい) | 2060 | 12.9 | 9.6 | 77.6 |
| 9 | 唐澤 剣也 (からさわ けんや) | 2060 | 0.7 | 1.8 | 97.5 |
| 10 | 川村 怜 (かわむら りょう) | 2060 | 0.9 | 2.0 | 97.1 |
| 11 | 木村 敬一 (きむら けいいち) | 2060 | 3.8 | 3.5 | 92.7 |
| 12 | 木村 潤平 (きむら じゅんぺい) | 2060 | 1.2 | 1.9 | 96.9 |
| 13 | 国枝 慎吾 (くにえだ しんご) | 2060 | 31.3 | 13.9 | 54.8 |
| 14 | 倉橋 香衣 (くらはし かえ) | 2060 | 1.0 | 1.9 | 97.1 |
| 15 | 香西 宏昭 (こうざい ひろあき) | 2060 | 1.7 | 2.3 | 96.0 |
| 16 | 佐藤 友祈 (さとう ともき) | 2060 | 2.1 | 2.3 | 95.6 |
| 17 | 里見 紗季奈 (さとみ さりな) | 2060 | 1.0 | 2.6 | 96.4 |
| 18 | 島川 慎一 (しまかわ しんいち) | 2060 | 0.9 | 1.5 | 97.7 |
| 19 | 杉浦 佳子 (すぎうら けいこ) | 2060 | 1.7 | 2.2 | 96.0 |
| 20 | 杉村 英孝 (すぎむら ひでたか) | 2060 | 1.8 | 1.8 | 96.4 |
| 21 | 鈴木 孝幸 (すずき たかゆき) | 2060 | 2.4 | 4.5 | 93.1 |
| 22 | 鈴木 徹 (すずき とおる) | 2060 | 0.9 | 3.4 | 95.7 |
| 23 | 瀬立 モニカ (せりゅう もにか) | 2060 | 2.3 | 4.8 | 92.9 |
| 24 | 谷真 海 (たに まみ) | 2060 | 2.8 | 2.3 | 95.0 |
| 25 | 鳥海 連志 (ちょうかい れんし) | 2060 | 3.3 | 2.8 | 93.9 |
| 26 | 土田 和歌子 (つちだ わかこ) | 2060 | 2.3 | 2.4 | 95.3 |
| 27 | 富田 宇宙 (とみた うちゅう) | 2060 | 3.4 | 7.9 | 88.6 |
| 28 | 豊島 英 (とよしま あきら) | 2060 | 0.7 | 1.9 | 97.4 |
| 29 | 中西 麻耶 (なかにし まや) | 2060 | 2.4 | 2.8 | 94.8 |
| 30 | 中村 智太郎 (なかむら ともたろう) | 2060 | 0.7 | 1.7 | 97.6 |
| 31 | 日向 楓 (ひなた かえで) | 2060 | 1.6 | 4.4 | 94.1 |
| 32 | 廣瀬 隆喜 (ひろせ たかゆき) | 2060 | 1.0 | 2.4 | 96.7 |
| 33 | 藤井 友里子 (ふじい ゆりこ) | 2060 | 0.9 | 1.6 | 97.6 |
| 34 | 藤澤 潔 (ふじさわ きよし) | 2060 | 0.8 | 1.3 | 98.0 |
| 35 | 藤田 征樹 (ふじた まさき) | 2060 | 0.7 | 1.7 | 97.7 |
| 36 | 藤本 怜央 (ふじもと れお) | 2060 | 2.0 | 3.8 | 94.2 |
| 37 | 堀越 信司 (ほりこし ただし) | 2060 | 0.8 | 2.3 | 96.9 |
| 38 | 道下 美里 (みちした みさと) | 2060 | 3.7 | 3.1 | 93.2 |
| 39 | 宮島 徹也 (みやじま てつや) | 2060 | 0.5 | 2.2 | 97.2 |
| 40 | 村岡 桃佳 (むらおか ももか) | 2060 | 1.9 | 3.9 | 94.2 |
| 41 | 山口 尚秀 (やまぐち なおひで) | 2060 | 1.1 | 1.7 | 97.2 |
| 42 | 山田 拓朗 (やまだ たくろう) | 2060 | 1.2 | 2.2 | 96.7 |
| 43 | 山田 美幸 (やまだ みゆき) | 2060 | 1.8 | 2.4 | 95.7 |
| 44 | 山本 篤 (やまもと あつし) | 2060 | 3.3 | 4.6 | 92.1 |
| 45 | 和田 伸也 (わだ しんや) | 2060 | 2.5 | 5.4 | 92.1 |

| Q2 | Q1であげた人は、2021年に開催された東京パラリンピックに出場した選手です。「知っている」「聞いたことがある」と回答された選手の実施競技についてお答えください。 | 全体(N) | 正誤率 (%) |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------|----------|
| | 単一回答 | | |
| 1 | 池 透暢 (いけ ゆきのぶ) | ウィルチェアラグビー | 76 36.8 |
| 2 | 池崎 大輔 (いけざき だいすけ) | 車いすラグビー | 180 28.3 |
| 3 | 伊藤 智也 (いとう ともや) | 陸上競技 | 95 9.5 |
| 4 | 岩淵 幸洋 (いわぶち こうよう) | 卓球 | 50 10 |
| 5 | 上与那原 寛和 (うえよなばる ひろかず) | 陸上競技 | 79 21.5 |
| 6 | 浦田 理恵 (うらた りえ) | ゴールボール(女子) | 78 23.1 |
| 7 | 岡崎 愛子 (おかざき あいこ) | アーチェリー | 104 8.7 |
| 8 | 上地 結衣 (かみじ ゆい) | 車いすテニス | 462 71.2 |
| 9 | 唐澤 剣也 (からさわ けんや) | 陸上競技 | 51 15.7 |
| 10 | 川村 怜 (かわむら りょう) | 5人制サッカー | 60 15 |
| 11 | 木村 敬一 (きむら けいいち) | 水泳 | 150 56.7 |
| 12 | 木村 潤平 (きむら じゅんぺい) | トライアスロン | 64 9.4 |
| 13 | 国枝 慎吾 (くにえだ しんご) | 車いすテニス | 932 81.7 |
| 14 | 倉橋 香衣 (くらはし かえ) | ウィルチェアラグビー | 60 15 |
| 15 | 香西 宏昭 (こうざい ひろあき) | 車いすバスケットボール(男子) | 82 30.5 |
| 16 | 佐藤 友祈 (さとう ともき) | 陸上競技 | 91 26.4 |
| 17 | 里見 紗李奈 (さとみ さりな) | バドミントン | 75 12 |
| 18 | 島川 慎一 (しまかわ しんいち) | ウィルチェアラグビー | 48 16.7 |
| 19 | 杉浦 佳子 (すぎうら けいこ) | 自転車競技 | 82 19.5 |
| 20 | 杉村 英孝 (すぎむら ひでたか) | ポッチャ | 75 37.3 |
| 21 | 鈴木 孝幸 (すずき たかゆき) | 水泳 | 143 38.5 |
| 22 | 鈴木 徹 (すずき とおる) | 陸上競技 | 89 9 |
| 23 | 瀬立 モニカ (せりゅう もにか) | カヌー | 147 21.8 |
| 24 | 谷真 海 (たに まみ) | トライアスロン | 104 20.2 |
| 25 | 鳥海 連志 (ちょうかい れんし) | 車いすバスケットボール(男子) | 126 57.1 |
| 26 | 土田 和歌子 (つちだ わかこ) | 陸上競技、トライアスロン | 97 30.9 |
| 27 | 富田 宇宙 (とみた うちゅう) | 水泳 | 234 36.8 |
| 28 | 豊島 英 (とよしま あきら) | 車椅子バスケットボール(男子) | 54 16.7 |
| 29 | 中西 麻耶 (なかにし まや) | 陸上競技 | 108 47.2 |
| 30 | 中村 智太郎 (なかむら ともたろう) | 水泳 | 49 10.2 |
| 31 | 日向 楓 (ひなた かえで) | 水泳 | 122 21.3 |
| 32 | 廣瀬 隆喜 (ひろせ たかゆき) | ポッチャ | 69 11.6 |
| 33 | 藤井 友里子 (ふじい ゆりこ) | ポッチャ | 50 8 |
| 34 | 藤澤 潔 (ふじさわ きよし) | 車椅子バスケットボール(男子) | 42 16.7 |
| 35 | 藤田 征樹 (ふじた まさき) | 自転車 | 48 6.3 |
| 36 | 藤本 怜央 (ふじもと れお) | 車いすバスケットボール(男子) | 119 22.7 |
| 37 | 堀越 信司 (ほりこし ただし) | 陸上競技 | 64 17.2 |
| 38 | 道下 美里 (みちした みさと) | 陸上競技 | 140 57.9 |
| 39 | 宮島 徹也 (みやじま てつや) | 車椅子バスケットボール(男子) | 57 14 |
| 40 | 村岡 桃佳 (むらおか ももか) | 陸上競技 | 120 12.5 |
| 41 | 山口 尚秀 (やまぐち なおひで) | 水泳 | 57 24.6 |
| 42 | 山田 拓朗 (やまだ たくろう) | 水泳 | 69 15.9 |
| 43 | 山田 美幸 (やまだ みゆき) | 水泳 | 88 34.1 |
| 44 | 山本 篤 (やまもと あつし) | 陸上競技 | 162 37.7 |
| 45 | 和田 伸也 (わだ しんや) | 陸上競技 | 163 11.7 |

| Q3 | あなたは、2021年に開催された東京オリンピックをテレビやインターネット動画で観戦しましたか？(いくつでも) 複数回答 | % |
|-----------|----------------------------------------------------------------|------|
| 1 | テレビで中継番組を観た | 59.5 |
| 2 | テレビのニュース番組で観た | 51.4 |
| 3 | テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た | 17.3 |
| 4 | インターネット動画で中継を観た | 5.8 |
| 5 | インターネット動画でニュース番組を観た | 4.2 |
| 6 | インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た | 2.1 |
| 7 | (テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した | 0.5 |
| 8 | テレビやインターネットで観戦しなかった | 25.3 |
| | 全体(N) | 2060 |

| Q4 | あなたは、2021年に開催された東京パラリンピックをテレビやインターネット動画で観戦しましたか？(いくつでも) 複数回答 | % |
|-----------|-----------------------------------------------------------------|------|
| 1 | テレビで中継番組を観た | 33.0 |
| 2 | テレビのニュース番組で観た | 42.9 |
| 3 | テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た | 11.7 |
| 4 | インターネット動画で中継を観た | 2.3 |
| 5 | インターネット動画でニュース番組を観た | 2.4 |
| 6 | インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た | 1.3 |
| 7 | (テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した | 0.4 |
| | 全体(N) | 2060 |

| Q5 | あなたが、テレビやインターネット動画で観戦した2021年開催の東京パラリンピック競技は何ですか。(いくつでも) 複数回答 | % |
|----|-----------------------------------------------------------------|------|
| 1 | アーチェリー | 6.1 |
| 2 | 車いすラグビー | 19.1 |
| 3 | カヌー | 2.1 |
| 4 | 車いすフェンシング | 2.5 |
| 5 | 車いすテニス | 46.2 |
| 6 | 車いすバスケットボール | 35.7 |
| 7 | ゴールボール | 11.0 |
| 8 | 5人制サッカー | 7.3 |
| 9 | シットティングバレーボール | 4.5 |
| 10 | 自転車競技(ロード、トラック) | 6.0 |
| 11 | 柔道 | 15.0 |
| 12 | 水泳 | 41.5 |
| 13 | 射撃 | 2.9 |
| 14 | 卓球 | 20.3 |
| 15 | トライアスロン | 6.3 |
| 16 | 馬術 | 2.3 |
| 17 | パワーリフティング | 1.7 |
| 18 | ボート | 1.6 |
| 19 | ボッチャ | 24.3 |
| 20 | 陸上競技 | 31.7 |
| 21 | バドミントン | 13.3 |
| 22 | テコンドー | 1.9 |
| 23 | 開会式 | 35.7 |
| 24 | 閉会式 | 29.8 |
| 25 | わからない | 8.5 |
| | 全体(N) | 1183 |

| Q6 | 2021年に開催された東京パラリンピックをテレビやインターネットで観戦して、どう思いましたか。 単一回答 | 全体(N) | 1 | 2 | 2 | 4 |
|----|---------------------------------------------------------|-------|---------|---------|------------|-------------|
| | | | よく当てはまる | やや当てはまる | あまり当てはまらない | まったく当てはまらない |
| 1 | 障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい | 1183 | 11.8 | 42.5 | 36.4 | 9.2 |
| 2 | 障害者スポーツを直接観戦したい | 1183 | 7.7 | 26.6 | 47.4 | 18.3 |
| 3 | 2024年パリ・パラリンピックを直接観戦したい | 1183 | 5.7 | 17.5 | 48.0 | 28.8 |
| 4 | 障害者スポーツを体験したい | 1183 | 5.7 | 22.2 | 48.6 | 23.5 |
| 5 | 障害者スポーツのボランティアをしたい | 1183 | 4.7 | 21.6 | 50.2 | 23.5 |
| 6 | 2024年パリ・パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい | 1183 | 3.6 | 12.2 | 46.6 | 37.7 |
| 7 | アスリートとして非常に優れていると感じた | 1183 | 36.8 | 39.6 | 16.7 | 6.9 |
| 8 | 障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた | 1183 | 24.7 | 45.6 | 21.9 | 7.8 |
| 9 | 障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた | 1183 | 17.8 | 50.5 | 24.7 | 7.0 |
| 10 | 障害者と話したい、もっと知りたいと思った | 1183 | 11.1 | 35.7 | 43.3 | 10.0 |

| Q7 | あなたは、2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピックのチケットを申し込みましたか？ 複数回答 | % |
|-----------|---------------------------------------------------------|------|
| 1 | オリンピックもパラリンピックも申し込みをした | 2.7 |
| 2 | オリンピックは申し込みなかったが、パラリンピックは申し込みをした | 1.0 |
| 3 | オリンピックは申し込んだが、パラリンピックは申し込みなかった | 6.6 |
| 4 | オリンピックもパラリンピックも申し込みなかった | 89.7 |
| | 全体(N) | 2060 |

| Q8 | 2021年に開催された東京パラリンピックで実際にどの競技をお申し込みになりましたか。(いくつでも) 複数回答 | % |
|-----------|-----------------------------------------------------------|------|
| 1 | アーチェリー | 6.5 |
| 2 | 車いすラグビー | 14.3 |
| 3 | カヌー | 6.5 |
| 4 | 車いすフェンシング | 9.1 |
| 5 | 車いすテニス | 27.3 |
| 6 | 車いすバスケットボール | 22.1 |
| 7 | ゴールボール | 7.8 |
| 8 | 5人制サッカー | 11.7 |
| 9 | シッティングバレーボール | 9.1 |
| 10 | 自転車競技(ロード、トラック) | 6.5 |
| 11 | 柔道 | 18.2 |
| 12 | 水泳 | 16.9 |
| 13 | 射撃 | 7.8 |
| 14 | 卓球 | 11.7 |
| 15 | トライアスロン | 7.8 |
| 16 | 馬術 | 7.8 |
| 17 | パワーリフティング | 11.7 |
| 18 | ボート | 6.5 |
| 19 | ボッチャ | 6.5 |
| 20 | 陸上競技 | 20.8 |
| 21 | バドミントン | 13.0 |
| 22 | テコンドー | 6.5 |
| 23 | 開会式 | 23.4 |
| 24 | 閉会式 | 15.6 |
| 25 | わからない・忘れた | 7.8 |
| | 全体(N) | 77 |

| Q9 | あなたは日常生活の中で、障害のある人がスポーツを行う光景を見ることがありますか。 複数回答 | % |
|-----------|--------------------------------------------------|------|
| 1 | ある | 9.4 |
| 2 | ない | 90.6 |
| | 全体(N) | 2060 |

| Q10 | あなたが日常生活の中で見る、障害のある人が行っているスポーツの種目をお書きください。 複数回答 | % |
|------------|----------------------------------------------------|------|
| 1 | バスケットボール | 23.2 |
| 2 | テニス | 19.1 |
| 3 | ジョギング・ランニング | 12.9 |
| 4 | サッカー | 12.4 |
| 5 | 陸上競技 | 18.0 |
| 6 | 水泳 | 18.0 |
| 7 | ウォーキング | 10.8 |
| 8 | サイクリング | 2.1 |
| 9 | ゲートボール | 4.6 |
| 10 | 卓球 | 5.7 |
| 11 | 野球 | 1.0 |
| 12 | バレーボール | 2.1 |
| 13 | ボッチャ | 10.3 |
| 14 | 筋力トレーニング | 6.2 |
| 15 | ヨーガ・ピラティス | 0.0 |
| 16 | その他【 】 | 8.8 |
| | 全体(N) | 194 |

| Q11 | あなたの身近に障害のある人がいますか。(いくつでも) 複数回答 | % |
|------------|------------------------------------|------|
| 1 | 自分自身が障害者である | 3.3 |
| 2 | 親族に障害のある人がいる | 9.8 |
| 3 | 職場に障害のある人がいる | 5.2 |
| 4 | 友人・知人に障害のある人がいる | 7.7 |
| 5 | 身近に障害のある人はいない | 76.4 |
| | 全体(N) | 2060 |

附録 3

ユニ★スポ調査票

『チャレンジ！ ユニ★スポ』^{かいめ}1回目アンケート』^{じぜんがくしゅうまえ}(事前学習前)

Q1. あなたの性別は？(どれかに○) ^{おとこ}男 ^{おんな}女 ^{こたえたくない}こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ ^{しょう}小・^{ちゅうがっこう}中学校 ^{ねんせい}年生

Q3. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

- 1) 障害のある人と仲良くできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？
はい ・ いいえ ・ わからない

Q4. 東京2020 オリンピック・パラリンピックに興味ありますか？(どれかに○)

- () どちらも興味ある () オリンピックだけ興味ある
() パラリンピックだけ興味ある () どちらも興味なし

Q5. 知っている障がい者スポーツがあれば種目名を書いてください。(知っている人だけ)

Q6. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 困っている () 個性的 () 手伝いが必要
() 不便なことがある () その人らしさ () リハビリ
() 自由に動けない () できることがある () 単いす

Q7. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

- () 楽しそう () 大変そう () チャレンジしてみたい
() 不便 () 激しい () 障害者のためのもの

^{しつもん}※質問は裏にもあります。^{うら}裏に進んでください。^{うら} ^{すす}

Q8. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- () 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ () スポーツのルールを変えること
 () 障害者スポーツの本や資料 () 障害のある友達と相談すること
 () 障害者スポーツ専用の道具や場所 () サポートすること

Q9. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かさない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう
 () 友だちも楽しめるように、ルールを変える
 () あまりボールを渡さないようにしてあげる
 () みんなが車いすにのって、車いすバスケをする
 () 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう
 () ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生日 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

| あなたの苗字の最初の文字(平かな) | あなたの名前の最初の文字(平かな) | 誕生日 | 誕生日の最初の数字 | 出席番号の下2桁 |
|-------------------|-------------------|-----|-----------|----------|
| や | は | 8 | 2 | 50 |

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

| あなたの苗字の最初の文字(平かな) | あなたの名前の最初の文字(平かな) | 誕生日 | 誕生日の最初の数字 | 出席番号の下2桁 |
|-------------------|-------------------|-----|-----------|----------|
| | | | | |

『チャレンジ！ ユニ★スポ』 2回目アンケート (体験会直後)

Q1. あなたの性別は？ (どれかに○) 男 女 こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ _____ 小・中学校 年生

Q3. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

- 1) 障害のある人と仲良くできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？
はい ・ いいえ ・ わからない

Q4. ボッチャの感想であなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(いくつでも)

- () 思っていたより面白かった () 思っていたとおりがた
- () 思っていたほど面白くなかった () 面白くなかった
- () 友達とボッチャをやってみたい () ボッチャ以外の障害者スポーツをやってみたい

Q5. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 困っている () 個性的 () 手伝いが必要
- () 不便なことがある () その人らしさ () リハビリ
- () 自由に動けない () できることがある () 単いす

Q6. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

- () 楽しそう () 大変そう () チャレンジしてみたい
- () 不便 () 激しい () 障害者のためのもの

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。

Q7. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- () 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ () スポーツのルールを変えること
 () 障害者スポーツの本や資料 () 障害のある友達と相談すること
 () 障害者スポーツ専用の道具や場所 () サポートすること

Q8. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう
 () 友だちも楽しめるように、ルールを変える
 () あまりボールを渡さないようにしてあげる
 () みんなが車いすにのって、車いすバスケットをする
 () 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう
 () ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生月 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

| あなたの苗字の最初の文字(平かな) | あなたの名前の最初の文字(平かな) | 誕生月 | 誕生日の最初の数字 | 出席番号の下2桁 |
|-------------------|-------------------|-----|-----------|----------|
| や | は | 8 | 2 | 50 |

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

| あなたの苗字の最初の文字(平かな) | あなたの名前の最初の文字(平かな) | 誕生月 | 誕生日の最初の数字 | 出席番号の下2桁 |
|-------------------|-------------------|-----|-----------|----------|
| | | | | |

『チャレンジ！ ユニ★スポ』3回目アンケート (体験会から数ヵ月後)

Q1. あなたの性別は？ (どれかに○) 男 女 こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ _____ 小・中学校 年生

Q3. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

- 1) 障害のある人と仲良くできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？
はい ・ いいえ ・ わからない

Q4. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 困っている () 個性的 () 手伝いが必要
() 不便なことがある () その人らしさ () リハビリ
() 自由に動けない () できることがある () 重い

Q5. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

- () 楽しそう () 大変そう () チャレンジしてみたい
() 不便 () 激しい () 障害者のためのもの

Q6. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- () 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ () スポーツのルールを変えること
() 障害者スポーツの本や資料 () 障害のある友達と相談すること
() 障害者スポーツ専用の道具や場所 () サポートすること

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。

Q9. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「**重いすに乗っている、手足をうまく動かさない友だち**」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう
- 友だちも楽しめるように、ルールを変える
- あまりボールを渡さないようにしてあげる
- みんなが重いすにのって、重いすバスケをする
- 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう
- ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生月 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

| あなたの苗字の最初の文字(平がな) | あなたの名前の最初の文字(平がな) | 誕生月 | 誕生日の最初の数字 | 出席番号の下2桁 |
|-------------------|-------------------|-----|-----------|----------|
| や | は | 8 | 2 | 50 |

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

| あなたの苗字の最初の文字(平がな) | あなたの名前の最初の文字(平がな) | 誕生月 | 誕生日の最初の数字 | 出席番号の下2桁 |
|-------------------|-------------------|-----|-----------|----------|
| | | | | |

『チャレンジ！ユニ★スポ』アンケート (体験会から約1年経過後)

Q1. あなたの性別は？ (どれかに○) 男 女 こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ _____ 小・中学校 卒業

Q3. ボッチャ体験会のあと、ボッチャをやる機会がありましたか。(どれかに○)

1) やる機会があった。 ・ なかった ・ 覚えていない。

↓

2) やる機会があった人は、何回ぐらいやりましたか？

1～3回ぐらい ・ 4～6回ぐらい ・ 7回以上

Q4. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

1) 障害のある人と仲良くできる？

はい ・ いいえ ・ わからない

2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？

はい ・ いいえ ・ わからない

3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？

はい ・ いいえ ・ わからない

Q5. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

() 困っている () 個性的 () 手伝いが必要

() 不便なことがある () その人らしさ () リハビリ

() 自由に動けない () できることがある () 重い

Q6. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

() 楽しそう () 大変そう () チャレンジしてみたい

() 不便 () 激しい () 障害者のためのもの

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。

Q7. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- () 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ () スポーツのルールを変えること
 () 障害者スポーツの本や資料 () 障害のある友達と相談すること
 () 障害者スポーツ専用の道具や場所 () サポートすること

Q8. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう
 () 友だちも楽しめるように、ルールを変える
 () あまりボールを渡さないようにしてあげる
 () みんなが車いすにのって、車いすバスケットをする
 () 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう
 () ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生月 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

| あなたの苗字の最初の文字(平がな) | あなたの名前の最初の文字(平がな) | 誕生月 | 誕生日の最初の数字 | 出席番号の下2桁 |
|-------------------|-------------------|-----|-----------|----------|
| や | は | 8 | 2 | 50 |

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

| あなたの苗字の最初の文字(平がな) | あなたの名前の最初の文字(平がな) | 誕生月 | 誕生日の最初の数字 | 出席番号の下2桁 |
|-------------------|-------------------|-----|-----------|----------|
| | | | | |

調査報告書の各種データについて

本報告書の各種データは当財団ホームページにて公開しています。

報告書のPDF データの他に、調査票データ等も公開予定です。

🔍 検索



2021(令和3)年度
障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究

－ 障害者スポーツ選手キャリア、テレビ放送、選手認知度、ユニ★スポ体験の効果に着目して －

2022年3月 発行

発行者 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

Yamaha Motor Foundation for Sports (YMFS)

〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500

TEL 0538-32-9827 FAX 0538-32-1112

ISBN 978-4-9910824-3-6

© ヤマハ発動機スポーツ振興財団

本報告書の内容を引用された場合、その掲載部分の写しをYMFSにご送付ください。



公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

ISBN 978-4-9910824-3-6

2021 (令和3) 年度

障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究

－ 障害者スポーツ選手キャリア、テレビ放送、選手認知度、ユニ★スポ体験の効果に着目して －